

〔表紙〕

齊興公史料

(市來四郎編)

嘉永元年 (一)

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料(紙數四十枚)」の記載あり〕

目録

齊彬公御事蹟総覽

齊興公日隅州海岸御巡視

喜界島ニ米国捕鯨船来ル

德島ニ異国船来リ海陸ヲ測量ス

德島ニ英国軍艦来リテ測量ス

外夷ヲ掃ハント伊勢大廟ニ禱ラセ玉フ

松平玄蕃頭藩士ノ野外演習ヲ幕府ニ請フ

般若院新築異賊降伏ヲ祈ラシム

第二公子寛之助君御天亡布告

二階堂志津馬在府中乘輿願

市田右近ヲ譴責ス

参考 江田平藏日記抄

参考 種子島時防記事抄

松前侯ヨリ通知書留守居役所日記抄

参考 鎌田正純家記抄

参考 前全人日記抄

参考 江田平藏日記抄

参考 黒田家々記抄

参考 上杉家記抄

和蘭人風説書

大森村ニ大筒場創設布告

柳營大小吏員及大小名総計嘉永元七月調

参考 平田宗高家記抄

以上二十三条

弘化五年戊申三月十五日嘉永ト改元鹿尾島ニ於テハ同月廿八日布告

紀元二千五百八年 清曆道光二十八年  
西曆千八百四十八年

孝明天皇 第百廿  
世統仁 即位三年

將軍家慶公 (第十三世) 襲職十三年

藩主齊興公 (第廿七世) 知政三十九年

六〇二 齊彬公御事蹟総覽

○本文書は第五七一号文書と同文により略す。

六〇三 齊興公日隅州海岸御巡視

○本文書は第五七三号文書と同文により略す。

六〇四 喜界島ニ米国捕鯨船来ル

○本文書は第五七四号文書と同文により略す。

六〇五 徳島(之脱カ)ニ異国船来リ海陸ヲ測量ス

○本文書は第五七五号文書と同文により略す。

六〇六 徳島(之脱カ)ニ英国軍艦来リテ測量ス

○本文書は第五七六号文書と同文により略す。

六〇七 外異ヲ掃ハント伊勢大廟ニ禱ラセ玉フ

○本文書は第五七七号文書と同文により略す。

六〇八 松平玄蕃頭藩士ノ野外演習ヲ幕府ニ請フ

○本文書は第五七八号文書と見出しは異なるが内容は同一により略す。

六〇九 般若院新築異賊降伏ヲ祈ラシム

○本文書は第五七九号文書と同文により略す。

六一〇 第二公子寛之助君御天亡布告

○本文書は第五八〇号文書と同文により略す。

六一一 二階堂志津馬在府中乗輿願

○本文書は第五八一号文書と同文により略す。

六一二 市田右近ヲ譴責ス

○本文書は第五八二号文書と同文により略す。

六一八 参考 江田平藏日記抄

○本文書は第五八八号文書と同文により略す。

六一三 参考 江田平藏日記抄

○本文書は第五八三号文書と同文により略す。

六一九 参考 黒田家々記抄

○本文書は第五八九号文書と同文により略す。

六一四 参考 種子島時昉記事抄

○本文書は第五八四号文書と同文により略す。

六二〇 参考 上杉家記抄

○本文書は第五九〇号文書と同文により略す。

六一五 松前侯ヨリ通知書留守居役所日記抄

○本文書は第五八五号文書と同文により略す。

六二一 和蘭人風説書

○本文書は第五九一号文書と同文により略す。

六一六 参考 鎌田正純家記抄

○本文書は第五八六号文書と同文により略す。

六二二 大森村ニ大筒場創設布告

○本文書は第五九二号文書と同文により略す。

六一七 参考 鎌田正純日記抄

○本文書は第五八七号文書と同文により略す。

六二三 柳營大小吏員及大小名総計

○本文書は第五九三号文書と同文により略す。

六二四 参考 平田宗高家記抄

○本文書は第五九四号文書と同文により略す。

〔表紙〕

# 齊興公史料

市來四郎編  
嘉永元年 (三)

〔扉に表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数四六枚）の記載あり」〕

## 目録

- 海防ニ付地頭職ノ転命
- 齊興公大隅地方巡視
- 参考 鎌田正純日記抄
- 島津周防ニ海防掛ヲ命ス
- 御軍賦改正令
- 以上五条

六二五 海防ニ付地頭職ノ転命

正月

十一日

齊興公ハ時勢日ニ益切迫シ大ニ警ムル所アリテ、海岸枢要ノ位地ニ於ケル地頭職ヲ撰択転命セシメラル、

参考

小根占

鎌田刑部

右別段之以思召、左之通地頭所繰替被仰付候、

正月十一日 豊後島津久宝

山川

喜入壬生

右同文

指宿

頼娃織部

右同文

大根占

川上式部

右同文

佐多

川上龍衛

右同文

六二六 齊興公大隅地方巡視

○本文書は第五七三号文書とほぼ同文なれども再掲す。

二月

三日齊興公隅州海岸巡視トシテ御出発、各所ニ於テ操練或ハ海岸砲台試射或ハ砲台増築ヲ命セラレ、国老調所笑左衛門、用人兼軍事勤二階堂志津馬・海老原宗之丞其他軍事掛ノ役吏数十名・兵士五十名・大砲手二十余名随從セリ、其巡視ノ郷村左ノ如シ、

蒲生

國分

福山

市成

末吉

岩川

志布志

柏原

高山

大始良

小根占

大根占

垂水

櫻島

六二七 参考 鎌田正純日記抄

弘化五年

二月

二日晴

明三日ヨリ 太守様蒲生御差入ニテ、夫ヨリ福山牧内ニヲヒテ砲術調練被遊 御覽筈ニテ、拙者モ差引トシテ被遣候段ハ先達テ被仰付置候付、明日ヨリ差越ノ由御側役並ニ表御用人へ口達ヲ以テ届申出、尤福山ヨリ

地頭所小根占郷ノ方へ差越 上様奉待上賦ニ候、左候  
テ四ツ半頃頼合御暇イタシ帰家、川畑源之助・園田宗  
次郎其外昨日同断、後川畑代リ山次左衛門ニテ候事、

三日晴

来ル六日福山牧内ニ於テ御流義砲術訓練御覽ニ付、為  
差引被差越 大守様今日ヨリ御発駕、蒲生御差入ニテ  
國分・福山・肝付表小根占ノ諸所御巡見ニ付九ツ時出  
宅、地頭取次上村源七殿同伴吉野庄屋役所へ立寄、川  
上式部美久殿同氏龍衛殿相揃、夫レヨリ重富客屋へ相休、  
加治木町泊ニテ暮過着致止宿候、供役人左之通リ

近習役

川畑源之助

角野藤兵衛

山次左衛門

池田猪早太

園田宗次郎

鍵

脇田六郎右衛門

小者

吉原太郎

中間 脇田六郎太  
右外鉄砲二挺・玉葉箆筈・両掛荷・合羽籠二荷・乗馬  
駕籠ニテ候事、

六日

福山郷牧場ニ於テ新古大小砲術ノ試射及ヒ隊伍ノ運動  
アリ、齊興公ニハ棧敷内ヨリ之レヲ覽玉ヒ、終リテ上  
役ヲ膝下ニ招キ、今后猶奨励スヘキノ詞ヲ与へ、洋式  
銃砲手五十余名ノミヲ率ヒ、他ハ皆帰廳セシメ、市成  
ニ向ヒ出発セラレタリ、其砲種左ノ如シ、

五十斤白砲

一座 燒彈・光彈・烟彈  
爆裂彈・各六發

十六斤白砲

二座全

十五吋忽砲

二座全

二十四斤野戰重砲

二門 實彈・爆裂彈・散  
彈・烙彈各六發

十八斤同

二門全

十二斤同

二門全

六斤 同

二門全

七百日野戰砲

十門 實彈・散  
彈各十五發

五百目野戰砲

十五門全

小銃隊「ゲヘ」銃

十二隊

八日

城下六組各二隊宛ノ人員一隊九十六名

和式天山流銃手百二十名十匁銃火繩機

百目野戰砲

六門同流ノ製  
式車砲

而シテ其用ノ大砲運搬ハ鹿兒島城下海岸ヨリ船ニ積ミ

小銃隊ハ陸路十余里ヲ行軍セシカ、演習地ニ赴クニハ

大砲運搬牛車ヲ用ヒ、峻峻ナル福山阪「坂」ヲ曳上ルニ甚困

難ヲ極メ、就中五十斤臼砲・二十四斤砲ノ如キハ牛数

頭ヲ要シタルカ運搬及ヒ行軍法上發明スル所甚尠カラ

ス、又五十斤臼砲等ハ鹿兒島灣頭ナル大・小根占郷ニ

運搬スヘキ旨ヲ令セシカ、之レ該地ハ灣内咽喉ノ要衝

ニシテ、砲台建築ノ地ニ於テ試射センカ為メナリ、

六日晴

今日調練 御覽ニ付、晝七ツ半過ヨリ打立牧内（福山郷  
牧場ヲ云フ）へ出張、四ツ時分ヨリ相初、調練之跡ヨリ

馬上ニテ相付、左候テ八ツ時分成田・青山・野村三家

共首尾能相濟 上様御立有之、夫ヨリ市或へ相休、百

引泊ニテ暮時分着致止宿候事、

二十四日

齊興公志布志郷夏井村闕外ノ海浜ニ於テ、大小砲銃ノ

演習ヲ覽ラレシカ、銃砲手ハ嚮キニ福山原ニ於テ操練

セシモノニシテ、野戰砲ハ同郷ニ備へ置タル七百目・

五百目等ナリ、

十日

大根占郷島濱村ノ海浜ニ於テ、大小銃砲ノ演習アリ、

十三日

小根占郷邊田村海浜ノ砲台ニ備フル処ノ大砲十二斤・

七百目各一門ノ遠撃、及ヒ小銃（「ゲベール」銃）演習

ヲナサシメ、終リテ其率ユル砲銃手ハ山川港ニ渡海シ、

砲台建築ノ地ヲ巡リ掃蕩スヘキ命シ（「マヤ」）、公ハ垂水郷等ヲ

經テ帰城ノ途櫻島洗出ニテ操練ヲ覽玉ヘリ、從來藩主

カ封内ヲ巡視セラル、ニハ、勝水名地域ハ神社仏閣ノ

ミナリシニ、今回ノ如ク兵士ヲ從へ各所ニ或ハ操練或

ハ文武ノ試業ヲ催シ玉ヒシハ、実ニ前代未聞ノコトナ

リキ、

二十四日



大小砲銃既ニ開ケ甲冑不用ニ属シタレトモ、旧慣墨守ノ輩未タ尠ナカラス、之ヲ一洗センニハ自ラ悟覚ノ念ヲ起サシムルニ如カス、殊ニ軍制改革ノ必要モアレハ

トテ、甲冑操練ヲ令シ、其用ユル処ノ甲冑ハ牛皮製煉ヒ唱フ或ハ從來ノ鉄胴等モ混用セシカ、牛皮製ノモノハ

甲冑製作局ニ於テ輕便ヲ主トシタル製式ナリ、銃砲手皆甲冑ヲ着シ大小刀ヲ帶ヒ、隊伍ヲ組ミ放發教刻ニ及ヒタリシニ、身体ノ疲勞ハ無論運動自由ナラサレハ初

テ其不便ナルヲ悟リ、断然甲冑ヲ廃スルコト、ナレリ(海老原清濤カ記ニ、甲冑廢棄ノコトハ齊彬公カ齊興公ニ上言ニ依レリト)、

二十四日晴

今日於磯御茶屋下、御流義砲術・甲冑帶刀ノ調練御覽

ニ付、暁七ツ半時分出宅、大砲稽古場(砲術館ヲ指ス)

之様出席、御軍神へ拜礼、夫ヨリ磯加治木別荘(加治木郷領主カ別邸ヲ指ス)揃ニテ衆溜招所へ銘々差越、八ツ

後調練相初、七ツ後首尾能相濟、左候テ又々加治木別荘へ相集、夫ヨリ稽古場ノ様行列(行列ニテ行軍ヲ指ス)

ニテ差越、我々共並ニ御門人中へ御酒肴被下致頂戴、日入過帰宅、供左之通、

川畑源之助

山次左衛門

角野藤兵衛

池田猪早太

園田宗次郎

濱田伊兵衛

右之内ヨリ鉄砲ニ挺持其外纏・旗・鎗小者、乗馬中間兩人、右足輕大小差、玉葉簞司・陣丹荷・合羽籠二荷為持候、拙者服野羽織・野袴、供廻股引・野羽織、足輕股引・看板尤何レモ半首ニテ候事、

三月

廿四日

喜界島ニ異国船一艘漂着シ、同港内四・五町許ノ所ニ投錨、食料薪水ヲ請フ、居ルコト一昼夜ニシテ去ル(或ハ二昼夜ト記ス、何レカ是ナリヤ)乗組人十三名、蓋シ亞米利加国ノ捕鯨船ナリト、

四月

十九日曇間々晴

今日ハ田之浦種子島彈正殿別荘濱崎飯屋前海ニ於テ、

御流義大砲船打調練、太守様御視有之、調所笑左衛門

殿海上へ乗出ニ付、川上式部・川上龍衛・拙者ニモ乘

出候様、一昨日御側役二階堂志津馬ヨリ承知ニ付、五

ツ半ヨリ出宅略中鑄製方（鑄製方ハ大砲鑄場ノ通唱）へ出席

略、九ツ時分出船、風波強ク大鐘時分調練漸ク相済、

夫ヨリ亦々鑄製〔方脱之〕之様差越候云々、

十九日出ノ浦前海ニ於テ大小ノ和船數十艘ヲ櫛シ、新古

式ノ小砲ヲ具へ擬戦試発アリ、藩主齊興公其海岸種子島

彈正ノ別第ニ臨シ之ヲ覽ス、折柄海波悪シク為メニ運動

自在ナラス、或ハ暈醉〔暈〕謳吐スルモノアリシカ、今ヤ兎戯

ニ類スル如キモ、當時ハ以テ一大壮挙トセリ、

二十六日曇昼時雨

今日ハ於谷山中之鹽屋、御名代島津周防殿並ニ御家老

衆調所笑左衛門殿初メ御流義砲術打方調練等御見分有

之、朝六ツ半時ヨリ出宅ニテ差越昼過相済退席、七ツ

半時分帰家、供人左之通、

角野藤兵衛

園田宗次郎

其他鍵小者昨日同断、馬上ニテ候付中間脇田六郎次ニ

テ候事、

但掛之人数六人共出張ニテ候事、

谷山郷中之鹽屋村ノ大砲射擲場ニ於テ和洋砲術試験アリ

洋式砲ハ二十四斤・十八斤・十二斤・六斤砲各一門、五

十斤・十六斤白砲各一門ヲ以テ遠的射撃ヲ試ミ（十二丁ノ

地ニ標的ヲ立ツ）、天山流ハ新製ノ一貫目砲一門ヲ用ヒ（

鉛彈ヲ用ユ）、尋テ新古或銃隊ノ運動アリ（古式ハ天山流）、

島津周防（久光公旧名）ヲシテ代覽セシメ、一門三家其他

国老調所等ヲ初メ軍事ニ関スル大小ノ吏員皆臨場ス、是

レ軍賦改正銃砲隊一変セントスルモ、各流派アリテ一定

ノ制ヲ定ムルコト能ハス、故遠撃ヲ行ヒ優劣ヲ試ミ、衆

ニサント〔示脱カ〕ノコトナルカ、親覽ノ輩實際ノ功力ヲ知り、利

否ノ差大ナルヲ察シ大ニ開悟セントナム、

六二八 島津周防ニ海防掛ヲ命ス

四日

日

公ハ大ニ成ス所アリテ、前述ノ如ク数十回ノ新古大小砲  
銃術ノ射撃運動ヲ試ミラレシニ、如何ニ頑然タル古式尊  
崇派モ今ヤ較開悟シ、殊ニ頻年外夷ハ頻リニ边境ヲ覘ヒ  
国難ノ兆アルノミナラス、幕旨モアレハ海岸ノ防備一日  
モ忽ニス可ラストテ、則チ島津周防ニ其事ヲ命シ統テ諸  
般ノ改革ヲ行ワレタリ、

島津周防久光  
旧名

近年長崎表・相州浦賀辺其外領内琉球等へ、異国船追

々漂来、剩琉球へハ佛英人共ニ滞留、何分不輕時節勞

ニ付、海岸防禦之儀従公儀被仰出、殊ニ領内之儀ハ專

海岸引受之事情ニ付、以前ヨリ之手当モ嚴重之事情得

共、今度改テ手当ト申ニハ無之候得共、折々渡来ニ付

テハ何レ大砲ヲ以防禦無之候テハ、逆モ敵対不相調ハ

眼前之事ト存候、仍テ軍役方モ大中様貴久・貫明様義久・

松齡様義弘御執行之御流儀ニ基キ、専大砲等備組之主ニ

取用候、此度右二条共ニ御先代之御流儀ニ作法相建候

ニ付、先達テ同列内匠(加治木領主)并其方へモ軍役名

代申付候、尤当秋参府モイタシ候ハ、跡之儀ハ其方

へ諸事指揮イタシ候様申付候趣モ、公辺へ御届イタシ

置候儀ハ誠ニ不輕事ニ付、留守中之儀ハ軍役ニ不限、

当時改革中別テ政事向旁念遣存候間、其方一往家老座

へ出席、諸事家老中ヨリ相談ヲモ承リ、品ニ寄候テ則

チ直ニ可承候、

右申聞趣懸心頭、家老中申談万端氣ヲ付宜可取計候事

同月

日

一宗門方掛(幾利支丹宗及ヒ一向宗ヲ禁制ノ事ヲ掌ル一局ナリ)

一唐船掛(軍事及清国・朝鮮国又ハ外国船漂来等ノ事ヲ掌ル一  
局ナリ)

局ナリ)

右ハ是迄異国船掛ニテ致取扱来候へ共、御引取ニ付、

以来御家老座ニテ致取扱候様被仰付候条、此旨向々へ

可致通達候、

五月

笑左衛門

同月

日

御軍役御手当掛

成田正右衛門<sub>之正</sub>

右ハ今般以思召海岸防禦其外都テ御流儀砲術専用之御  
手当被仰付候付、右之通掛被仰付候条、御領内一統御  
入門之者共ヘ致指南、往々屹ト御用立候様可致教導候、  
左候テ大砲鑄製被仰付候ニ付テハ、別テ不容易事候付、  
時々鑄製方ヘ出勤、掛之面々遂吟味、万端行届候様可  
致心添旨被仰付候条可申渡候、

五月

笑左衛門

御入門云云ハ当時事情アルアリテ御流儀ノ名ヲ設ケ新式  
砲術教誘ノ一手段トシ、旧式ヲ墨守ノ輩開悟セサルヲ故  
ニ、茲ニ新式ヲ御流儀ト唱ヘ、練習館ヲ創設シ軍事専用  
ノ旨ヲ示シ、入門式ヲ行ヒ鄭重ニ訓導ノ道ヲ開キ玉ヒシ

カハ、日ナラスシテ一般入門スルニ至レリ、然レトモ天

山流ノ師範青山某ハ猶開悟セサルノミナラス、訓諭ニ抵  
抗シタルニ由リ断然師範ヲ停止セラレ、又成田ハ元來鑄  
造ヲ稼業トセシモノナレトモ、傍荻野流或ハ鑄木謙藏ニ  
就テ学ヒ、遂ニ師範ヲ命セラレシモノナルカ、後大ニ見  
ルアリテ高島カ新式砲術ヲ学ヒタリ（高島カ曰砲其他ノ鑄  
製ハ専ラ成田ニ托シタリト云フ）、

五月

日

田中清左衛門

右ハ先祖代ヨリ甲州流軍術師範家ニテ、御扶持米四石  
（武芸師範ヲ命シタル者ニハ威扶持米四石ヲ与ヘタリ、兵学モ  
同シ）被下置候得共、此節師範家并被成下候御扶持米差  
上、家ニ付伝來之書籍惣テ御軍役方ヘ差上度旨願申出  
御軍賦ニ付テハ御先代御三方貴久・義久・義弘御時代之御軍法  
ヲ基本ニ相立、其外和漢之作法ヲ用捨致斟酌、一家之  
流儀ニ不泥、宜ニ随ヒ取調、外国防禦之御手当致全備

候様被仰出、御備向モ追々堅固ニ御治定、御先代様之

六二九 御軍賦改正令

御作法御中興ニ相成候、軍学之儀ハ人数駈引進退致指

八月十八日

揮事候処、甲州軍学之内ニモ、古流新流伝来之次第ニ

御軍役人数賦等之次第、御先代様御作法ヲ基本ニ相

寄り流儀相分レ、向々指南イタシ候テハ、現事ニ臨ミ

立、尚又用捨致斟酌、左之通被仰付候、

何レモ習得候趣ニ応シ立廻リ、隊伍進退不揃様相成、

一知行高石〔百駄カ〕ニ付從卒二人主從三人之出役被仰付候、

一体之御備ニ致相違、此節格別之思召ヲ以被召建候御

一知行高百石ニ余リ沓人前不相成端高並沓人前不引足小

軍備之妨可罷成、旁存慮之趣共別テ心入〔悉〕奇特成儀ニ思

高之分ハ被屯置、小高・無高之諸士へ配当被仰付候、

召上候、依之願之通師範家并書籍差上候様被仰付候、

一高持主病氣幼少等ニテ其家内ヨリ出役不相調者、又ハ

左候テ是迄多年数多之門人共教導方付テハ、旁入価ニ

寺社領高之儀ハ、右全断小高・無高之諸士へ配当役被

モ為相及筈候付、別段之御取訳ヲ以一往御扶持米是迄

仰付候、

之通被下置候、

一陣中飯米之儀、五拾石以上三拾日、四拾九石ヨリ三拾

右可申渡候、

石迄ハ廿日自飯米被仰付候、式拾九石ヨリ以下ハ御物

五月

御構被仰付候条、兼テ其心得ニテ可致用意置候、

笑左衛門

乘馬兩馬相立候儀左之通被仰付候、

田中ハ元来甲州古式ノ師範家ナリト雖トモ、洋式ノ大小

一寄合并以上無格小番以下一統、高頭二百五十石ヨリ馬

砲銃ノ精妙ナルニ感シ、自ラ請フテ家伝ノ書類ヲ収メ其

一疋不断相立置候様被仰付候、左候テ千石ヨリハ二疋

職ヲ辞シタルハ、時勢ヲ看破シタルモノト云フヘシ、

千五百石ハ三疋、万石迄モ其賦ヲ以致立馬置候様被仰

付候、尤応高頭過分之及疋数候向ハ、家中等へ為飼置

候儀可為勝手次第候、

但御役料高モ自高同様被仰付候、

一御側役以上并地頭所被下置候面々ハ、持高二百五十石

以下ニテモ、馬卷疋ツ、定立馬イタシ置候様、尤御側

役以上ハ平日登城之節乘馬勝手次第被仰付候、

一江戸京大坂御留守居・御納戸奉行・物頭・御使番之儀

ハ、依時宜一隊之物主等騎馬役被仰付身柄ニ候故、二

百五十石以下ニテモ、成丈定立馬イタシ置候様被仰付

候、

一寄合並以上之儀ハ登城之節乘馬ニテ登城可被致段ハ、

安永二年被仰渡置候付、弥其通可被相心得候、

但御留守居以下ノ御役ハ、乘馬ニテ登城之儀ハ遠慮

可有之候、

右之通被仰付候条、人々謹テ奉承知、兼テ質素節儉等追

々被仰渡趣堅相守、御軍役無滞相勤候儀肝要之事ニ候、

此旨向々ハ不洩様可致通達候、

八月十八日

近江上全

別冊

高千石之御軍賦

一乘馬 二疋

一中間 四人

一馬印 一本

一同持 二人

一旗 一本

一旗指 一人

一甲持 一人

一用具箱 二荷

一同持夫 二人

一具足箱 一荷

一同持夫 一人

一家来 七人

一手槍 一本

一同持 一人

一弓台 一肩  
一同持 一人

合上下二十一一人

陣中三十日自飯米

高五百石之御軍賦

一乘馬 一疋

一中間 二人

一馬印 一本

一同持 一人

一旗 一本

一旗指 一人

一用具 一荷

一同持 一人

一家来 四人

一手鑰 一本

一同持 一人

合上下十一一人

陣中三十日自飯米

御手当用意品銘々支度

一陣笠又ハ半首

一股引

一草鞋

一陣羽織又ハ野羽織

但頭立候役掛之者着用勝手次第、半天持合候ハ、

是又同断、

要具

一鉄砲 老挺

要具玉薬相添、

一中飯庫裡

但朝夕之食事中飯庫裡ニテ為濟、別段腕不及手當

候、

一具足

但持越度者ハ五拾石以上手人可為持、其以下ハ四

人間ニ一人之可為夫持候、

一雨具

一洩紙

一油紙

但持越候儀勝手次第、

一着替一二枚之間

但秋ヨリ冬迄、

一カ、リ 一ツ

一吸筒 一ツ

一鋪皮呉座類 一枚

一腰兵糧一日分可持越事、

一白米又ハ雜穀類ニテモ一日又ハ二日分、人々心得次

第為用心可持越事、

諸役掛弓張挑灯可持事、

每郷用意品

一幕

一幕串添

一高張挑灯

一大鍋大釜之間

但所用意無之候ハ、持合之者可差出、尤其郷人数

依多少数不定、

一陣丹荷

一賄道具

一笞油紙汝紙等之間

一呉座筵類

一弓張挑灯

一蠟燭

一松明

一繩

一山草履

一草鞋

但右品々在合無之候ハ、追々可致用意、品数之儀

ハ其郷人数之応多少可相調事、

一楸

一山楸

一鉈

一鎌

一斧類

一金午子



右品数見合之者ヨリ差出候節兼テ可申合置事、

一 一手毎ニ賄方頭取四人、玉葉方頭取四人、主取夫十人被相付、朝夕賄方並玉葉配当等之儀、右掛役都テ請持ニ付何篇無混雜様兼テ手配吟味可致置事、

一 於陣中惣人数召仕候モノ、儀、四人間ニ夫一人ツ、

私領ハ五人間ニ一人ツツノ御軍賦ニ候間、召仕居候下

人又ハ野町・浦人等出陣之人体ニ応シ人夫取調、不足之処ハ百姓召仕候様相心得、庄屋其外向々之役々兼テ其旨ヲ存、差掛無混雜様遂吟味置可申候、

但御役柄下人召連候者ハ人夫不被下候、

一 小荷駄馬之儀、凡五人間ニ一疋之賦候間、右同様相心得可申候、尤小荷駄印之儀ハ追テ可被仰渡候間、銘々持越候荷物へ自分名前之木札相付候筋心得可申候、其

外所用意品ハ其郷名書記持越候様相心得、且又右両役万事受持ニ候事、

一 一手之人数之外ニ、大砲組一手大砲或ハ半手、或ハ大砲者二挺ノ間、其郷之広狭又ハ事之依輕重、人数賦ヲ

以テ可被差立候間、兼テ其心得可罷在候、

一 每郷旗並袖・笠印等之儀追テ可被仰渡候、右之外委細

之儀追々御軍賦帳面ヲ以テ可被仰渡間一統相心得、若

又得心無之面々ハ御軍賦役へ相尋可申事、

御軍役奉行

御備組一人数賦

御城下

一物主二騎

卒二人・口引一人ツ、六人

但役人番頭等之重役ヨリ可相勤、從卒之儀ハ仍持高増減可有之候、

一旗二本

持夫式人ツ、四人

但御紋付下郷名

諸郷

一組頭 六人

卒一人ツ、六人

小頭六人卒三人間ニ一人二人

同

一 什長 六人

同

一 使役 四人

同

一 医師 二人

同

一 鉄砲士 六拾人

一 得道具士 三拾人

一 貝太鼓役 四人

一 大鼓 二挺

持夫四人

一人夫 二拾五人

四人間ニ夫一人ツ、相中

五人間ニ夫一人ツ、合夫二拾人

御城下

一 御目附 壹騎

卒二人・口引一人

但乘馬ハ其郷ヨリ出之、

一 郷横目 一人

一 付足輕 一人

合士以上百六拾人

内戦兵九拾六人、什長込ル、

合足輕 一人

合夫卒 五拾人

合旗 二本

合太鼓 二挺

合貝 二ツ

合乘馬 三疋

外

一 賄方頭取 四人

一 玉薬方頭取 四人

一 賄方主取夫 五人

一 玉薬方主取夫 五人

賄方兼役

二口

合士以上百二拾四人

合足輕一人

合人夫六拾人

上下惣合人数百八拾五人

郷人数荷物小荷駄賦

一郷組頭ヨリ夫卒迄荷物付用小荷駄九疋

但郷士一人ニ付二貫目ツ、拾五人間ニ小荷駄一疋

之割、從卒一人ニ付五百目ツ、夫丸一人ニ付三百

目ツ、尤騎馬ニテ候ハ助馬可出之、

右同小屋割

但家陣ニテ候ハ、不及用意、

一小屋間数 四敷五拾三間

但坪ニシテ百六坪

敷ニシテ二百拾二枚敷

一桐油 百六枚

但八尺四方

一細引 百六口

但拾六尋一口

右小荷駄二疋

一二間物木竹 百三拾二本半

但棟ケタハリ

一老丈物右同 百五拾九本

但柱用

一老間物 四五寸廻、竹五百三拾本

但垂木用

但小屋場所相重候得ハ竹敷可相重候、

右同火繩玉薬之賦

一玉薬箱 八荷

持夫八人

但什長戦兵九拾六人前

内老荷分入付戦兵拾二人前、老人ニ付三拾放ツ、

一玉 三百六十

但八匁玉ニシテ量目二貫八百八拾目

一塩硝 老貫四百四拾目

一火繩 拾二曲

但卷曲拾六匁ニシテ重目百九拾二匁

三口

合四貫五百拾二匁

八荷

合玉葉二千八百八拾

合塩硝拾壹貫五百二拾目

合火繩九拾六曲

什長戰兵九拾六人、卷日卷人前二拾放ツ、五日分

一玉数 九千六百

一塩硝 三拾八貫四百目

一火繩 四百八拾曲

合貫目百二拾三貫八百八拾目、小荷騎五疋外

一玉数 千九百二拾

一塩硝 七貫六百八拾目

一火繩 九十九曲

右什長戰兵九拾六人卷日二拾放ツ、銘々自分持之賦

合玉数卷万四千四百

但八匁玉ニシテ貫目百拾五貫二百目

合塩硝五拾七貫六百目

合火繩六百七拾二曲

合玉葉箱八荷

合持夫 八人

合小荷駄五疋

右同兵糧味噌塩大豆薪等之賦

一米 二拾六石七斗四合六分

白米ニシテ二拾二石二斗

但三盃入ニシテ七拾九俵二斗二合

右一手之人数百八拾五人、一日卷人ニ付白米六合ツ、

廿日分

一味噌 卷石八斗五升

右同断之人数一日一人ニ付五勺ツ、廿日分

一塩 七斗四升

右同断之人数一日一人ニ付二勺ツ、廿日分

一薪 千百拾束

右同断之人数一日一人ニ付三合ツ、廿日分

一大豆 卷石二斗

右乘馬三疋、一日一疋ニ付二升ツ、廿日分

一切銅葉 三拾六貫目

右同断一日一疋ニ付六百目ツ、廿日分

一小糠 二石四斗

右同断一日一疋ニ付四升ツ、廿日分

一塩 三升

右同断一日一疋ニ付五勺ツ、廿日分

一薪 三拾束

右同断一日一疋ニ付半束ツ、廿日分

右同賄方陣丹荷鍋類ノ賦

一陣丹荷 四荷

但飯具相添持夫四人

一二尺口鉄半釜 二ツ

一ザル 二組

一片口ザル 四ツ

一大飯具上全 三本

一柄杓大小 五本

右持夫六人

一蒸桶 一ツ

但銅鍋六ツ入レ子

一水筥桶 二ツ

内口切桶三ツ入レ子

一梅干

一包丁マナ板類

一小荷駄 壹疋

一二尺四寸口鍋 二枚

一片口ザル 二ツ

一ザル 四ツ

一大飯具上全 二本

一柄杓大小 四ツ

一細引類

一小荷駄 壹疋

合夫九拾人

合小荷駄二疋

右同挑灯蠟燭等之賦

一高張挑灯並大丸挑灯四張並昇持夫支配

一弓張挑灯 三拾四本

但物主・御目付・組頭・什長・郷横目・使役・医師

・貝大鼓役・賄方並玉葉方頭取銘々・沓張ツ、持越候

積、

一中蠟 百六拾挺

但高張・大丸一夜ニ弍挺ツ、ノ賦廿日分

一中小蠟 千三百六拾挺

但弓張挑灯一夜ニ二挺ツ、同断

右同幕並雜具

一幕串 八本

一陣鐘

但在合次第

一山差

一ヨキ

一鎌

一鍬

一山鍬之類

但鉈鎌類ハ賄方預之賦

合米二拾六石七斗四升六合

合味噌 沓石八斗五升

合塩 七斗七升

合薪 千百四拾束

合大豆 沓石二斗

合雜葉 三拾六貫目

合小糖 二石四斗

合陣丹荷 四荷

合賄道具並鍋釜

合蠟燭 千五百二拾挺

合大丸並高張弓張挑灯 三拾八張

合玉數 沓万四千四百

合塩硝 五拾七貫六百目

合火繩 六百七拾二曲

合小荷駄 二拾疋

合玉葉箱 八荷

合持夫 拾八人

右ハ諸郷人数多少ニ依リ夫々備數之儀ハ別紙申渡通候

へ共、一手之備賦右之通被相定候条、右割ヲ以テ兼テ申渡置候通、何篇堅固ニ致手当置、急変之御用無滞可相勤候、至後年緩疎有之間敷者也、

御軍役方

右二番御備

- 一手郷士人体
- 百二十一人
- 半手右同
- 六十一人

西目繰出御備組

- 一出水 五手
- 一野田 半手
- 一高尾野 一手
- 一羽月 半手
- 合四ヶ郷 七手
- 右一番御備
- 一大口 一手
- 一高江 半手
- 一阿久根 一手
- 一高城郡高城 三手

- 一水引 一手
- 一山野 一手
- 合六ヶ郷 七手半

- 一限之城 一手半
- 一東郷 一手半
- 一薩摩郡山田 半手
- 一串木野 一手半
- 一市來 二手
- 一中郷 半手
- 一合七ヶ郷 八手
- 右三番御備
- 一伊集院 一手半
- 一郡山 一手半
- 一樋脇 一手
- 一伊作 二手
- 一田布施 一手

一川邊 一手

合六ヶ郷 八手

右四番御備

一加世田 六手

一阿多 一手

一河邊郡山田 一手

合三ヶ郷 八手

右五番御備

一谷山 二手

一坊泊 半手

一穎娃 二手半

一指宿 一手

一久志秋目 半手

一山川 半手

合六ヶ郷 七手

右六番御備

一蒲生 三手

一鹿兒島郡吉田半手

一山崎 半手

一帖佐 二手

一始羅郡山田 一手

一大村 一手

一鶴田 半手

一曾木 半手

合八ヶ郷 九手

右七番御備

以上、

御軍役方

御家老座印

五十四手半

合郷士六千五百老人

合乗馬百六拾三疋

合昇百九本

東目繰出御備

一高岡 三手

一倉岡 半手



一 穆佐 半手

一 綾 一手

一 野尻 一手

一 須本〔木カ〕 一手

合六ヶ郷 七手

右一番御備

一 小林 一手

一 飯野 一手

一 加久藤

一 馬關田

右両郷合 一手

一 小林 半手

一 諸縣郡吉田 半手

右両郷合 一手

一 吉松 一手

一 踊 一手

一 栗野 一手

合八ヶ郷 七手

右二番御備

一 諸縣郡高城 半手

一 高崎 半手

一 横川 一手

一 高原 一手

一 勝岡 一手

一 末吉 一手半

一 山之口 半手

合七ヶ郷 六手

右三番御備

一 志布志 二手

一 串良 一手

一 高山 一手

一 松山

一 内之浦

右二ヶ郷合半手

一 大崎 一手半

合六ヶ郷 六手

右四番御備

一牛根 一手

一佐多

一田代

一始良

右三ヶ郷合一手

一引

一高限

一恒吉

右三ヶ郷合一手

一小根占

一大根占

一大始良

一鹿屋

右四ヶ郷合二手

一財部

合拾貳ヶ郷

右五番御備

一國分 四手

一福山 一手

一曾於郡 一手半

一敷根 半手

合四ヶ郷 七手

右六番御備

一清水

一溝邊

一日當山

右三ヶ郷合一手

一湯之尾

一馬越

右二ヶ郷合一手

一本城 半手

一櫻島 二手

合七ヶ郷 六手半

右七番御備

以上、

御軍役方  
御家老座印

四十五手半

合五千四百四拾七人

合乘馬百三十五疋

合昇九十疋本

私領賦

- 一重富 壹手 一組
- 一加治木 二手半 二組壹手
- 一垂水 三手 三組
- 一今和泉 壹手 一組
- 一日置 壹手半 一組一手
- 一花岡 壹手 一組
- 一宮之城 三手 三組
- 一黒木 半手 一手
- 一永吉 二手 二組
- 一知覽 三手 三組
- 一喜入 壹手半 一組一手

- 一佐志 半手 一手
- 一都城 八手 八組
- 一藺牟田 半手 一手
- 一市成 半手 一手
- 一鹿籠 二手半 二組一手
- 一平佐 二手 二組
- 一入來 壹手半 一組一手
- 一新城 壹手 一組
- 一吉利 壹手 一組
- 末吉ノ内 一手半 一組一手
- 一岩川 一手半 一組一手
- 一伊集院ノ内石谷半手 一手 一手
- 一大始良ノ内南俣半手 一手 一手
- 一飯野ノ内大河平半手 一手 一手
- 合四拾壹手
- 以上、

〔表紙〕

# 齊興公史料

(市來四郎編)

嘉永元年 四

〔扉に表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料(紙数二十八枚)」の記載あり〕

## 目録

齊興公封内海岸巡視ノ照会

御巡視御宿割

齊興公封内海岸御巡視操練其他ノ事実幕府へ具申ノ体裁

照会

封内海岸警備及ヒ砲台築造等ノ事ヲ具申

〔齊興公封内海岸巡視ノ照会〕

海岸守備命令及ヒ人名

山川港及長崎表出張命令

以上六条<sup>〔七〕</sup>

六三〇 齊興公封内海岸巡視之照会

此節為

御巡見別紙之通可被遊

御通行旨被 仰出、去ル三日

御発駕、蒲生(大隅国始良郡)御差入ニテ諸所被遊

御巡見、海岸防禦筋等之儀御手厚被遊 御指揮、諸所

御築立之台場ニテハ、大炮遠町打等之試又ハ調練ヲモ

被仰付、嚴重御手当向相備候、且又下瀉(薩摩国西南部

ノ総唱)表之儀ハ、兼テ御巡見モ為被遊場所ニ付、尚又

近々拙者へ廻勤被仰付、大炮人数モ被召付試打調練等

モ被仰付、御手当向嚴重行届候様、尤台場等築立宜場

所ハ其通被仰付賦ニ候、右付テハ表通

公辺御届ニハ及間敷候得共、明年

御参勤御延引之御伺、又ハ二階堂志津馬被差出候節之

御届書ニモ、被遊

御巡見御手厚可被遊 御指揮トノ御文言モ有之、勿論  
阿部伊勢守様へハ追々防禦筋等之儀御届被仰上置候付  
御留守居相合、伊勢守様へハ程能ク口達ヲ以御届被仰  
上置候ハ、旁可然被

思召上候付、尚又御留守居へモ被致吟味

少將様(齊彬公)被達 御聽、御届被仰上候儀共御都合  
能可被取計候、此段御内用ヲ以テ申越候、以上、

二月廿八日

調所笑左衛門

嶋津將曹殿

右回答

本文此度諸所御巡見海岸防禦筋等之儀御手厚被遊

御指揮、諸所御築立之御台場ニテハ、大砲遠丁等之試

打ヲモ被仰付、敵重御手当向等相備候儀ニ付テハ、表  
通

公辺御届ニハ及間敷候得共、阿部伊勢守様ヨリハ追々  
防禦筋等之儀御届被仰上置候ニ付、御留守居相合、口

達ヲ以テ御届被仰上置候ハ旁可然候思召上候ニ付、御  
届向之儀共御都合能可取計旨被申越趣致承知候、右御  
届向ニ付テハ 御沙汰被為 在候通、阿部様迄御留守  
居ヨリ口達ヲ以テ程能御届被仰上可宜哉ニモ候得共、

昨年 御參勤御延引御伺其外防禦筋御届一件ニ付テハ  
專桑山六左衛門殿方へ差越内話旁承繕候上御治定モ有  
之、其上先達テ同人ヨリ内話ニハ、此度御巡見済之上

ハ、海岸防禦筋等之儀共、オノツカラ表通御届被仰上  
越候半ト被申聞候趣モ有之候付、イツレ御名内御届ニ

テモ被仰上置方可宜ト存候付、御届案文取仕立桑山殿  
承繕候上、被差出方御都合可然ト御留守居へモ吟味イ

タシ、成行

少將様達 御聽候処、其通可取計旨承知仕候ニ付、一

昨廿七日半田嘉藤次桑山殿へ差越、別状御届書ニテハ

御都合如何可有之哉ト及内談候処、得ト勘考之上被申  
聞候ハ、追々御届被仰達候通、海岸防禦之儀御敵重御

手当向ニ相成候廉々ハ、御シツカリト御届相成候方可  
宜、無左候半テハ適御敵重御備向相成候訳

上へ貫キ不申、左リ逆何レノ御台場ニテハ何貫目大砲  
何丁程御試打杯ト、余リ巨細ニ御届相成候テハ、万一  
現事之御届向ニ致齟齬候テハ不宜候間、此涯別紙之通  
御名内御届被仰達、追テ御取調之上、御シツカリト御  
届ニ相成候テモ御差支無之御廉ノミ、御直名ニテ被仰  
達候共、又ハ、御参府之上、御直ニ被仰上候トモ、御  
都合次第御取計被為在候テ可宜旨内話承候段、別紙之  
通申出候付、猶亦右之儀ハ、

少將様達、御聽、御名内御届別紙写之通今日阿部伊勢  
守様御勝手へ差出候処、御落手被成候段申出候、右ニ  
付テハイツレ今一往御取調之上、御直名ニテ被仰達候  
欵、又ハ、御参府ノ上

御直被仰達候欵、イツレ両様之間御取計不被為、在候  
テハ不相濟事候間、被達、貴聞尚於其元得ト被致吟味  
候儀ハ其通ニテ、御届向之儀何分モ被申越ニテ可有之  
候、別状御留守居首尾書等相添此旨及御返答候、以上  
但被差越候別状扣置候、

申三月廿九日

六三一 御巡見御宿割

鹿兒島

沓里半三拾六間

吉野村 庄屋役所御立場

沓里半九町廿四門

鹿兒島郡吉田之内

参里拾町

本庄村御休

五里拾貳町廿一間

貳里貳町廿一間

半里四町廿二間

同所之内 涼松

御野立

沓里拾五町五拾九間

蒲生地頭飯屋 御泊

沓里十七町五十二間

帖佐地頭飯屋

御立場

半里拾六町拾貳間

貳里拾六町四間

加治木船手御休

五里半沓町貳拾七間

三里三町廿三間

國分之内 松ヶ平 御野立

宍里半十五町三十二間

國分地頭飯屋 御泊

宍里半八町五十二間

同所之内 小村 宍里半八町五十二間

大汝八幡社地御休 三里半拾三町四十七間

式里四町五十五間

式里四町五十五間

福山 郷土厚地次兵衛所 御泊

半里拾壹町二十九間

福山牧内 半里十一町廿九間

榎之段御水茶屋御休 四里九町九間

三里十五町四十間

宍里十二町四十四間

恒吉之内 船窪 御立場

宍里半十町五十六間

末吉之内伊勢雅樂持岩川

笠木之段 御立場

宍里十町

末吉之内 中島門百姓郷左衛門所

岩崎村 御泊

半里十七町四十六間

志布志之内

池之頭 御野立

同所之内

櫛ヶ原御水茶屋 御小休

宍里半十三町

志布志地頭飯屋 御泊

但宍日御滞在

半里十町

同所之内 夏井 御立場 (操練)

半里六町

宍里十六町

寶満寺御休

四町三十四間

宍里半式町三十四間

四町三十四間

志布志地頭飯屋 御泊

十一町四十間

大慈寺 御立場

一里十七町十四間

大崎之内 島津播磨持

菱田村庄屋役所御休四里十四町二十三間

式里半三町二十九間

沓里四町

大崎之内 有床 御野立

沓里十七町二十九間

串良之内 中宿郡山郷土  
田辺泰藏所

柏原 御泊

七町十三間

同所之内 洲崎 御野立

沓里十七町三十二間

高山之内 沓里半六町四十五間

本屋敷御水茶屋御休四里半八間

式里半十一町廿三間

半里八町四十間

同所之内 國見峠 御野立

半里十四町五十五間

内之浦之内 兩包 御立場

半里九町八間

同所之内

高屋大明神社 御立寄

十四町四十間

内之浦地頭飯屋 御泊

四町四十間

同所之内

川口御番所下 御立場

沓里八町十九間

同所之内 兩包 御立場

半里十四町五十五間

國見峠 御野立

半里八町四十間



高山之内

三里三十四間

本屋敷御水茶屋御休

五里半十二町三十七間

二里半十二町三間

沓里九町十八間

同所之内荒瀬川原 御立場

沓里半二町四十五間

高山地頭飯屋 御泊

沓里六町五十二間

始良之内反田原 御立場

沓里三町七間

同所之内鶯戸権現社地御立場

沓里十七町

三里半八町五十九間

始良地頭飯屋御休

五里半沓町五十六間

沓里半十町五十七間

半里十四町二十三間

大始良之内

鎌田刑部持南村飯屋 御立場

半里十四町三十四間

大始良地頭飯屋 御泊

拾六町六間

同所之内

横尾坂中白石 御野立

半里五十六間

大根占之内

石ヶ嶺 御野立

沓里半二間

大根占之内

式里十七町四間

鳥濱御休(大操練) 四里五町二間

沓里半五町五十八間

沓里半五町五十八間

小根占地頭飯屋 御泊

一日御滞在

沓里十三町五十二間

同所之内

沓里十三町五十二間

濱走御水茶屋御休 式里半九町四十四間

沓里十三町五十二間

沓里十三町五十二間

小根占地頭飯屋 御泊

同所之内 沓里半

狩倉峠 御立場

半里二町五十二間

田代地頭飯屋 御立場

沓里十五町二十間

同所之内 三十八町十二間

花瀬御水茶屋御休 六里半五町四十七間

三里五町三十五間

沓里半四町四十間

小根占之内

狩倉峠 御立場

沓里半五十五間

大根占地頭飯屋 御泊

沓里七町二十四間

同所之内反鋤堀 御立場

沓里八町五十間

大始良之内瓦ヶ尾 御野立

沓里半二町五十二間

大始良之内 四里沓町六間

松之尾御水茶屋御休八里半十六町三十九間

四里半十五町三十六間本ノマ

沓里半六町十九間

花岡之内 牧原 御立場

沓里六町十九間

新城之内大戸浦 御小休御小人 岩元仙次郎所

沓里沓町

垂水之内西ヶ峠 御野立

沓里沓町五十五間

垂水領主飯屋 御泊

沓里三町四十間

同所飛岡領主茶屋 御立場

海上五里半七町計

櫻島 藤野村 御立場郷土藤崎庄 右エ門所

沓里

七里半拾沓町五十間計

横山地頭飯屋御休

八里半拾沓町五十間計

拾沓町五十間計

藤野ヨリ御立帰

御乗船

海上沓里

磯御茶屋別邸

御小休

沓里

御帰殿

六三三 齊興公封内海岸御巡視操練其他幕府へ

具申ノ体裁照会

今般蒲生御差入ニ付諸所被遊

御巡見、海岸防禦筋等之儀御手厚被遊

御指揮、諸所御築立之御台場ニ付、大砲遠丁等之御試

打ヲモ被仰付、御手当向等御敲重御備ニ相成、且下瀉

表之儀ハ兼テ為被遊

御巡見モ御場所ニ付、笑左衛門殿へ廻勤被仰付、御手

当向敲重ニ行届候様被 仰出候付テハ

公边御届有無共ニ吟味仕、去方へ打合候様御内達之趣

承知仕、依之今朝桑山六左衛門殿へ罷出、既

御巡見モ被為濟候段飛脚相達候付

公边御届之御都合別紙之通ニテハ如何可有御座候哉ト

及内談候処、得ト被致勤弁被申聞候趣ハ、追々御届被

仰達通海岸防禦等之儀、御敲重御手当向御備相成候廉

々ハ御シツカリト御届ニ相成候方可宜、無左候半テハ

適御敲重御備向相成候訳

上へ貫不申、左候逆何レノ御台場ニテハ何貫目大砲何

丁程御試打坏ト、余リ巨細ニ御届相成候テハ、万一現

事ト御届面ニ致齟齬候テハ不宜候間、此涯別紙之通御

名内御届被仰達、追テ御取調之上、御シツカリト御届

ニ相成候テモ

御差支無之御廉ノミ

御直名ニテ被仰達候共、又ハ

御参府之上

御直ニ被仰上候共、御都合次第御取計相成候テ可宜旨

御内話承届申候、依之別紙一通相添此段申上候、以上、

申三月廿八日

半田嘉藤次

將曹様  
津島

御指揮、御委細ハ追テ可被仰上段御届之儀ニ付私名  
前、

六三三 齊興公海岸警備及ヒ砲台築造等具申

右へ相添別紙御届書ハ左之通之御届書同案故留略ス  
海岸防禦筋手当等之儀ニ付、追々御届被申上候通兼テ  
嚴重被申付置事候得共、今般領内諸処被致巡見、築立  
置候台場ニテ大砲遠丁等試打ヲモ為致候テ、格段手厚  
被致指揮候、猶委細ハ追テ可被申上候得共、右之成行  
一応御届可仕旨大隅守申付越候間、此段申上候、以上、  
申三月廿九日

松平大隅守内

半田嘉藤次

書付一通

但太守様（齊興公）今般御領内被遊

御巡見、大砲御試打ヲモ被仰付御手厚被遊

私領内海岸手広有之、異国船防禦手当之儀ハ、自往古  
嚴重申付、津々浦々へ大砲・小筒用意致置、台場モ追  
々築立候段ハ御届申上置通候、大砲等遠丁試打ハ勿論  
調練等モ為致、防禦手当向格段嚴重申付置候、且又一  
昨年修理大夫下向之砌海岸見廻候場所ハ、兼テ私巡見  
致置候場所ニ付、此節家老共差遣、大砲試打調練等モ  
為致、手当向猶又手厚申付置候、此段御届申達候、以  
上、

申五月廿二日

松平大隅守

御書付一通

但先達テ御領内被遊

御巡見、猶又御家老衆海岸見廻勤被仰付、大砲試

打等有之候段、御届之儀

御老中

阿部伊勢守様

御用人  
山岡衛士

右御勝手へ持参仕演説之上入御内見、思召寄不被為在候段右衛士ヲ以テ被仰聞候付、則表へ相廻リ差出候処、被成御落手候旨右同人ヲ以テ被仰聞候、

右之通今日私相勤此段申上候、以上、

申七月四日

半田嘉藤次

豊後様

追テ申上候、大御目付衆へ御届之儀ハ、毎之通御留守居付役名前之書面ヲ以テ、御用御頼深谷遠江守殿へ申出為置由、此段モ申上候、

六三四 齊興公封内海岸巡視ノ照会

御領内海岸防禦御手当向ニ付

御巡見、猶又御家老海岸廻勤被仰付、大砲試打等被仰付、御届別紙御案文之通爰許調被仰付、去ル四日御老中阿部伊勢守様御方御勝手へ御留守居半田嘉藤次持参

御用人山岡衛士へ出会演説之上入御内見候処、思召寄

不被為在段被仰聞候付、則表へ相廻リ差出候処、被成御落手候旨右同人ヲ以テ被仰聞候旨申出候ニ付、御留守居首尾書相添此段申越候条可被達 貴聞候、以上、

申七月七日

島津豊後

島津壹岐殿

島津石見殿

島津將曹殿

末川久馬殿

調所笑左衛門殿

六三五 海岸守備命令及ヒ人名

穎娃織部久姓与番頭

右ハ山川其外西目海岸へ異国船及渡来、御人数被差出候儀モ候ハ

御城下一手之物主(一隊ノ将)被仰付可被差越候条、此旨致内達置候様可申渡事、

川上式部久美  
川上龍衛久齡  
右ハ佐多其外東目海岸へ異国船及渡来、御人数被差出候儀モ候ハ、

御城下一手之物主被仰付可被差越候条、此旨致内達置候様可申渡事、

御使番

寺尾庄兵衛

御目付

寺田平右衛門

汾陽彦次郎

小頭

小森新藏

福島半次郎

伊集院周八

中山甚五兵衛

平田眞之丞

小倉四郎太

右ハ異国船長崎へ及渡来、万一御人数被差出儀モ候ハ、御城下御備組之内右之通被仰付可被差越候条、兼テ其旨相心得罷在候様可致内達事、

得能彦左衛門通古

右ハ御領内海岸へ異国船渡来之節ハ、注進次第早速平日支度之儘ニテ可被差越候付、其心得可罷在候、左候テ渡来之事情相分候ハ、成丈ケ無事平穩之致取計候儀肝要之事ニテ、何様難題筋申掛候テモ、不失御国威様及理解平和ニ為致帰帆候様取計第一ニ候、若又佐多・山川へ渡来ニテ押々御城下へ可罷通候欵、又ハ不法之振舞有之戰爭ニ可相及時宜ニモ成立候ハ、兼テ被定置候御人数組被差出候儀共ハ勿論、旁致勤弁無手拔様可取計候、右之趣兼テ相含、応对其外西洋風俗等之儀共相心得居、至其節臨事之御用相弁候様可致内達事、

安田助左衛門

横山安之丞

右同断可致内達事、

御軍役方  
御家老座書役  
上野彦助

右ハ

豎山宗次郎

唐通事

名島清左衛門

重信清助

御留守中山川表等へ万一異国船渡来モ候ハ、惣備之大將壹岐(島津久武)殿被差出候ニ付、召付被差越候条可致内達事、

右之通於御軍役方御家老座海老原宗之丞ヲ以テ為致内達候処、銘々御請申出ラレ候付、可被達

貴聞儀共何分モ可被取計候、此段御内用ヲ以テ申越候、以上、

申九月廿三日

末川近江

事ニテ、何様難題筋申掛候テモ、不失御国威平和ニ為致帰帆候様可及理解候、右之趣相合、

調所笑左衛門殿

応对其外西洋風俗等之儀モ兼テ相心得居、至其節臨事之御用相弁候様可致内達置旨可申渡事、

六三六 山川港及ヒ長崎表出張命令

島津壹岐殿久武

奥掛書役勤

高崎五郎右衛門

右ハ

御家老座書役

御留守中山川表へ万一異国船渡来モ候ハ、惣備之大將被仰付可被差出候間、内達イタシ置候様

御沙汰被為 在候事、

末川近江殿平久

右ハ

御留守中長崎表へ異国船渡来、万一モ援兵等可被差出儀於有之ハ、惣備之大將被仰付可被差出候間、致内達置候様

御沙汰被為 在候事、

島津隼人久芳

右ハ

御留守中長崎表又ハ山川等へ異国船渡来、万一援兵等可被差出儀於有之ハ

御城下一手之物主被仰付被差越候旨

御沙汰被為 在候旨致内達置候様可申渡事、

得能彦左衛門通古

右ハ

御留守中長崎表又ハ山川等へ異国船渡来、万一援兵等可被差出儀於有之ハ、為惣差引被差越候旨

御沙汰被為在候旨致内達置候様可申渡事、

右之通去ル九日壹岐殿・近江殿へハ御家老座於縁頼相

達、隼人・彦左衛門儀ハ於御軍役方御家老座海老原宗之丞ヲ以テ申渡候処、銘々御受被申出候、尤隼人・彦左衛門ハ山川表へモ被差出筋宗之丞吟味之趣有之候ニ付其通取計、委細之儀ハ近々宗之丞出府ニ付申合越候様可致候間、御聞取之上可被達

貴聞儀共ハ何分ニモ可被取計候、此段

御内用ヲ以申越候、以上、

申九月廿三日

島津將曹

島津石見

調所笑左衛門殿

御家老座出役勤

奥掛書役寄

上村十左衛門

御軍役方



御家老座書役  
上野彦助

右ハ

御留守中長崎表へ異国船致渡来、万一モ援兵等可被差  
出儀於有之ハ、惣備之大將近江殿被差出候付、召付被  
差越候条可致内達事、

右之通於御軍役方御家老座為致内達候処、御受申出候  
付可被達

貴聞儀共ハ何分モ可被取計候、此段御内用ヲ以申越候、

申九月廿三日

島津壹岐

調所笑左衛門殿

# 齊興公史料

市來四郎編

嘉永二年(一)

〔扉に表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙數四十九枚）」の記載あり〕

嘉永二年己酉清曆道光二十九年  
西曆千八百四十九年

神武天皇御即位紀元二千五百九年

孝明天皇統仁第百二十代御即位弘化四年三月十九日  
丁未九月三年御宝算

將軍家慶公第十世襲職天保八年九月十三日  
戊午九月十二日

藩主齊興公第二十七世當時知政文化六年四月十一日  
大隅守ト稱ス己巳六月四十一日年五十九

世子齊彬公當時修理大夫ト稱ス  
年四十實ハ四十一

藩祖忠久公薩隅日三州及琉球國受封（人皇八十二代）  
後鳥羽天皇壽永五年即チ文治二年（六百六十四年）

関白太政大臣鷹司政通公

左大臣九條尚忠公

右大臣近衛忠熙公

内大臣鷹司輔熙公

老中

阿部伊勢守正弘

牧野備前守忠雅

戸田山城守忠温

松平和泉守乘全

松平伊賀守忠優

若年寄

本多豊後守助賢

大岡主膳正忠固

本多越中守忠徳

遠藤但馬守胤統

本庄安藝守道貫

所司代

酒井若狭守忠義

京都町奉行

水野下總守重明

明樂大隅守茂正

伏見奉行

内藤豊後守正繩

国老

○<sup>〔朱〕</sup>穎娃信濃久喬

○新納内藏久明

○島津將監久泰

○岩下典膳道格

○島津安房久備

○島津 登久兼

川上久馬久芳

町田監物久祝

市田美作義宜

北郷内記久珉

島津和泉久風

島津丹波久長

川田信濃佐模

猪飼 央尚敏

二階堂主計行典

調所笑左衛門廣郷

諏訪勘解由武敬

菱刈安房隆觀

島津石見久浮

島津 登久備

島津豊後久寶

島津壹岐久武

末川近江久平

島津將曹久徳旧称碓山

川上筑後久封

以上二十五名文化六年己巳ヨリ嘉永四年辛癸二月迄凡四十二年間国老職ニ在リ、前代ヨリ在職連緒ノモノハ〇印ヲ付ス、<sup>〔亥〕</sup>

六三七 総覽

齊興御在国

齊彬公御在府

正月

元日ヨリ七日迄年首御式先規ノ如シ、略ス、

同十一月

例年ノ如ク諸役人進級及ヒ地頭所転換等ヲ命セラル、

同月二十五日雪

齊興公御帰国暇賜上使来邸、先規ノ如シ、

二月四日、齊興公御下国、江戸邸御発駕(未ノ刻)

同月廿八日晴、国老島津豊後ニ来戌秋琉球王使参府御用

掛ヲ命ス、

閏四月三日雨

在邸番頭鎌田圖書齊興公御下国御礼使命セラル、

同月十五日雨

齊興公御帰国ノ御礼使鎌田圖書登營(已上刻)

御白書院ニ於テ將軍家 右大將家定公ニ謁シ、帰国ノ

恩ヲ謝セシム、尋テ鎌田自身ノ礼ヲ述フ、然シテ鎌田

ハ老若中ニ廻礼ス、

同月十九日晴

番頭鎌田圖書登營、檜間ニ於テ閏老松平伊賀守ヨリ御

奉書及ヒ紗綾二卷拝領ス、

齊彬公今里ノ別邸ニ於テ砲術ヲ催サレ、在邸国老及ヒ

番頭等ヲ召シテ試ミ玉フ、

閏四月二十四日曇後雨

番頭兼御礼使滞ナク濟タルニ依リ、宮原主計ニ交替ヲ  
命セラル、

同年五月二十四日

齊彬公今里別邸ニ於テ砲術ヲ催サル、鎌田圖書及ヒ半

田嘉藤次・早川五郎兵衛ヲ特別ニ召シ玉フ、

同年六月二十一日晴

公子篤之助君夭亡、

同年六月二十二日

篤之助御夭亡発布、

六月二十四日曇後晴

篤之助君ノ御遺骸ヲ大圓寺ニ葬ル、

六月二十七日曇

篤入院殿御中院法会大圓寺ニ行ハル、番頭鎌田圖書ヲ

代番(マカ)セシム、

八月朔日雨、暁雷鳴

佳節ニ就テ齊彬公御太刀一腰使者番頭鎌田圖書ヲシテ  
献シ玉フ、

齊彬公ハ御登宮、佳節ノ式ヲ行ヒ玉フ、

同月十一日曇

篤入院殿四十九日・百ヶ日法会ヲ大圓寺ニ行ハル、番

頭鎌田圖書ヲ代拝セシメ玉フ、

八月十一日

釈奠ニ就テ番頭鎌田圖書ヲシテ太刀馬代ヲ納メシム、

九月五日

国老島津壹岐江戸邸ニ着ス、

十一月三日

田町別邸失火、齊興公・齊彬公差控伺ヒ玉フ、閣老ヨ

リ即日其儀ニ不及旨達セラル、

正月

六日、大島大和濱沖ヲ異国船一艘西ヨリ南ニ向テ通航ノ

報 (御届書後卷ニ記ス)、

二月

七日、又一艘子ノ方ヨリ丑ノ方ニ向テ通航ス (同前)、

十一日、又一艘北ヨリ南ニ向テ通航ス (同前)、

十三日、夕刻又一艘東ヨリ西ニ向テ通航ス (同前)、

十四日、暁又一艘西ヨリ南ニ向テ通行ス (各報告書後卷ニ

記ス)、

十九日、二階堂右八郎 (行健) カ大目付職ヲ免ス、家格寄

合并ヲ貶シ代々小番トス (唐物密商ノ嫌疑ニ罹リ目黒村橋

和屋娘投井事件ニ連帯ス) (事実後卷ニ詳記ス)、

四月

十二日、海老原宗之丞 (清熙) カ職ヲ免ス (調所ニ関係ノ罪

ナリト云フ、当時御側御用人御側役兼御趣方掛)、

二十四日、御家老末川近江 (久平) ヲ御軍役奉行トシ、得

能彦左衛門 (通古) を御軍役方取次トス、

二十八日、大小砲操練ヲ天保山ニ催ス (事実後卷ニ記ス)、

閏四月

二日、酉ノ上刻第五公子御誕生、母ハ田宮氏 (秀) 備次郎

ト命名シ玉フ、

十六日、武術勉勵者ヲ褒賞ス (人名後卷ニ記ス)、

六月

二十二日、篤之助君天年二歳、篤（篤入院殿実相起信大禅童子ノ誤カ）入院眞空自證大禪童子

ト諡ス、大圓寺ニ葬ル、

マ、  
日、究士救助ノ為メ高三千石ヲ備フ旨ヲ布達ス（

達書後卷ニ記ス）、

九月

朔日、御納戸奉行兼御使番田上百二ヲ世子ノ傳トス、

十一月

八日、御側御用人兼御側役種子島六郎（時昉）死ス（履歴

後卷ニ記ス）、

十二日、御側御用人兼御側役堅山武兵衛（利武）ヲ御側御

用人ニ進ム、御側役故ノ如シ、

マ、  
日、齊興公指宿二月田ニ御入湯、御滞留、

十二月三日

三日、近藤隆左衛門・山田一郎左衛門・高崎五郎右衛門

・村田平内左衛門・國分伊十郎・土持岱助等ノ六名評

定所御用呼ヒ出シ、即夜屠服ス（履）（事実多端内証紀詳記ス）、

四日、伊集院平騎馬急行指宿二月田ニ出頭ス（其事由内証

紀詳記ス）、

七日、井上出雲守筑前福岡ニ向テ脱走ス（内証紀詳記ス）、

此月近藤・山田等連類ノ輩日々三四名疑獄糺弾、人心

恟々タリ（内証紀ニ詳記ス）、

六三八 琉球王使將軍ニ謁ス

將軍謁ヲ中山王ノ使者ニ允ス、為メニ在江ノ諸侯皆登

城ス、將軍特ニ巻物及ヒ馬代銀ヲ護衛ノ国老川上筑後

封ニ賜フ、時ニ中山王ノ献ル所ノ物左ノ如シ、

一 御太刀 一腰

一 御馬代銀 五拾枚

一 中央卓 一脚

一 石人形磁石 二体

一 籠飯 一對

一 縞芭蕉布 五拾反

一 練芭蕉布 五拾反

一 薄芭蕉布 五拾反

一 太平布 百疋

一久米島綿

百把

一泡盛酒

五壺

玉川王子献上物

一大官香

拾把

一寿帶香

五箱

一縞芭蕉布

拾五反

一練芭蕉布

拾反

一泡盛酒

二壺

三月十九日

二十六日、幕府琉球ノ使者ヲ饗シ音楽ヲ聞カシム、齊興・

齊彬二公其他諸侯皆登城ス、將軍物ヲ使者ニ賜フ、

一銀五百枚

中山王江

一銀三百枚

玉川王子江

一時服十

從者惣中

一時服三ツ充

樂人江

右被下旨於大広間二之間老中列座、牧野備前守申渡之

一帝鑑間

松平大隅守  
松平修理大夫

一殿上之間

玉川王子江

一柳間

琉球人從者

一蘇鐵之間

松平大隅守家来

右於席ニ御菓子・吸物・御酒被下之、

一御玄關前腰掛、追手下馬腰掛ニテ下官江強飯被下之、

一表出御ニ付御機嫌伺、御三家之使者於躑躅之間謁備

前守ニ、

一同日、琉球人御老中方江廻勤、

一廿七日、琉球人上野江參詣、

一十二月二日、琉球人御三家方廻勤、

一廿八日、齊興公重キ御品(朱衣肩衝御茶入) 拝領之御

礼、

右於御黒書院御目見、

一御掛物三幅対右法眼筆 一箱

一御肴

一折

右ハ齊興公重キ御品御拝領之為御礼、以使者差上之、

於繪ノ間謁老中、

一右重キ御品拝領ト申ハ、先達テ琉球人召連參府登城、

御懇之蒙上意ヲ、御手自御茶朱肩衝ト名クル茶入御拝領ノ事由ハ後卷ニ詳記ス入

拝領ノ事、

六三九 洋法医禁令

当番 御目付中江

近来蘭学医師日ニ増シ世上ニ信用イタシ候モノ多ク有之哉ニ相聞得、右ハ風土モ違ヒ候事ニテ、御医師ハ蘭法相用候儀御禁制被仰出候得ハ其意可被相守候、

但外科・眼科等外治之儀ハ蘭法交用イタス筈ニ候、右之通御医師中江可被達候、

酉三月十八日

右之通従公義被仰出候条、不洩様可被相触候、

四月 日

御家老座印

六四〇 洋式大操練

四月二十八日、天保山ニ於テ大小砲術ノ大演習ヲ催ホサル、城下六組ノ人員二千四百余人ヲ分テ六大隊ニ作り、操銃ゲベル野戦砲六隊一隊砲六門ヲ各隊ニ附シ同時ニ運動

放発ス、此操練ハ長崎援兵及ヒ城下守衛隊ノ整列式ニシテ、大小砲ノ製造具備シタルヲ以テ試験セシモノナリ、

島津周防旧名久光公齊興公ニ代リテ出馬ス、

六四一 齊彬公春嶽公へ御書翰

過日ハ尊書忝致拝見候、如命不同ノ季候ニ候処、愈御清福恐寿ノ至奉存候、然ハ先頃入貴覽候書物御返落手仕候、且又貴国ノ佳品拝受千萬忝奉謝候、当年最早拝顔モ仕間敷折角御保養專一奉存候、此品籠末ノ至御座候得共致呈上候、御入納被下候ハ、大慶奉存候、先ハ貴答旁可申上如斯御座候、頓首、

卯月十九日

尚々、時氣御自愛專一奉存候、早速貴答可致処ニ取込之延引御仁免奉希候、以上、

松修理大夫

松越前守様 貴答

六四二 淡路守三ヶ国条約書写奏聞云々閣老へ



教書

月並為伺御機嫌今二十二日拙者致参内候処、関白殿被逢、去ル十八日三ヶ国へノ条約書写持参演説ノ趣并都筑駿河守直話之次第等委細被及、奉聞、条約書モ被入、觀覽候処、段々之御処置振具サニ、聞食殊外、觀感被為在、先以御安心被遊候、不容易事状追々居合候段千万御苦勞之御義ト被思召候、猶此上之御取扱振御国体ニ不拘様御頼被、思召候、右之趣宜申上旨被仰出候、且又各様ニモ不通御心勞、其外掛リ之面々モ骨折候義ト被、思召候、是等之趣各様迄能々可申進旨御沙汰候旨、今日関白殿被申聞候間此段申進候、以上、

九月二十二日 脇坂淡路守

六四三 禁裏附都筑駿河守ヲシテ外国事情奏上

云云ノ書

(魯西垂)(アメリカ)(イギリス)等御処置之品追々所可代江申遣置候義ニハ候得共、書面ニハ難尺意味有之、

兼テ於御所向御心配被遊候趣ニ付、其方ニハ先役之節取扱候品モ有之、異国之事情ヲモ相弁居候事ニ候間、上京之上所可代へ篤ト申達々、觀聞可然事共ハ、事実能々相分リ時勢無御扱訳柄等関白殿へ直話有之様致度時宜次第其方義所可代同道ニテ被罷出候へハ可然哉ト存候、依テハ右三ヶ国指遣候条約書付写相渡候間、致持参所可代エ被申談御都合宜布様可被取計事、

十月二十八日

六四四 参考 当時ノ概況

嘉永二年己酉六月肥前五島・松前福山ニ城ヲ築カシム七月異船數十隻對馬ノ辺海ヲ過ク、是時ニ当テ徳川齊昭尚幽セラレ駒込邸ニ在リ、而テ憂国ノ意益深シ、窃ニ鍋島齊正・島津齊彬・眞田幸貫等ト謀リ籌海ノ大計ヲ尽ス防海雜記、對州屆書、十二月阿部正弘令ヲ大小諸藩ニ伝ヘ曰ク、壬寅ノ歲漂流船ニ仁恤ノ恩旨アルヨリ以来異船屢辺海ニ出沒シ、就中近年對・奥羽・松前ノ諸方ヲ經過シ、或ハ廻船ヲ却掠シ米穀ヲ奪ヒ、或ハ浦港ニ上陸シ薪

水ヲ乞ヒ、今年英船ノ浦賀ニ来ルナ大島ニ上陸シ下田ヲ窺ヒ、処々測量横行至ラサルナシ、今膺懲セサレハ遂ニ国威ヲ損スルニ至ラン、又宜シク平素防禦ノ方略ヲ講シ以テ非常ヲ戒ムベシト〔脱アルカ〕所ニ築カント請フ聽サス、齊正以為ラク、幕府因循空ク歲月ヲ過ク、若シ此二島ヲ乞得レハ一藩ノ力ヲ以テ之レニ備ント、幕府之ヲ許ス、乃チ山ヲ削リ海ヲ填メ神島・四郎島二島ヲ接続シ、砲台ヲ其上ニ築キ戍兵ヲ置テ之ヲ守ル、  
維新実記鍋島家記○按ルニ此役齊正地図ヲ製シ意見ヲ書シ之ヲ真田幸貫・伊達宗城ニ謀ル 幸貫曰ク 山ニ狩スル獵夫ニ問ヒ水ニ漁スル釣者ニ問フベシ、余ハ山中ノ人ナリ、何ゾ其得失ヲ論セント、齊正強究ス、齊正奮テ從事スト云フ、

六四五 参考 黒田家々記抄 (月日ニ関セス本書ノ儘)

正月二十八日

松平大隅守(齊興公)様御礼被 仰上候処、於御黒書院阿部伊勢守様ヲ以、琉球國へ滞留罷在候異人共之儀ニ付御取計方之儀 御沙汰之趣御達、

二月六日

仲哀天皇崩御ヨリ一千六百五十年並 神功皇后三韓御征伐 應神天皇御誕生右御同年御相当ニ付、二月六日ヨリ二七日於香椎宮  
御神祭之義、護国寺武内丹波介ヨリ相願之〔御普請成就不致ニ付 八月朔日ヨリ二七日、御神祭有之〕

当酉年八幡宮(箱崎八幡)降誕ヨリ一千六百五十年御相当ニ付、三月十日ヨリ三七日於宇美御誕生会御祝祭之義、誕生寺大宮司等ヨリ相願之〔御繕等成就不致ニ付、三月廿一日ヨリ三七日 御神祭有之〕

当酉年宗像郡宮地嶽大明神御鎮座ヨリ千五百二十五年御相当ニ付、三月為日分御遠祭之義、宮地村山伏吉祥院ヨリ相願之〔宮地岳大明神ハ、神宮功皇后三、韓御退治之節懇切アリシ御神ノ由、〕

二月十七日

平戸家老中ヨリ以書状左之通申越書状大意  
正月二十三日申中刻壹岐守領壹岐国若宮島高瀬ト申所ヨリ戌亥ニ当リ十四・五里沖へ、帆数多掛ケ候異船一

隻相見候付、兼テ同所へ備置候海岸手当之人數早速差出候処、及暮見切出来不致、同二十四日卯中刻同所展之島ト申所ヨリ五・六里沖へ、右異船帆五ツ懸飄寄地方ノ様子伺候体ニ相見候付、防禦手当之人數追々出張相固候処、同日巳中刻頃亥子之方へ颯行十四・五里沖へ漂居候付、猶警固敵重申付候処、及暮様子不相分、尤夜中凡二十里位沖ニ汽船共相見不申、異様之箭火度々相見候へ共、同二十五日ニ至從早朝雨天ニテ沖合遠方之見切り出来不致候付、防禦向之義ハ敵敷相固居、同二十六日快晴相成候へ共帆影相見不申、就右先固之人數引払海岸手当方無怠罷在候段、同所役々之者ヨリ追々申越候、以下略、

平戸ヨリ長崎御奉行所へ被仰達ニハ、右支立之内左之通加文見ル、

亥子之方へ颯去漂居候処、同夜筑前「イハス」島西之方ニ当リ箭火程之火度々相見、兼テ漁船出場所ニモ無之候故、異船之火ニモ可有之ト相考候旨認有之、右ニ取調相成候処、御領海ハ別条無之、

二月四日ニモ壹岐国沖合ニ異船一隻相見、同五日北之方へ乗行候段長崎御奉行所へ届候義於長崎廻状ヲ以申来、

三月十二日小倉家老中ヨリ以飛札左之書状写、銀山御代官ヨリ通達有之候由ニテ順達有之此方ヨリ唐津へ廻達相成ル

書状

一筆啓上仕候、今月十八日辰刻頃出羽守御領所隱岐国知夫里郡浦之郷村之内三度ト申所一里程沖合ニ異国船一隻相見、尤沖合之儀ニ付乗組人數モ不相分候へ共、日本船ニ致シ候へハ千石積四隻モ一緒ニ致シ候位之船ニテ、帆柱三本計帆數十二・三程相見、追付橋船ヲ御シ同村之内三度ト申所へ異国人六人上陸致シ人家ヲ見掛參候様子ニ付テ、所之者ヨリ船へ引戻掛候処、五人ハ相止、一人ハ押テ村役人宅へ參り筆紙ヲ望候様子ニ付筆紙差出候処、阿蘭陀文字之様成事少々相認、炮糸之様成モノ少々相添差出、橋船へ乗移元船へ帰り申候、若軍船ニテモ可有之哉ト存、兼テ申付置候通固人數等

敵重ニ及手配置処、右之船追々戌亥之方へ颯候様子ニ付、翌十九日朝ニ至テハ一向帆影モ相見不申旨同所詰役人ヨリ申越候、

右ハ不容易儀候間、御近領ニ付御通仕候、右之趣為念得貴意如此御座候、恐惶謹言、

二月二十四日

高田 亘人

乙部九郎兵衛

朝日千助

小田 要人

大野 舍人

森 八左衛門様

三月十七日對馬守家老中ヨリ以書状左之通申越之、

書状大意

正月二日以来二月十八日迄之間白帆数多之異国船對州領海追々数十隻西南ヨリ相見へ、何モ北東ヲ指シ乗行キ、其内ニハ地方近ク乗寄り、既ニ久和村・廻村へハ橋船ヲ卸シ盪寄候ニ付、兼テ海岸固人数見分ケイタン

候処、人物ハ阿蘭陀人ニ似寄り、著服羅紗、冠物羅紗或ハ毛織之類相用ヒ、言語不通候ニ付手真似ヲ以テ相尋ネ候処、亞黑利加ト申ス儀ハ相通シ候ニ付、早々出船イタシ候様相論シ候処、速ニ致出帆候、

右之通多日之間都合之船数及百艘令通行候間、海岸浦々堅ク令手当猶ホ又敵重被申付置候、

当春以来追々對馬・壹岐兩國沖合ヒ其之外隱岐国沖合ニモ度々異国船相見へ候ニ付、御領内浦々尚ホ又

重疊入念仕候様浦觸レ書付被相渡候、且ツ又自然御領海ニモ異船相見へ漂流等之趣次第御人数被差越候

義モ可有之候ニ付、頭立候役々心得方大目付へ御固通、

三月二十六日長崎「アメリカ」船一隻渡来、

三月二十五日申中刻白帆船見出シ候相図打イタン、遠見番ヨリ相知ラセ候ニ付、聞役桐山市郎太夫御奉行所へ罷出相伺候処、白帆船見出シ候注進有之、尤モ里数等不相分イツレ之船ニテ可有之哉ニ候へトモ、於御奉

行所モ専ラ御手当相成居候趣、同日長崎差立候走り飛脚二十六日夜ニ入り到着、猶又二十五日、二十六日長崎差立候無時大早飛脚二十七日、二十八日追々到着、右白帆船一隻二十六日未刻伊王島辺へ乗来リ碇ヲ卸候趣ニ付、市郎太夫御奉行所へ罷出、船之模様且ツ御一番方御人数船被差出方之義相伺候処、旗印之モヤウニテハ「アメリカ」船ニテモ可有之哉ニ候、人数等之義ハ踰ト難被及御差函旨被申聞候ニ付、猶又御内慮之程相伺候様申談候処、井戸對馬守殿へ申達御人数船共御差越相成候趣差支無之段以用人被相達、尤モ追テ御糺之上ニテハ御達モ可有之ニ付、先御備之内被有之候ハ、一番手丈之処ニテモ御差越可然旨トモ被申聞候赴及噂候、且ツ又佐賀聞役ヨリ以用達申越候ハ、伊王島辺ニ乗来候白帆船紅毛船ニ無之紛敷船ニ候間、御一番方へ被相達早々御番所并御台場等之御備嚴重ニ可被致旨之鑑札、沖出之檢使ヨリ佐賀御番頭へ相達候趣ニテ、右写差越候段及言上、

鑑札

紅毛船ニ無之紛敷船ニ候間、御一番方へ被相達、早々御番所并御台場等之御備嚴重ニ可被致事、

裏ニ

異船

右ニ付同二十八日御奉行所へ兼テ被仰付置候趣ニテ、大早使者使番四宮孫次郎被差立、

同二十九日兼テ御手当相成居候御一番方守衛人数之内、一番立中老野村隼人・大組頭蒔田權右衛門・大頭野村勘右衛門・馬廻頭明石市郎右衛門并ニ一番立チ之面々、海陸ヨリ長崎へ被差越海路ハ二十八日日出立ニ候ヘトモ都合ニ仍テ翌日日出立四月三日、四日迄ニ何レモ長崎着、

同二十九日播磨并ニ御右筆所詰中老林太郎右衛門其之外播磨付属之面々等陸路被差越但シ都合ニ仍リ翌日日出立致シ候、四

月三日長崎到着、同二十六日長崎差立候無時大早飛脚二十八日到着、二十六日夕御奉行所ヨリ市郎太夫御呼出ニテ、同日異国船一隻渡来ニ付相糺候処、北

「アメリカ」洲ノ軍船ニテ漂流之「アメリカ」人為迎渡

来イタシ、且類船ハ無之段申立、外疑敷義モ相聞不  
申旨之御書付被相渡候段、且御人数船被差越方相伺  
候処、穩之体ニ有之候間、御人数船等被差越候ニハ  
被及間敷トノ趣被申聞候旨等委細及言上、右白帆船  
白崎冲手ニ碇ヲ入居候趣ヲモ申越之、

同二十八日長崎大早飛脚同晦日播磨太郎右衛門旅中  
へ相達、今度渡来之北「アメリカ」人再ヒ御札有之候  
趣ニ付、市郎太夫御奉行所へ罷出相伺候処、乗組之  
内頭立候モノヨリ申出候ハ、唐国渡海自国之船々難  
波ノ患モ有之時ハ救助可致之国命ヲ受ケ候者ニ有之  
然ルニ自国之モノ共十六人御当国海辺ニテ致難船シ  
候趣唐国ニテ承リ候ニ付、連帰リ候為メ罷越候ニ付、  
右之者共御渡被下度趣ニテ外子細モ無之、弥々穩之  
体ニ有之トノ趣以用人被申聞候由申越候旨、播磨太  
郎右衛門ヨリ申越之、

四月四日長崎差立候中早飛脚同七日到着、去ル三日  
對馬守殿ヨリ市郎太夫御呼出ニテ、去月二十六日渡  
来之異国船近々出帆申付候間、御領内浦々被入御念

候様御国元へ可申旨ニテ、對馬守殿・大屋遠江守殿  
御連名之御状被相渡候旨及言上、同日御奉行所ヨリ  
市郎太夫御呼出之上、松前志摩守殿ヨリ送越相成候  
漂流異国人共、翌四日阿蘭陀「カヒタン」へ被引渡、  
即日「カヒタン」ヨリ沖異国船主役へ相渡候ニ付、右  
漂流異国人共「カヒタン」召連兩御番所前致通船候旨  
以書付テ被相達候由、播磨太郎右衛門ヨリ申越之、  
同七日松平肥前守様ヨリ御飛札来、「アメリカ」船渡  
来ニ付先月二十九日出立、四月二日對馬守殿・遠江  
守殿御對話、兩御番所御見廻、同三日對馬守殿ヨリ  
御家来被召寄前段此方様へ御達之通、漂流異国人共  
「カヒタン」召連兩御番所前致通船シ候旨被相達候ニ  
付、兩御番所御台場等之御備向、尚又嚴重相守候様  
御家来へ被御申付候段被仰越之、

四月五日播磨太郎右衛門ヨリ長崎差立候大早飛脚七  
日夜到着、四日夜佐賀聞役ヨリ市郎太夫へ以手紙テ、  
只今御奉行所へ御呼出ニテ、漂流之異国人「カヒタン  
」へ御引渡之末「アメリカ」船へ連越シ引渡相済候ニ

付、檢使ヨリ出帆之義申渡候処、彼船將官ヨリ願事有之候間、取次相成度旨手強申立候趣ニテ、出帆難相成由以用人被相達候段為知來候間、聞役ヨリ申出、扱又漂流人御渡出帆申渡相成候上ハ、速ニ出帆モ可致之処、漂流人受取候上ニテ願事有之ナト申立候儀、於御奉行所モ御懸念之趣ニ相聞ヘ候段モ内々申出候由申越之、

此度被差越候御人数四月四日夕方ニカケ不残着船、直ニ御番頭中御茶屋渡海イタシ居候折カラ、前条之趣御達有之候段佐賀聞役ヨリ為知申越候ニ付、早速市郎太夫・佐賀聞役出立、翌五日御非番所受取渡談決相成、御兩家聞役一同御奉行所罷出相伺申ト申舍居候処、「アメリカ」船出帆暫時之間ニ伊王島モ乘過候モヤウニ付、伺出方見合罷在候内、佐賀聞役ヘ御奉行所用人ヨリ、「アメリカ」船追々走出シ伊王崎内例異国船繫場モ過去沖手ヘ出テ、殊ニ風順モ宜帆影モ見隱候旨沖出之檢使ヨリ申越、右之趣對馬守殿申聞ラレ候段以掛合被相達、御非番方ヘモ可及通達

旨申來候段佐渡聞役ヨリ申越候付、御非番所受取渡之手数ニ不至相濟候段ヲモ、播磨太郎右衛門ヨリ被申越之、

四月七日播磨太郎右衛門ヨリ長崎差立候大早飛脚同九日到着、同六日御奉行所ヘ市郎太夫御呼出ニテ、去月二十六日渡來沖繫之「アメリカ」船、同州漂流人共引渡、昨五日常沖合致出帆候旨之御書付、對馬守殿ヨリ被相渡候、同六日市郎太夫再ヒ御呼出ニテ、五日出帆之「アメリカ」船一隻帆影見隱候旨沖手出役之者共ヨリ注進有之候間、モハヤ御固之御人数御引揚可被成旨、對馬守殿ヨリ被相達御口達書被相渡候、右ニ付播磨御奉行所ヘ罷出御人数引弘之儀相伺候処、勝手次第引取候様被相達候、仍之テ急速被差越候面々引取之義相達、尤仍都合中老・番頭中并平常御番丈ケ之御人数船、一番之御番手着船迄居残之儀トモ相達、其段御奉行所ヘモ委細申達方ヲモ申談候趣等申越之、

右「アメリカ」船出帆之都合何トカ疑敷趣ニ付、御

奉行所へ市郎大夫<sup>〔太〕</sup>追々被越及問合候処、御奉行所ニテハ指テ子細無之由、乍然懸念之筋ニ有之、且ツモハヤ御非番所御受取一段之所ニ相成居候折カラ、風ト出帆之都合モ有之、旁一番立之中老初ト御番丈之御人数船、一番之廻船マテ當時長崎居残り之義、長崎ニ於テモ會議之上被相達タル事ニ候、

名村貞五郎阿蘭陀通詞末席御立入、長崎ニライテ名村貞五郎咄聞書

一昨三日貞五郎当番ニテ異国船へ乗移候節、別テ船中都合宜敷銘酒等ヲ出シ饗シ申シ、兼ネテ当所へ参リ居候漂流人之内、松前ニテ兩度出奔イタシ候ニ付、長崎へ送之船中補理所ニ入被送越候義、且ツ長崎ニテモ被差置候所之床カラ堀リ又ハ燒キ破リ出奔可致体ナト有之、禁獄被申付置キ候義等相認メ候モノヲ一昨日被相渡候処、一々承知イタシ候由、昨日四日檢使トシテ萩原又作通詞森山榮之助召連レ「アメリカ」船へ罷越シ、

カヒタン」病氣ニ付余之阿蘭人ヲ以テ漂流異国人相渡候処無滞受取候ニ付、速ニ出帆イタシ候様申渡、檢使ハ直ニ乗船ニ引取候処、主役「アメリカ」人義外ニ用事有之候間、出帆不致旨通詞并蘭人へ対シ申候ニ付、漂流人相渡候上ハ外用事有之間數旨相答へ候処、彼方ヨリ用事有之御奉行所へ可相願義有之候条、相待候様申候へトモ、通詞・蘭人共引取可申トイタシ候処、異人兩人ノ手ヲ取可願立義ハ書中ニ有之間、持帰り御奉行所へ差出候様ニト封之物相渡候ニ付持帰り差出候、仍之於御奉行所テ御披見之上事柄御承知相成候テハ御面倒可有之ト、封之儘被差返候ヲ、「カヒタン」へ相認提<sup>ア</sup>シ候へト被 仰付候処、御奉行所ヨリ封之物等御披見被成候義ハ不被為出来御国法ニ付被差返ト申シ、御手頭ヲ御渡被下候ハ、彼国へ相通シ候様諷訳候義ハ「カヒタン」御受ケ可申上候へトモ、御趣意ノミヲ受ケ相認メ候テハ、申サハ余所ノ喧嘩ヲ買候ニ相当リ何分主役へ対シ相濟不申、且ツ阿蘭陀国へ相聞へ候テモ国王義「アメリカ」国王へ対シ相濟不申候ニ付、御免被 仰付



度旨申候由、仍之御国法ニテ封之物披見不相成趣、御手頭出来「カヒタン」へ翻譯被 仰付則出来之上今日被相渡答ニ候処、差上檢使等へ差上候テハ六ヶ敷可有之ト、ワサト場所出張イタシ居候幼年ノ通詞ヲ以テ、昨日差出候来リ物ヲ御手頭并「カヒタン」翻譯之書類ニテ包上ハ封ヲ主役へ「カヒタン」ヨリ当候テ差出サセ、異人共右書簡ヲ請取候ハ、直ニ船ヲ突放シ罷歸リ可申ト御含ミ相成候ヨシ、首尾ヨク参スマシ候ヘカント存候事、

昨日差出シ候封ノモノ、事、「カヒタン」并ニ貞五郎ナト何分之コト、相察シ候哉相尋ネ申候処、貞五郎推量仕候ニハ、漂流之異国人不行状之義有之候ハ、禁獄モ可被仰付候へ共、相残モノ御国法相犯シ不申ヲ一同罪科ニアテラレ候義不承知ナト、申義ニモ可有之哉、其外格別之事ニモ可有之哉、尤通商等相願候義ニ有之の間敷候由、

一昨日通商乗移候節、船中ニ蘭語ヲ能申モノ兩人有之様子ニ付、通詞取合見申候処、一人ハ生国蘭人ニ

テ「アメリカ」ニテ生長致候由、一人ハ「アメリカ」人ニテ能蘭語ニ馴候由、右船渡来之砌言語等不通ニテ不便利ニ候処、右兩人取合不申義何分之子細ニ候哉相尋候へ共、返答振睨トワカラス候由、

「アメリカ」船今日出帆被仰渡漂流人モ御引渡相済無滞受取申候、然ニ島「カヒタン」へ罷越面会致度候処参リ不申ニ付、「アメリカ」船主役島へ罷越度申出候此義ハ日本国法ニテ不相成旨檢使相答候処、右ハ奉行所沙汰ニ候哉又ハ檢使ヨリ之沙汰ニ候哉承度旨申立候、右ニ付萩原・鈴木・立山へ被引取候、少シ面倒ニ相成候哉ト被存候、仍之為御含義大夫ヲ以卒然申上候、早々、以上、

四日

尚々本文之趣肥筑等へ御通シ置可被下候、再尾、播磨并太郎右衛門其外播磨附屬之面々共四月八日長崎出立、同十一日帰着、

一番立之内此節長崎引弘之面々四月十日出帆、同十三日帰着十二日波戸場着、船ノ輩モ有之

一番立中老野村隼人始御番頭中其外當時居残之面々一番之着船ニ付申合等相濟同所出船、閏四月十五日帰着、

四月十三日

〔頭注〕「琉球へ異国船云云」

三月十三日ヨリ同十八日  
對州西海へ追々異国船都合三十二隻乗通り北へ乗去北東へ向乗去候モ有之、同二十五日ヨリ四月朔日之内對州東西沖合へ追々異国船二十隻相見北へ向乗去北東へ向乗去候モ有之候段、長崎御奉行所へ御届相成候旨、彼方聞役ヨリ以廻状申来、

閏四月三日  
對州御領内沖合ニ異国船二隻相見候段、長崎御奉行所へ以飛札被仰達候旨、彼方聞役ヨリ以廻状申来、

三月二十五日ヨリ同二十八日  
平戸領壹岐国沖合ニ異国船數艘乗通候段、委細之趣長崎御奉行所へ御届相成候旨、彼方聞役ヨリ以廻状申来、

三月晦日  
平戸領壹岐国沖合ニ異国船二隻相見四月朔日北之方へ向廻行候旨、委細之趣長崎御奉行所へ御届相成候段、彼方聞役ヨリ以廻状申来、

閏四月十五日  
於長崎薩州(齊興公)様御用達ヨリ御屋代ヲ以廻状、同朔日薩州之内秋目村沖へ白帆之異国船一隻乗通候段為知申来、

於長崎薩州、州様聞役ヨリ以廻状、正月二十日「アメリカ」船二艘琉球国内那覇沖へ渡来、久米島へ渡来之英人召乗五人残置二十一日二艘共出帆、二月十四日同所右漂来之者为迎英国船渡来、此節残置候英人并滞留唐人召連同十六日出帆、且滞琉之英人妻去年十一月平産女子致出生候段、自琉球以飛船申越候旨等、委細御奉行所へ御届仕候段為知申来、

五月十六日、同二十一日

於長崎對州聞役ヨリ以廻狀、彼御領海閏四月二十日、

對州沖合ニ數多之白帆異国船二隻相見西之方へ向乘行候旨、長崎御奉行所へ御届相成候段、彼方聞役ヨリ以廻狀申来、

五月朔日異国船追々相見地方近ク乘来、其後帆影不相見旨、且又朝鮮国威鏡道利原ト申所へ四月三日異国人十七人小船ヨリ揚陸木ヲ伐候ニ付、利原之者令向情候処言語文字不相分手真似ニテ考候へハ、大船洋中ニ碇ヲ卸居薪払底ニテ薪取之タメ揚陸候ト相見無程致出船候趣申来候、同四日白帆數多之異国船同御領海へ相見同五日地方近ク乘通り候、右之趣追々御奉行所へ被仰達候段申来、

六月六日

於長崎平戸聞役ヨリ以廻狀、五月朔日壹岐国沖合所々ニテ異国船見出候段、委細之趣御奉行所へ御届有之旨申来、

六月二十四日

〔表紙〕

# 齊興公史料

(市來四郎編)

嘉永二年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料(紙数五十七枚)」の記載あり〕

## 目録

- 江戸邸在勤ノ輩出入制限令
- 知行高分限令
- 諸士禄高内山林地調査令
- 御一門家及ヒ大身分禄高分限令
- 給地高性質及売買法令
- 分家ノ者禄高所分ノ令
- 給地高改正期限延期達書

給地高払下布達

小普請銀滞納者禄高返下等ノ達書

寺社局在金拝借返上達書

諸士禄高ニ課スル出米納收布達

寄合以上ノ輩風俗匡正及ヒ軍務調否ノ達書

禄高所有分限令

全上追加布令

軍役出米参考

参考 安田助左衛門日記抄

参考 鎌田正純日記鈔

以上十七条

六四六 江戸邸在勤ノ輩出入制限令

御屋敷中御取締向且御門出入之義ハ以前ヨリ御作法被  
 定置、殊ニ追々分テ被 仰出之趣モ有之、委細申渡一  
 統奉承知候通ニテ聊取違ハ有之間敷事候処、問ニハ不  
 勘弁之向モ有之哉ニ相聞得別テ如何之至ニ候、将又御

屋敷内外ニ不限大酒ヨリ不慮之義モ出来、且ハ御門限等閑ニ相心得出入之節モ行儀猥成時宜ニモ成立、甚以不埒之至ニ候条、向後追々被 仰出之趣堅ク相守、万端謹慎肝要ニ候、勿論質素節儉衣服沙汰等之儀モ追々被 仰出之趣、急度相守取違有之間敷候、

一 高輪西向南向其外諸所御屋敷廻モ同様之事候間同断可相心得候、左候テ勤番之者ノ所へ婦人出入之義決テ不相成段ハ、去ル丑年(天保十二年)分テ申渡其後モ申渡置通之条、是又右申渡之趣堅ク可相守候、右之通此節猶又 御内沙汰之趣モ被為 在候条、此上不行届之義共有之候テハ屹ト不相成訳ニ候間、人々諸事謹慎、御門出入ハ勿論、一体猥ケ間敷儀無之様誠実ニ可相嗜候別段見聞ヲモ掛置候付、乍此上取違之向モ候ハ、無用捨可及沙汰、此旨向々へ不洩様可致通達候、

正月九日 豊後島津久宝

六四七 知行高分限令

屹度立候御役(城代及ヒ国老以下町奉行迄ヲ云フ)相動、

又ハ地頭職(一郷之頭ヲ云フ)被下置候面々ハ、其身之家筋俗生(城下士ニ各郷士其外ヨリ出身)ニ無御構持高五百石限可被成御免候、小番以下家筋俗生不宜候テ代數相立候者ハ、応家格五拾石ツ、相劣候方ニ被 仰付候、尤其内郷養子(諸郷士ヨリ城下士ノ養子トナルヲ云ヒ、其輩ハ城下士同等ナラサル格式ナリキ)、又ハ被召出候者三代迄ハ、五拾石ニハ不被 仰付候間、御改正中ハ右之通致取扱候様、可承向々へ可申渡候、

正月九日 豊後全上

笑左衛門調所 広郷

六四八 諸士禄高内山林地調査令

諸郷抱地高(城下以外ノ各郷内ニ自費開墾地ヲ云フ)身分違(士分以下郷士其他農工商ニ格式違背密売セシヲ云フ)之者共へ売渡置候株ハ、此涯請持郡奉行・山見廻・所役々立会、本高ハ勿論畦反・立木・地位等委敷見分之上致直付、聊無間違可申出候、右ニ付テハ売渡先不正之取計等有之候モ難計候間、右等之儀至極念入等閑之儀

共決テ無之様取シラベ可致候、左候テ立木等伐届当毛

(耕作收穫ノ予計ヲ云フ) 不取荒候様、是迄支配仕来之者

へ取締申渡、若不守之者ハ屹ト可及迷惑(斃罪又ハ譴責

或ハ事柄ニ依リテ没収スル等ノ通唱) 候、此旨申渡可承向

へモ可申渡候、

但帳面取仕立可差出候、尤一冊ハ同案ヲ以高奉行へ

可差出候、且被差越候山見廻之儀ハ人柄取調可申出

候、

正月廿七日 豊後<sup>上全</sup>

笑左衛門<sup>上全</sup>

右取調ノ人員

山奉行

安藤佐次兵衛

郡奉行

野村庄右衛門

右谷山并伊集院

郡奉行

黒葛原源左衛門

山見廻

市來半之丞

右浦生并郡山・鹿兒島郡吉田

右ハ諸人抱地之内身分違之者共へ壳渡置候様ハ、此涯

立会所役々等召列本高ハ勿論、畦反・立木・地位等委

敷見分之上致直付、聊無間違可申出候、右ニ付テハ壳

渡先不正之取計等有之候モ難計候間、右等之儀至極念

入等閑之儀共決テ無之様取シラベ可致候、左候テ立木

伐取当毛不取荒候様是迄支配仕来之者共へ取締申渡、

若不守之者ハ屹ト可及迷惑候、此旨申渡可承向々へモ

可申渡候、

但帳面取仕立可差出候、尤一冊ハ同案ヲ以高奉行方

へ可差出候、

正月廿七日 豊後<sup>上全</sup>

笑左衛門<sup>上全</sup>

六四九 御一門家及ヒ大身分祿高分限令

現地被下置候一所持式拾老家之面々(御一門四家領地所

有ノ門閥家ヲ云フ)、余人名前高(余人名前高トハ領地外ノ

高買取リタルヲ云フ) 永代買取置、年々取納被致来候高

タリ共、此節ハ高直シ不被成御免候、乍然現地貳千石以下之向ハ永代被買取置候高ハ、貳千石限りハ高直シ可被成御免候、現一所持之儀ハ家来等ヘモ夫々配当被申付置、夫丈ケハ郷高同前之訳ニテ右通可被 仰付候、

一人ヨリ附高(附高トハ他人ノ高買取、名ハ別人ニシテ其取額ヲ取ル、之ヲ附高ト通唱ス)請合居、自分名前ニ直シ居候高タリトモ、自高ニ被致候儀ハ一切不相成候、且又

自分名前之高一旦余人ヘ被壳渡置候株モ、現高貳千石以上ニ候ハ被受返候儀遠慮可有之候、貳千石以下之向ハ貳千石限ハ被受返候儀可被御免候、

但貳千石以上之向モ一所之高余人ヘ被壳渡置候株ハ 自分名前之外高ヲ以繰替イタシ度向ハ可被願出候

一現地不被下置一所持(一所持ト唱フル格式ノ中ニ現ニ一郷

一村ヲ領シタル者二十一家アリ、其他僅ニ半村位ノ地ヲ領シ或ハ格式ノミ其例ニ在リテ領地ナキモノ數家アリ、此輩ハ尋常壳

買祿ヲ所有セシ故、盛衰貧富ニ依リ時トシテ高ノ多少増減アリ

ヨリ寄合・寄合並迄、右之面々余人名前高永代被買取置、年々取納被致来候高タリ共、此節ハ高直シ御免

不被成候、乍然現地千石以下之向ハ永代被買取置候高ハ、千石限りハ高直シ可被成御免候、

一人ヨリ付高名前受合居、自分名前ニ直リ居候高タリ共、自高ニ被致候儀不相成候、且又自分名前之高一旦余人ヘ被壳渡置候株モ、現高千石以上ニ候ハ、被受返候儀遠慮可有之候、千石以下之向ハ千石限ハ被受返候儀可被成御免候、

右ハ此節給地高御改正中右之通被仰付候条、此旨向々ハ不洩様早々可致通達候、

但御改正中散高(散リ高云々、則チ壳買祿、一ト門ノ内ヲ分割シテ幾石ト分チテ壳買スルヲ云)被買入候儀ハ先達テ申渡通ニ候、

正月 豊 後全

笑左衛門全

此節給地高御改正ニ付、高代被相定候処、前以高買取置候面々、増錢(時価相当ニ増償スルヲ云フ)入付不相調高主ヘ差返シ候高、都テ可差上旨申渡置候処、御吟味

之訳有之、右高

御手許(藩主手許ヲ云フ)計ニテ壹石代錢貳拾貫ツ、ニ御買上可被 仰付候条、右差上高之内永損(田島損潰シテ復シ難キヲ云フ)・休地(休地水損等ニテ年ナラス修復ノ見込アル地ヲ云フ)等有之株ハ、無間違取シラへ可申出候、左候ハ、差出相揃候上代錢可被相下候条、此旨高差出候面々へ可申渡事、

正月 笑左衛門上

### 六五〇 給地高性質及売買法令

給地高之儀ハ全体御高之内ヲ(七拾七万余石ノ内四拾余万石ヲ、御一門四家ヲ初メ琉球王其他士分ノ家祿ニ分与シタルヲ云フ)給地へ被差分置、御国役御軍賦之根本ニ候得ハ別テ重キ品ニ候処、一統士風相衰自己之物之様差心得候様成立、甚取違(以脱カ)之事候段ハ、追々被 仰渡置候通ニ候、然処豪富之面々は迄兼併(所有定規外ニ買取リタルヲ云フ)之高一時ニ売払、直段致下落候ヲ仕合ニ存シ、法外下料之直成ヲ以買入、又ハ連々高直ニ売渡置候、高

主ヨリモ同様之応対イタシ、或ハ重代之武器迄モ致売却高相求候振合ニ成立、太切(大カ)成御高之訳弁へ無之筋ニ相当リ候趣共被聞召上、士風ニモ相抱リ甚如何之事候得共、此節ハ別段不被遊 御沙汰候付致吟味、相当之直成ヲ以御高之詮相立候様可取計旨御内沙汰被為在、誠以奉恐入次第ニ候、依之旧冬十一月十五日御改正被仰出候以後、高売買イタシ候分ハ、壹石ニ付代錢貳拾貫文ニテ可致引結候、右直成ニテ増代錢相渡候儀不相調者ハ、入レ附置候代錢丈ケ之石数相請取候儀ハ其通ニテ、来月十日限屹ト致引結、其日限残り石数等帳面ニ相認メ、本高主・買主双方ヨリ届可申出候、左候ハ追テ何分可申渡候間、其内右高売払候儀差留候、此旨向々へ不洩様早々可致通達候、

二月晦日 豊 後上

笑左衛門上

### 六五一 分家ノ者禄高所分ノ令

是迄余人名前之高過分買取置候面々、御改正ニ付脇方



へ売払候筈之高ヲ以別立(分家ノ通語)又ハ他家養子等  
 へ遣置候二・三男等之内へ合力(既ニ分家セシモノ家禄分  
 与ヲ云フ)高之願申出候者共、買取高ヲ以テ合力之儀ハ  
 不相成、自分名前高ヲ以致合力候儀ハ勝手次第可致旨  
 申渡置候処、右面々申談合力見合置候高ヲ互ニ取替、右  
 二・三男等買入候筋之引結イタシ候儀ハ有間敷儀ニ候  
 処、万一心得違之者モ候テハ別テ不束(不注意ノ通語)  
 之至以之外成事ニ候、勿論高直シ限月モ差掛及混雜候  
 付、右合力等願出候高株ハ、何分申渡迄之間ハ余人へ  
 売渡候儀不相成候条可申渡候、

三月廿七日 豊 後全上

笑左衛門全上

六五二 給地高改正期限延期達書

給地高御改正ニ付、一統当月限高直等申出候様申渡置  
 候処、諸郷之内ハ日延等申出候場所モ有之候付、来月  
 十五日限屹ト取究日限通高奉行所へ申出候様、受持郡  
 奉行早々差越無間違致取扱候様、可承向々へ可申渡候、

三月廿八日 豊 後全上

笑左衛門全上

代々御小姓与被召出候モノ市中居住候ニ付、外名前ヲ  
 以職屋相建、或ハ商家并諸支配方ノ者家代(後見人ノ類)  
 相立、市中居住之者高持成被仰付候テハ、武家商家之  
 差別無之候付(藩政中士商ノ分嚴ナリシ故、士タル者商事ニ  
 関シ得サルハ無論市街ニ居住スルコト能ハサル規定アリ、若  
 シ已ムヲ得サル事情アルカ或ハ近世商売或ハ医業等ノ営業ニ  
 依リ士分ノ列ニ加ハリシ輩、市街ニ居住シ禄高所有スルコト  
 ヲ得サリシヲ云フ)右体之者ハ以来高持成不被仰付候条  
 帳面ニ可記置旨高奉行へ申渡、可承向へモ可申渡候、

三月 豊 後全上

笑左衛門全上

六五三 給地高払下布達

今度御軍賦ニ付、知行高御改正被 仰出、追々御取調  
 相成、小番以下諸士(門閥ヲ除クノ外目見以上ノ士分ヲ云

コ一統へ御引並シ之訳ニハ難被行届候得共、分限相当ニ相居リ候付、余高之内此節寄合以上現高百五拾石以下之面々、本高合テ百五拾石限、寄合並之儀ハ前条同断百石限申受（私ヒ下ケノ通唱）可被仰付候条、来月十日限申受度人ハ高奉行へ相付可被願出候、若日限及延引候向ハ追テ被願出候共申請不被仰付候、此旨申渡可承向へモ可申渡候、

四月廿五日 笑左衛門全上

#### 六五四 小普請銀滞納者禄高返下等ノ達書

小普請銀（禄高所有ノ者相当ノ職務ナキ者ハ、禄高老石ニ付銀老奴ノ割ヲ以テ小普請銀ト唱へ課出シ、道路・橋梁・堤防修造ノ費途ニ充ルノ規定アリ、或ハ輕罪ノ者ヲ小普請入ト唱へ、同シク禄高ニ賦課スルハ前記ノ如シ）不納又ハ利息不納有之面々、依願持高等差上所務差引被仰付置候向モ有之候処、此節利足<sup>〔帶納脱カ〕</sup>ハ都テ被成御免、差上置候高被返下候本銀滞納ニテ同断之向モ高之儀ハ都テ被返上候条、<sup>〔下カ〕</sup>本銀之儀成丈可致皆納、其上ナカラ皆納難叶向ハ年賦返

上可被仰付候間、早速願出候様被 仰付候、就テハ此節給地高御改正被 仰出、一統御軍役分限相応相勤候様、厚 思召之訳ヲ以當時御改革中不容易儀ナカラ右之通被 仰付候条、雖有奉承知候様向々へ不洩様可申渡候、

但小普請（新輕罪者ハ特別ノ処分ナシ）被入置候者共ハ別段之事候付、利足御免無之、差上置候高モ不被返下候条、是又可申渡候、

小普請銀利被成御免、差上置候持高等被返下候段ハ別段申渡通ニ候、右ニ付テハ高奉行・御代官申談、元銀不納之向ハ別段改テ引付（賦課ノ金員ヲ記シ期日ヲ定メテ達書面ノ通唱）差出、成丈皆納イタシ候様申渡、乍此上皆納不相調者ハ、応銀高年賦返上等之儀取調、当月中可申出候、此旨高奉行御代官へ申渡、可承向々へモ可申渡候、

四月 笑左衛門全上

小普請銀之儀是迄滞納之向多ク不可然事ニ候、然処此

節御改正ニ付利銀不納之株被成御免、差上置候高被返下候儀當時柄別テ難有次第二候、就テハ以来屹ト滞納無之様不被取計候テハ難相成事候条、此後引付上相渡候節ハ、上納迄之手続ケ様々々取計候ハ、滞納無之様取計之道モ可有之候間、右等之儀得ト致吟味可申出候、此旨高奉行へ申渡、可承向へモ可申渡候、

四月

笑左衛門全上

六五五 寺社局在金拝借返上達書

往古寺社方御銀之内致拜借為引当名寄帳（石高及ヒ地所反別記）差上置、利銀上納被仰付来候面々、及滞納候向ハ、引当高御取揚可被仰付事候得共、依頼内上納ニテ月延等申付置候処、此節給地高御改正ニ付、来月十五日限元利皆返上ニテ名寄帳申下候様申付候条、若上納方不相調ハ引当高差上切願出候様可申渡旨、寺社奉行へ申渡、可承向々へモ可申渡候、

五月

笑左衛門全上

六五六 諸士禄高ニ課スル出米納収布達

此節給地高御改正付、高直シ之儀追々申渡通ニ候、右付当秋ヨリ出米之儀持高ニ応シ（諸士禄高一石ニ八升壹合ヲ課シ、是ヲ共同倉庫ニ納メ軍費又ハ堤防修繕ノ費ニ充ツ）何石丈何方何村何門ヨリ致上納度趣帳面ニ相認メ、来月十五日限高奉行所へ無間違可申出候、

是迄高買入候節ハ、高主方ヨリ所（其郷村ノ通唱）庄屋方へ取納之儀致問合来候得共、此節ハ郡奉行方へ来月十五日限帳面ニ相認メ無間違可申出候、左候テ所役々ニハ郡奉行ヨリ可申渡候、

諸人高直シ之願申出御免之節々、以来ハ高奉行ヨリ郡奉行へ時々問ヒ合ヒ、郡奉行ヨリ当秋ヨリ何方へ致取納候様、所（全上）役々へ申越候様被仰付候条、無間違受持郡奉行ヨリ所役々へ可申渡候、

右之通申付候条向々へ致通達、高奉行・郡奉行ヨリ以来無間違様可取計旨可申渡候、

五月

笑左衛門全上

六五七 寄合以上ノ輩風俗匡正及ヒ軍務調否ノ

達書

寄合以上之儀ハ大身分（御一門四家ヲ除クノ外門閥家ノ惣唱）ト相唱、別テ重キ家格之事候付、寄合ハ高千石、寄合並ハ高五百石之御軍賦ニ被定置、分地別立（分家ノ通唱）等其通被仰付事ニ候、殊ニ地頭職（一郷ノ長）被仰付置候面々ハ地頭所人数モ可被召付身柄ニ候得ハ、兼テ其心得ヲ以万端心掛律儀相嗜、隊下之諸士致信服候様無之候テハ不相叶、勿論軍務之儀ハ一日之費用モ莫大ニ相及、從古來之御作法通右面々ハ自飯之兵糧用金等致用意置、第一家來等急変之節不事欠様致扶持武具一切可相備置事候処、先年ヨリ毎度被仰渡置候通、大身中之風俗一体相衰へ、左様之心掛無之、適弓馬・鉄砲等取扱候テモ実場之心付無之、平常出入之者共（阿媚追從ノ輩ヲ云フ）モ過半其身之存慮ニ随ヒ候者勝相集メ、専勝負事取企大酒ニ及ヒ或ハ遊芸等翫ヒ、質素節儉之取締無之候故、連々所帯方衰微ニ及ヒ家格之御奉公難相勤様成立、先祖之以功勞被下置候持高、又ハ

一所同前之地迄モ追々致活却、領内家來・百姓・浦人等へ臨時之出銀等申付候時宜ニモ相及、古來致撫育候恩顧之家來迄モ無抛相離レ、イツレモ別テ恥辱之事候処、是以心付モ無之哉ニ相聞得、段々無高・小高之面々有之、至テ不埒之事ニ候、乍然御軍役ニ付テハ、家格相当不被仰付候テ不叶事ニテ、寄合之儀ハ千石、寄合並ハ五百石之御軍賦別冊之通ニ候条、弥御賦通相勤候儀可相整哉、何分可申出旨被仰出候条、來ル廿五日限何分被申出候様可申渡候、

六月 近 江末川  
久平

笑左衛門全上

此布達タルヤ、久シク泰平無事ニシテ上下挙テ華奢遊伏ニ流レタルノ末ナレハ、概ネ具備セサル旨ヲ申立タル者少カラス、或ハ少シク具備シタルモ必ス患ヲセラル、ナラント不備ナル旨届ケ出、或ハ當時其筋ニ縁故アルモノハ、密ニ処分ノ結局如何シヲ探知シ具備シタル旨ノ届ヲナシタルモアリシト、然ルニ具備セサル旨ノ届ケ出タル輩数十名（人別後ニ記ス）ハ、不注意ノ謹責ヲ蒙リ格式ヲ

貶下セラレタリ、此時人心蠶々調所及ヒ海老原等カ行爲ヲ誹譏スル倍々甚シキニ臻レリ(山口不及或ハ村野傳之丞等カ齊彬公へ密上申書參看)

六五八 禄高所有分限令

諸組(御城下居住士小番・新番・御小姓組・与力之四ツヲ諸

組ト通唱ス、以上ヲ騎馬組トモ唱ヘタリ)

右是迄之通

右ハ御軍役御手当向之儀、專知行高之分限ヲ以用意可致御規定被相居候処、高上リ御規模之儀享保之度被究

(古昔ヨリ士分ハ幾男子アルモ皆士分ノ列ニ置キ、他家養子或

ハ分家セシムル等ノ自由ヲ得セシメタルニ、享保ノ頃門閥家ノ

二三男以下ハ一等格式ヲ下リ分家ノ制ヲ定メ、本家ノ家禄ヲ分

与スルニ、規定ノ禄ニ余計ナキハ分与スルヲ許サス、或ハ分家

スルニ方リテモ、五石以上ノ家禄ナケレハ許サ、ル規定トナリ

シ故、年々御目見以上ノ士分厄害ノモノ夥多ナルニ至レリ、茲

ヲ以テ近代ニ至リ無禄資ナキノ士多キハ蓋シ是レニ由レリ)

置、其後追年諸士其外株数相嵩給地高不引足、家柄之

面々迫モ小高等ニテ家格之御軍役相調兼候モ有之、先般給地高御改正モ被仰渡、可成丈給地高行渡候様ニト之御趣意ニ付、高上リ石数之儀モ一往右之通減少被仰

付候、尤当分持来候分モ、前条石数ヨリ致過上候テモ

今形ニテ、以来新規相求候者迄右之通ニ候、且又小番

(家格寄合ノ次ニ在リ)以下ニテ前条御定之石数ヨリ格別

過上之向モ、家筋俗生之依訳テハ御吟味之上減少被仰

付儀モ可有之候、其外全体取扱振之儀ハ是迄之通被仰

付候、此旨帳面ニ記置候様高奉行へ申渡、向々へモ可

致通達候、

八月 豊 後島津 筑 後全上

將 曹島津 近 江末川

六五九 全上追加布令

給地高員数御改正定

一 壹所持

一 壹所持格

右三千石限

一 寄合

右貳千石限

一同並

右千石限

一小番

右三百石限 (此前ハ千石限)

但當時御側役以上之御役又ハ地頭職相勤候人ハ勤

役中五百石限

一新番

右貳百石限

一 御小姓与

右百五拾石限

一 郷士

右五拾石限

一 諸与与力

右是迄之通三拾石限

右ハ御軍役御手当之儀、專知行高之分限ヲ以テ可致用意御規定被相居候処、高上リ御規模之儀享保之度被究

置、其後追年郷士其外株数相當給地高不引足、家柄之

面々込モ小高等ニテ家格之御軍役相調兼候モ有之、先

般給地御改正モ被仰渡、可成丈給地高行キ渡候様ニト

ノ御趣意ニ付、高上リ石数之儀モ一往右之通減少被仰

付候、尤当分持来候分ハ、前条石数ヨリ致過上候テモ、

以来新規相求候儀是迄之通ニ候、且又小番以下ニテ前

条御定之石数ヨリ格別過上之向ハ、家筋俗生等之依趣

ハ御吟味之上減少可被仰付儀モ可有之候、其外全体取

扱振之儀ハ是迄之通被仰付候、此旨帳面ニ記置候様高

奉行へ申渡、向々へモ通達可致候、

八月十四日 豊 後 全上 筑 後 全上

將 曹 全上 近 江 全上

全上参考 享保度定規 (文政七年ノ部ニ詳記ス)

一大身分九千貳百石程

一一所持七千石

一右同格五千石

一寄合 三千石

一 寄合並貳千石

一 寄合御定之格ニテ無之者ハ千石ニハ御免無之候、

一 御家老直触(家老組ト唱ヘ家格又ハ職務ニ依リテ其別アリ)

其外当時屹ト立上御役又ハ地頭職ニハ、千石ヨリ内高

上リ御免、当分持高ヨリ上九拾石余百石之内高上リハ

御法之通、百石ヲ越候節ハ願之上御免、

一 祖父曾祖父代ヨリモ屹ト立候御役相勤候者、且地頭職

上全ヲモ被仰付候者之子孫、小番勤来候者ハ、五百石成

御免可被成候、

但百石之節ヲ越候涯ニテ願出伺之上御免、

一 三百石成ハ代々士筋ニテモ近代御歩行動近仕之身モ右

通ニ候ハ、御免無之、道中鑓為持候程之勤仕之様子ニ

ヨリ御免被成位モ可有之、夫ニテモ御歩行動之者ハ御

免無之、代々士筋ニテ大番(近代小姓組ト改唱ス)相勤候

者ハ貳百石成御免、

一 外城(郷士)養子ハ其身代ニハ五拾石ニハ御免無之、悴

代ニハ五拾石以上九拾九石余迄御免、与力ハ三拾石ニ

ハ不被仰付、乍然御奉公之品ニヨリ候テハ格別与力(

小姓組ノ次席)座ヲ離レ、士(御小姓組ノ通唱)之養子ニ

成候ハ高上リ外城養子同断、

一 外城(全上)養子三・四代過候ハ、百石成御免、与力座

ヲモ離レ三・四代過百石成願申出候ハ、御免、三・四

代内ニテモ諸奉行之格無役ニテモ、御馬廻又ハ一代小

番御免相成候者ハ百石成御免、

一 郷養子ニテモ代々小番相勤候筋目之養子ニ相成小番相

勤候ハ、是亦御免、

右享保度之定規ナルヲ此回ノ参考ニ供シ取捨セシモノナ

リト云フ、

六六〇 軍役出米参考

琉球国知行高目録

沖繩

高五万七千九百九斗三升 本琉球石高

久米島

高三千貳百五拾壹石四斗七升

計羅摩島

高百八十八石八斗式升

宮古島

高老万千式百八拾八石式斗卷升六合

八重山島

高五千九百八拾石九斗三升四合

マヅニ  
亞國島

高六百七十五石八斗五升

トナキ  
登那幾島

高四十一石四斗四升

イエ  
伊惠島

高三千三百七十石九斗三升

イセナ  
伊世那島

高六百九十六石六斗二升

マブヤ  
間部屋島

高五百石一斗九升

惣合高八万三千八拾五石三斗一升

右知行ノ事永々進置候間全可有御領者也、

寛永六年己巳八月廿一日 家久 御在判

中山王

一 田島竿ノ儀前々ハ卷丈三尺式間ニシテ卷竿ニテ候処、

尺御検見ノ時分御相談有之七尺五寸卷間ニ相直シ候、

如前々六尺五寸ニテモ卷方ニ相究メ可申上候由被仰付

候、依之我々遂僉議候ハ国元田地六尺五寸賦ノ由候、

尤御当地竿入ノ砌モ右賦ノ竿ニテ為相済由承候条、六

尺五寸ニ御召成可然哉ト奉存候、以上、

康熙三拾六年丁丑九月十三日 元禄十年 丁丑

高奉行

グシカミハイゼン  
具志頭親雲上

トガシキ  
渡嘉敷親雲上

カミサト  
上里親雲上

タ  
田場親方

一 崇禎八年乙亥（寛永十二乙亥）御当国初テ牛馬口米代銀

卷疋ニ付式分五リツ、相掛リ候、

寛永十三年丙子

一同九年丙子初テ琉球國頭数村人改有之、

但萬曆三十七年己酉（慶長十四己酉）琉球入（征討ヲ云



ヨリ二拾九年目ニ当ル、

一頭高十萬八千九百五十八人

内 男五萬三千六百十人

女五萬五千三百四十八人

寛永十三丙子（崇禎九年）

一同十一萬千六百六十九人

内 男五萬四千四百九十六人

女五萬七千七百七十三人

寛文五乙巳年（康熙四年）

一同十一萬二千四百一十一人

内 男五萬四千八百八十八人

女五萬六千五十三人

萬治二己亥年（順治十五年）

一同十一萬二千七百六十四人

内 男五萬五千七百二十一人

女五萬七千四十三人

寛文十二壬子年（康熙十一年）

一同十一萬六千四百八十三人

内 男五萬七千五百四十人

女五萬八千九百四十三人

延寶五丁巳年（康熙十六年）

一同十二萬二千二百十三人

内 男六萬五百五十八人

女六萬六千六百五十一人

貞享元甲子年（康熙二十三年）

一同十二萬九千九百九十五人

内 男六萬四千二百三十五人

女六萬五千七百六十人

元祿三庚午年（康熙二十九年）

一同十二萬八千五百六十七人

内 男六萬三千四百三十人

女六萬五千百三十七人

元祿十二戊亥年（康熙三十七年）

一同十四萬千八百八十七人

内 男六萬九千九百九十五人

女七萬九千九百九十二人

寶永四丙戌年（康熙四十五年）

一同十五万五千二百六十一人

正徳三癸巳年（康熙五十二年）

一同十五万七千七百六十人

享保六辛丑年（康熙六十年）

一同十六万七千六百七十一人

内 男八万 九人

女八万七千六百六十二人

惣合牛馬二万二千七百九十四疋

一疋ニ付一升九合四夕七才ツ、

一口銀代米四百四十三石七斗九升九合一夕八才

但是ハ御蔵へ入り、大和（藩庁ヲ云フ）へハ銀子納

ナリ、

覚

一牛馬口錢ノ儀一疋ニ付二分ツ、相納米候処、二分相重

都合四分ツ、当年ヨリ上納可仕旨被仰渡候、然ハ於御

当国ニ其分重可相重筈トテ可有之候得共、当時代米四

百四十四石五斗五升四合八夕六才上納有之候得ハ、此

上相重上納候儀及間敷旨被仰出、此中ノ通取納有之筈  
候間可被得其意候、為納得如此候、以上、

康熙五十七年戊戌十月十七日（享保三戊戌）

御物奉行

諸出米

但反米賦米ハ大和（全上）上納、牛馬口米ハ銀子

ニ引直シ大和（全上）へ上納、荒欠地浮得御返

濟出米ハ琉球也、

知行並仕明（自墾地ノ通唱）知行高一石ニ付

一反米一斗一升四才

但本知行ニハ三出米（三分一ノ通唱）無之候、百姓地

高ニテ相懸仕明知行畠方ハ高半分（二分一ノ通唱）

ニ成シ反米懸ル也、

知行高一石ニ付

一御返濟出米一升六合五夕二才

但物成一石ニ付六升三合六夕一才ツ、

請地頭（疏官吏又ハ身分アル者）作得一石ニ付

一 御返済出米六升三合六夕一才

但高一石ニ付二升三合四夕二才、雜石ニハ半分引

合

百姓地並仕明知行・仕明請地高一石ニ付

一 三出三升三合七才

内

是ハ御国元ヨリ一升四合九夕五才運賃共相掛リ候へ

共、荒欠地高分モ籠候故、此缺失員カ数ニ成高ニ掛

ル、

一 升五合五夕一才 賦米

一 升七合一夕八才 荒欠地出米

三夕八才 浮得出米

百姓地並仕明知行・仕明請地高一石ニ付

一 御返済出米二升三合四夕三才

仕明知行並仕明請地敷請地高一石ニ付

一代官出米入目、出米一升二夕八才九分

但

年々少々ツ、多少有之

應正三年乙巳四月(享保十年ニアタル)高主へ此書  
付被下候也、

手形

一本高百石ニ付三石六斗八升二合五夕

右御当地御高ノ儀、寛永年間ノ盛増半分被仰付、都合

御高九万四千二百三十七石七斗九夕四才被仰付、来酉年

ヨリ出物上納可仕由御国元ヨリ被仰出候間、此旨被成

承知其支配可被致者也、

巳四月廿四日(享保十年)

西平親方

浦添親方

御物奉行

高奉行

六六一 参考 安田助左衛門日記抄(御軍賦役職ヲ以

テ給地高改正兼勤ナル故、日記全文ヲ鈔ンテ

参考ニ供ス)

嘉永二年己酉四月十九日西御役所(長崎在勤中)へ御使

者相勤、御奉行大屋遠江守殿御逢被成候、四月廿五日  
歸府、

一於長崎彼表諸家御手当ノ次第密伝致シ、写方其外間カ  
方等細々手ヲ付、此御方御陣場大徳寺平野雄平処、陣  
小屋掛ケ方兵粮諸入具ノ儀共相究申上候（長崎援兵準備  
ノ為メ出張ス）、

一閏四月二日異国船坊津沖へ相見得候注進有之、四ツ半  
時分横山安之丞（儒者）・上野彦助（御軍役方筆吏）其外  
見聞役同道出宅、指宿・山川ヨリ坊泊・加世田・大崎  
迄廻勤、同五日歸府、

得能彦左衛門

安田助左衛門

野元源五左衛門

右御改正ニ付、御買入相成候給地高此節取調被 仰付  
候付、被掛置候条可申渡候（此三名皆御軍賦役ノ職務ヲ以  
テ高奉行ヲ兼勤ス）、

六月

將曹全上

右之通り西六月致承知、御勘定奉行初掛リ面々杉之  
間縁類へ御座立吟味有之候事、

安田助左衛門

税所七郎左衛門

田中清右衛門

右人数外ニ田代孫九郎・松本喜兵衛（御軍役方筆吏）東  
目（大隅国各所ノ惣唱）諸所調練武芸見分トシテ八月十  
七日出立、九月六日歸府、

嘉永二年己酉九月廿五日吉野御関狩当務ニテ罷登ル、  
惣人数六千五百五拾九人ナリ（御関狩ノ部参看）、

安田助左衛門

上野彦助

右諸郷へ被渡置候御兵具并御番所等為見分溝邊諸所廻  
勤被仰付、十月廿四日出立、十二月二日歸府、

安田助左衛門

上野彦助

右ハ御用ニ付キ御領内海岸諸所廻勤被仰付候条可申渡候、

十二月 豊 後全上

右之通り西十二月晦日承知、

六六二 参考 鎌田正純日記鈔

一 応分限名実相備候御制度、左条之通追々被相定可然哉之事、

一 御一門方

右持高是迄之通、

一 所持

本文戌年(天保九年)三千石限ニ被仰付度候、

右以前ハ知行七千石限御免被仰付来候得共、以来三

千石限被仰付、右以上持来候分ハ是迄之通可然哉之

事、

一 所持格

本文戌年(全上)三千石限ニ被仰付候、

右以前ハ五千石限御免被仰付来候得共、以来一所持

同様三千石限御免被仰付、右以上持来者ハ前条同断

可然哉之事、

一 寄合

本文戌年(全上)ヨリ二千石限被仰付候得共、猶又

御吟味有御座度候事、

右以前ハ三千石限御免被仰付来候得共、以来九百石

限御免被仰付可然哉之事、

但御定以上持来之面々ハ御買上被仰付、一所持格

・寄合格別成家筋ニテ小高之面々へ申受可被仰

付哉之事、

一 寄合並

本文戌年(全上)千石限被仰付候得共、猶又御吟味

有御座度候事、

右以来五百石限被仰付可然哉之事、

一 小番

本文戌年(全上)三百石限被仰付候間、猶又御吟味

之事、

右以来四百石限御免被仰付、右以上持来候分ハ御買上被仰付、小番・新番・御小姓・与力迄格別成家筋、小高之面々へ申受被仰付可然哉之事、

一新番

本文戌年(全上)二百石限被仰付、猶又御吟味之事

右三百石限、右以上持来候分ハ前条同断、

一御小姓与

本文戌年(全上)百五拾石限被仰付候間、猶又御吟

味之事、

右二百石限、右以上持来之分ハ前条同断、

一郷士(百一外城毎ニ居住ス)

本文戌年(全上)五拾石限被仰付候間、猶又御吟味

之事、

右百五拾石限、右以上持来之分ハ前条同断之事、

一諸組与力

右是迄御定之通、右以上屹ト不相成筋、

一御一門方并ニ万石以上其外一所領地等被下置候面々之

家来ハ、往古ヨリノ給地モ有之筈候付、主人之高頭ニ

応シ随分過当無之様、此節御規定被相居候御取扱ニ準

シ家中之仕置有之候様、屹ト被申付候様被仰付度候事、

一一所持ニテ現地無之面々、當時之姿ニテハ寄合ニ劣リ

候身体之人モ有之候ニ付、都テ取調之上相応之領地被

下置筋ニモ可有御座哉、又ハ其儀難被為調候ハ、以

来一所持格ト唱候様被仰付、家格連名之次第是迄之通

ニテ何篇現一所持同様被仰付置、右家之筋内ヨリ、以

来抜群抽忠孝候欵又ハ三代引統御家老職相勤候モノ於

有之ハ、諸郷村之内ヨリ不差支場所割出シ、何方郷之

内何方ト名目現地被下置、其節一所持之唱被仰付候筋

ニモ可有御座哉、左候テ名実相叶一統之励ニモ罷成、

第一御軍備之根元モ相居候半ト奉存候事、

但川上筑後・島津將曹・新納四郎・桂太郎兵衛・町

田監物儀ハ、格別之家筋ニ御座候ニ付、右之御取訊

ヲ以テ即チ領地可被下哉、於其儀ハ新納四郎・町田

監物ニハ当分持切在ヲ直ニ一所持之地ニ可被仰付候

哉、島津將曹儀ハ千石以上ニ付、別段五百石位之地

面被下、持高練替可被仰付哉、川上筑後ハ往古鹿兒

島川上村領地之由御座候ニ付、右ヲ本之通被下置可  
然哉ト奉存候、

一 一所持格以上知行千石無之面々ハ、御取調之上追々千石ニ都合致候様、左候テ右家筋御取揚高等之内ヨリ申受被仰付、以上ハ高壳払候義屹ト被差留度、万一不気量ニテ家法取乱シ難致連続モノハ、身近キ親類之内へ後見被付、其上モ家督難調モノハ半地御取揚之上家格被召下候御取扱被仰付度事、

右ニケ条ニ付、左之通之向ヲ以テ可被仰出哉之事、

一 一所持ノ面々此涯被下置候儀不被為調候ハ、左之通可被仰出哉、

一 現地無之一所持家筋之面々、先祖代一所有之候由緒ヲ以テ、淨（浄律古書）國院様御代右唱被 仰付置候得共、唱トハ名

実混乱イタシ、第一御軍賦等ニ付差支之廉有之、誠ニ以テ不容易御取扱、別テ御氣毒被思召上候得共、右家筋之分ハ以来一所持格ト相唱、家格連名之次第都テ是迄之通何篇一所持同様之御取扱可被仰付候、左候テ向後抜群心掛宜抽忠孝候欵又ハ三代引統御家老職相動候

モノハ、右之御取調ヲ以テ現地被下置、其節一所持之唱可被仰付、若家法混乱文武忠孝之心掛無之輩ハ沙汰之限ニ候条、品ニ依リ半地又ハ皆同知行被召上家ヲモ可被相下候、依テ銘々深く相励身柄相応可被心掛旨被仰出候儀、右銘々へ可申渡候、

一 一所持格之面々、持高過半千石以下ニ候間、向後追々千石ニ致都合候様御世話可被成下厚思召被為在候条、

一 統難有奉承知、先ツ其身之才覺ヲ以テ精々致儉約、知行相増候様可心掛候、自然御上之御扶助ノミヲ奉待不頓着之輩於有之ハ、屹ト可被及御沙汰給候条、先祖之家名致永統候様厚可心掛旨被仰出哉之事、

一 現地被下置候一所持家筋之面々ハ、往古ヨリ格別之御詔合ヲ以右通被仰付置候義ニテ、先祖忠功之家名永年不朽様身柄相応被抽忠孝、領内末々迄仕置行届、万一非常致到来候共、一廉之御備相成候様平常可心掛義ハ勿論之事、就ハ一涯相励、尤子孫教導方肝要ニ候、若家法混乱文武忠孝ノ心掛無之輩ハ品ニ依リ、半地又ハ領地ヲモ被召上家格可被相下旨被仰出哉之事、

一 寄合以下之面々、追々知行家格相応相備候様御吟味有之度候事、

一 一所持ヨリ諸与与力迄地行増高等ニテ御定ヨリ致過上候向ハ、右過上丈御買上ニテ小高之面々へ申受被仰付度、尤申受人之依所帯柄代銀上納不相調向ハ、百石申受被仰付候ハ、右所務之内ヨリ三部一丈年々差引上納ニテ、尾成之上都テ被成下候御仕向被仰付可然哉、左候テ小高・無高之面々へ御役料米金等被成下、書役小役人ニ至リ候テモ其通ニテ、幼少病者等御奉公難成モノへハ御扶助米金等被成下度ト奉存候、

一 諸座拝借銀、積年之屯并ニ三升重出米之儀篤ト御評議有之度候事、

本文重出米ハ御免被仰付候事、

一 御一門方并ニ万石以上

右家作当分ヨリ手広相成候義ハ屹ト遠慮被仰付度候

一 一所持格以上

右奥表両書院其外右ニ準シ、尤表書院ハ専ラ御役席

ヲ相兼候様家作被仰付度候事、

但以来致家作候節ハ幾敷何間以上不相成、敷込ハ

勝手次第、尤内証驕奢之作事屹ト御禁制、且奥

表相兼候書院一通ニテ為濟候人ハ勝手次第被仰

付度候事、

一 寄合

右奥表相兼候書院一通ニテ其外右ニ準シ、尤書院ハ

御役席ヲ相兼候様家作被仰付度候事、

但敷並其外之義ハ前条同断且是迄両書院有之候向

ハ其通ニテ、以来建替之節可相改事、

一 寄合並

右書院何敷何間敷込勝手次第、其外右ニ可準事、

但内証驕奢之作事前条同断之事、

一 諸士

右表何敷何間ヨリ何間迄ノ間且敷込勝手次第、其外

右ニ可準、尤直触（御家老）以上玄喚是迄之通、仮令

直触御役不相勤向モ玄喚勝手次第被仰付度候事、

但書同断、

一 諸組与力



右諸士同断ニテ、敷込并ニ玄喚不相成様被仰付度事、

但書同断、

一郷士(全上)

右諸士同断、且敷込ノ儀ハ勝手次第被仰付度候事、

一私領等之家来(門閭家来ノ通唱)

右郷士同様ノ振合ニテ、主人之持高等ニ応シ可成手

細之方ニ可有斟酌之事、

一一身(足輕)以下

右表何敷何間ヨリ何敷何間之間敷込不相成、其外右

ニ可準事、

但書同断、

右家作之義ハ急々建替難調事故、当分之家作御役々

見分之上致張付置、以来作事開キ修甫等之節時々御

届申出、其上御定之通可致改作、若内証ニテ致作事

是迄之通召置候者ハ、家屋敷御取揚之上屹ト被仰付

度候事、

一一所持ヨリ諸士末々迄

右屋敷ニ応シ分限屹ト名義行届候様被仰付度候事、

一御兵具方屋敷

右一郷二ヶ所計ニ被相究度候事、

但郷々中宿之モノハ別段之事ニ候間、是迄通被召

置度候、

一諸座士付屋敷

右同断、

一服制

右御定通ニテ未御法度之品持合候者ハ寅年(安政元年

)限先三ヶ年御用捨被仰付候ニ付、右年限等合候節

夫々支配頭へ相付、以来一切相用ヒ申間敷旨御受申

出、万一其以来御法ニ違ヒ候モノハ士以上ハ半地御

取揚ケ、右以下過銀相応ニ申付候御取扱被仰付候ハ

、御法令通行届候半ト奉存候事、

本文子年(嘉永五年)ヨリ三ヶ年ニ被仰付候、

一士以上鬢方

右二重鬢ニテ本結七卷以上可相用旨被仰付度候事、

本文鬢方之義尚又篤ト勘考之事(安永度ノ令ニ依ル

乎)、

一 士諸組与力

右同断、

但一身勤（足脛）ノモノハ右之場ニ可準事、

一一身以下諸家中

右二重鬢ニテ本結五卷以上屹ト不相成筋可然哉之事

但諸家中凡下職之モノハ其場ニ可準事、

一町・浦・寺門前并凡下体

右一重鬢ニテ本結三卷以上屹ト不相成筋可然哉之事

一百姓

右御規定之通一重一寸鬢ニテ本結三卷以上屹ト不相成候筋可然哉之事、

右士ハ夫々身分ニ応シ何欵目印有之、兼テ上下尊卑之差別涯立候様被仰付候ハ、面々身分ヲ守リ風俗

匡正之一筋ニモ可相成候哉ト奉存候、尤是迄鬢方等之義ハ小目ニ御座候得共、第一若年之者共身分之嗜

殊ニ上下尊卑之差別相成事候ニ付、以来右通被仰付、若シ身分ニ違ヒ候モノハ相応之御沙汰有之候様可被

仰付哉、尤是迄兩番頭（大番頭・御小姓組番頭ノ通唱）

士以上年若ノ者共容貌見分（諸士丁年内外ノ聲容貌其他

言行動作ヲ督責スルヲ云フ、是レ重蒙公カ天明ノ末頃ヨリ

初メラレタリト云フ）仕来候得共、旧法迄ニテ差テ詮立

候儀無御座候付、以来教導方ト名目被相替万事申シ

教候序ニ、相応不容貌之者ハ取直シ候様申達候ハ、

若年之者共氣受モ宜候半ト奉存候、

正月十六日

嘉永二年酉三月廿日江戸在勤中認ム

一御家格ニ相掛候義ハ、御供廻等其外諸御付キ合ヒ事等都テ御義理合ニ相掛候分ハ、江戸・御国許共乍御省略

中モ、可成以前之御規定ニ基キ御取扱被仰付度事、

一御家老老人、若年寄老人、

一番頭老人、御用人老人、

本文丑夏ヨリ其通被仰付候事、

但平御用人（伝達ノミヲ掌ルヲ云フ）之儀ハ定府ニテ

モ又ハ勤番ニテモ時宜次第、

右之通以来江戸詰被相重度、尤番頭勤前之儀ハ可成受

持ヨリ相勤、差支候節ハ番頭・御用人互ニ助合候様有之度候、左候テ何御役場ニ不限都テ一年詰被仰付度候事、

一 寄合並以上御家老ニテ候ヘトモ、以来一所持格以上御家老組、寄合並以上ハ若年寄組被仰付候ハ、如何可有之哉ト奉存候、

一 大番頭・御小姓与番頭之義、一所持格以上人柄有之節ハ成丈右ヨリ被仰付、寄合ヨリハ衆並最モ拔出テ候人柄御撰被仰付候ハ、双方励合人物モ出来候半ト奉存候、且御小姓与番頭ヨリ御用人兼務被仰付来候ヘ共、以来組頭一篇ニテ一向組下之取扱被仰付度候事、

但當番頭迄ハ是迄之通被仰付度候、且江戸詰之儀ハ是迄通被仰付可然哉ト奉存候、

一 寺社奉行・大番頭・御小姓与番頭・御勘定奉行當番頭ハ、以来小番・新番・御小姓与同諸士ニ御座候処、支配頭御役順御役暇三等程違候テハ、乍恐少シ不並款ト奉存候御役順被相替御賦（月俸ノ通唱）之儀モ御番頭同様可被仰付哉、

左候ハ諸士之氣請モ一涯宜候半ト奉存候、乍恐是迄被仰付置候者共御役格相下り候モ可有之候付、右ハ位階

昇進被仰付可然哉ト奉存候、

一 御目付之儀、以来御使番次席被仰付直触（全上）被入置候ハ、猶又御役威厳重御取締可相成哉之事、

一 一所持同格ヨリ初ニハ物頭（足輕頭）被仰付来候ヘ共、以来不被仰付筋御規定被相居度、左候ハ、格別成家格之詮モ相立可然哉ト奉存候事、

一 直触（全上）以上ハ家来・下人屹ト召列候様被仰付度候事、

一 一所持格以上家来一兩人之間召列候儀不同有之候付、以来屹ト兩人召列候様被仰付度、左候ハ、前文同様家格之涯モ相立可然哉ト奉存候事、

一 町奉行之義、是迄町人取次迄之様有之候ニ付、以来商売方ニ相掛候儀、其外諸取締向等専ラ引受尽評議候上、遂披露候様被仰付度候事、

但遂披露候上御趣法掛御用人ヘ吟味被仰付候儀、是迄之通有御座度奉存候、

一 右ヶ条之通被仰付義ニモ候ハ、相応之御出方ニモ相及候間、猶又質素節儉之御趣意一涯行届御所帶方丈夫

ニ相居リ候上ナラデハ御手ヲ難被付義モ可有之候付、

第一本ヲ固メ御趣法專要ト奉存候、

一 一所持同格諸奉行之事、

右外小目ハ品々可有御座候へ共、前文之ケ条先ツ肝

要成儀欵ト奉存候、尤御制度ノ根元ハ乍恐御上之御

誠意御言行ヲ其儘被押移候外有御座間敷奉存候、

一 以來寄合ヨリ大目付格以上御役被仰付候者ハ一代一所

持格被仰付、五代引統小番ヨリ大目付格以上御役相勤

候者ハ代々寄合被仰付御格式ニ候間、右ヨリ以上家格

昇進之御沙汰無之候ニ付、御家老御役相勤代々一所持

格被仰付候者ハ段々等級有之、面々勵可罷成哉ト奉存

候事、

一 寄合並ヨリ大目付以上御役相勤候者ハ、一代一所持被

仰付、子孫代々寄合被仰付度、五代引統御家老職相勤

候者ハ代々一所持格被仰付度候、

一 小番ヨリ大目付以上御役相勤候者ハ、一代一所持格ニ

テ、代々寄合被仰付度、七代引統御番頭（江戸邸在勤番

頭）以上御役相勤候者ハ、代々寄合被仰付度、七代引統

御用人以上御役相勤候者ハ、代々寄合並被仰付度候、

五代引統地頭職被仰付候者モ同断被仰付度候、

一 御小姓与之儀ハ是迄之御仕向通ニテ、人柄ニ寄り追々

御役昇進被仰付、代々小番被入置候上ハ前条之向ニ準

シ御取扱被仰付度候、

一 郷士之儀モ格別訳合有之モノハ、前条之向ニ準シ御取

扱被仰付度候、

右之通被仰付候ハ、面々相勵一涯心掛候半ト奉存

候、

一 着出立ニ付（送迎ノ通唱）贈答之儀、当日之怡迄兩種又

ハ肴一折差送候儀ハ勝手次第、右外一切不相成、若心

得違之者ハ不差置被及 御沙汰可然哉ト奉存候、

一 御一門方ハ青銅貳百疋ツ、

一大目付以上四家之大身分ハ青銅百疋宛、

一 一所持・同格・寄合・同並・大番頭以下直触迄青銅五

拾疋宛、

一 御作事奉行以下諸役人青銅貳拾疋宛、

一 諸士青銅拾疋ツ、

一郷士・諸組与力青銅拾疋ツ、  
一一身以下青銅五疋ツ、

右ハ着出立等之贈答兎角被仰出通被行兼候ニ付、以  
来猶又右之通御規定之上屹ト被仰渡可然哉ト奉存候

三月二十日

造士館教授ハ格別人才御撰、御役格御側役次席、尤最  
初ヨリ御側役ニテ教授勤ヲ被仰付、追々勤功ニ依リ御  
側御用人・御番頭迄ハ位階昇進被仰付、助教ヲ御記録  
奉行次席、訓導師ヲ是迄之助教之御役席被仰付、左候  
テ最初幼年之内ハ御国文等ヨリ教習シ、夫ヨリ神儒交  
教シ、且和漢之武学世界一統之事情ニ通達セシメ、諸  
文章・和歌等之技芸ニ至迄夫々ノ生質ニ応シ教へ、道  
徳言行兼備之モノハ夫々位ヲ揚ケ、一能一芸ノモノモ  
亦其職々ニ進メ、衆知一和スル様ニ教導被仰付、尤江  
戸御屋敷内ヘモ学館被召建、助教・訓導師官ヨリ一人  
ツ、詰被仰付、外方儒者ヘモ付会(交際ノ通語)専実意  
講究イタシ、勿論御屋敷内詰人数并ニ定府之モノ共モ

右助教ヘ相付致修行候様被仰付候ハ、追々人才モ出  
来候半ト奉存候、

一江戸学館之義モ隔日講義聴聞被仰付、番頭・御目付中  
ニハ勿論、御家老出席モ被仰付度候、

一江戸御屋敷武館モ格別ニ被召建、毎月御番頭見分御目  
付出席被仰付、中ニハ御家老見分被仰付度候事、

一御国・江戸演武館之義モ尚又実用ニ基キ士氣致興張候  
様御取扱仰付度候事、

一以前ヨリ郷中(一区ノ通唱)ト唱来候更(如ク)ニ尚又文武館被  
召建、一所持以下諸士之子孫慈童之内ヨリ出席、方限

(全上)造士館勤之者ヨリ教訓方被仰付、最初御国文等  
ヨリ教方イタシ、仮令造士館出席之者又欠失ス(ママ)

ニテモ右之透ヲ以致出席、左候テ以来造士官并ニ郷内  
文武習練之席ニ於テハ、寄合以上之子弟モ家格ヲ以テ

不相交、或ハ道徳或ハ芸能又ハ年長之者ヲ以テ席順ト  
イタシ候様被仰付度候、

一諸士之内困究ニテ造士館出席調兼候モノモ有之候付、  
是迄為御救諸座重書役助被召入候ヲ、此節ヨリ造士館

出席被仰付、書生共へ、右御振替稽古扶持被成下候へ、一涯相励、第一人才教育之御取扱、尤究士御救之筋モ相貫キ、旁御徳沢ヲ可奉蒙ト奉存候、

鎌田正純東上日記抄（大坂滞在中）

別啓、此節ハ都辺案内致見物誠ニ不容易仕合、成行左ニ申上候、

去月十二日小倉出帆、追手至極ノ順風ニテ同十七日川口へ入翌朝着坂、其夕、御城辺見物候処、承及候通り致感心候、乍然アラマシノ事故古跡委細分リ兼申候、夫ヨリ御留主居初一席へ集会、左候テ翌一日滞坂、翌廿日川登ニテ夕方伏見へ着、八田喜左衛門（知紀）・友野七郎左衛門・篠原伊右衛門ノ三士出迎、翌廿一日右三人案内ニテ、先ツ仙涌寺内先祖出雲守政近ノ墓來迎院位牌へ参詣、住持へモ暫ク対顔、至極ノ都合ニテ累代ノ宿願相逢シ安慮此事ニ候、扱夫ヨリ東福寺内通天橋致一覽候処、折柄紅葉ノ最中感吟余リアル計ニ候、夫ヨリ名所ノ見物何レモ感ニ絶、其夜一席へ集会段々

ノ人数ニテ下河原舞子ノ芸一覽、都ノ風音ハ別種面白候、其翌日ハ元來趣向之高尾へ参候処、是又紅葉ノ最中筆墨ニモ被尽カタキ形勢、尤上井杯同道ニ付始終御両所ノ噂サイタシ候、中々田舎歌杯ノ出来候丈ニ無之、魂ヲ飛シ乍然メクラ蛇ニ不恐ノ心持ニテ腰折一首

高尾山木々の紅葉の色ことに

ふるさと人のしのはれそする

夫ヨリ帰道桐ノ尾ト申山中ノ寺へ参り候処、是同様ノ楓、帰ルサモ忘ル、計ニ候、其翌日ハ篠原案内ニテ雨降ニ只兩人嵐山へ参り候処、是モ紅葉ノ最中且半染ハ桜ノ半咲欵トアヤシマレ例ノ腰折一首、

時ハ今嵐の山の秋なれと

紅葉も花の心地こそすれ

夫ヨリ名所ノ見物

御所辺迄相覗、暮時分旅宿へ相帰候処、普門院（税所）宮里新助見廻ニテ詠歌共被送候ニ付返シ

別るとも又相坂の関越て君と都の花に遊ハむ

立田姫染し紅葉の色々に都の秋ハ忘れさりけり

其翌日海老原氏(宗之丞)出立ニテ、蹴上ケト申所迄相  
送り、夫ヨリ宮里案内ニテ方々致見物其夜一席へ集会  
翌朝出立、追分ト申所迄送りノ人数モ段々有之、折柄  
時雨降り出シ、ヤカテ古ノ相坂ノ関ヲ越ルトテ離別ノ  
心ヲ

追分の泪や空に時雨るらん

又相坂の関ハありとも

夫ヨリ二里計大津ノ宿迄テ友野・宮里兩人被相送、此  
所近江ノ湖水一面ニ相見得候座敷ニテ一興有之、左候  
テ兩人ニモ相離レ猶更都ノ風景忘レカタク兎角イタシ  
草津ノ駅迄着致シ止宿候、尤都見物ハ宿札供廻等伏見  
へ残置主従兩三人ノ手廻ニテ伏見ノ夢ニ御座候、其段  
ハ御賢察有之度、依テ一首

かく計つらねてみれハ秋のよの

ふしみの里の夢にそありける

夫ヨリ東海道宇津ノ山越ニテツタ紅葉最中ナレハ、又

都ノ事思出テ

そめのこすうつの山辺のつた紅葉

あかぬ都のあとしのへとや

又初テ富士ヲ見テ

見初つるふしの高根の白雪に

ふりしむかしのしのはれそする

又浮島カ原ヨリ富士ヲ見テ

名に高きふしの高根の雲はれて

心もそらにうき島カ原

又大井川ニテ

又も来ん東の旅に大井川

瀬々の白浪立な忘れそ

扱滞京中委細ノ儀ハ宮里ヨリ可申遣トノ事故、着涯色  
々取込大略申上候、乱文悪筆御推覧可被下候、当表御  
屋敷中無事、去ル廿三日

御二男様(齋彬公御二男)御出生誠ニ恐悦御同意ニ候、

余ハ期後音申越候、

十一月廿九日

圖書(出雲旧名)

森川様孫太夫

堀 様四郎左衛門

二白、中急キ（定日飛脚略唱）十二月二日被召延日付  
相違御推覧可被成候、

十二月并正月尊筆相届忝拝誦仕候、弥御安全被成御勤  
務大慶奉存候、次ニ野拙無異相勤罷在候間、乍慮外御  
安意可被下候、爰許無事静謐ニ御座候、

御流儀大砲（和蘭式）初六日ニテ四ツ後ヨリ近江殿（末  
川）御下リ御一門方御三役御軍神へ拝礼有之、惣人数  
千三百人位、内四百人余諸士以下其外諸郷諸家中ニテ  
御座候、五十三、八、式日ニハ百四五十人位ツ、出席人数  
ニ御座候、

一調所（笑左衛門廣郷）家案外之仕合、末々三・五年ハ弛  
被相勤候様相考候処誠ニ笑止千万、殊ニ残多次第御座  
候（江戸在勤中病死ス）、

一 小根占ヨリ枅取（石高取納斗升ヲ掌ル通唱）之願出御取上  
無御座相下リ候ニ付、内々承合候処、郷士之勤向ニテ  
モ無之、殊ニ御城下窮士御救筋等之事モ未無之候ニ付  
テハ、御拝借銀迎モ当分ニテハ御吟味不相付ト承合候

得共、何レ之筋御心付向等之事無御座候テハ、存之通  
御軍役筋兼申程之事御座候間、何ゾ見合申出候ハ、御  
軍役方へハ拙者ヨリ内意可申出旨清兵衛（永山）へ得ト  
相達置申候、其外所ヨリ伺又ハ達シ事等之儀承候節々、  
貴公へモ申上候様清兵衛へ相達置申候間、御承知候ハ  
ント奉存候、

一 当月四日ヨリ兩根占（大・小根占郷）佐多迄龍衛殿（川上  
）拙者同道ニテ御手当向見分等へ差越筈ニテ、往来十  
二・三日之賦御座候、小根占ニモ武芸迄モ致見分候様  
近江（全上）殿御聞置御座候、砲術方ヨリ彦十郎（成田  
洋式砲術師範）外ニ四人差引人被仰付此節差越筈御座候  
右三ヶ所持主木場次右衛門・有川彦兵衛・松山陸阿彌  
被差遣候旨被仰付、我々共同日ヨリ差越賦御座候、新  
八郎（永田、軍賦役）ニモ先日ヨリ差越申候、外ニ申上  
度儀モ御座候得共、却テ御惑〔迷脱カ〕ト相ナル事モ御座候半ト  
申残候、猶後情奉期後音候、恐惶謹言、

二月朔日 川上式部久

鎌田圖書様



人々

尚々、日増春冷相成候得共、時候無御痛様折角御厭被成度呉々モ奉存候、扱演武館武芸見分、我々共御軍役方取会ニテ致見分候様相成、御家老見分同様之業合御座候、師家(各師範ノ通唱)宅へモ差越申候、去月廿五日深見休八(影ノ流)宅へ御軍役奉行其外我々共龍(川上)・織(頼娃織部)・隼(島津隼人)拙迄四人出席、百二十人位之門弟御座候、今日五ツ時ヨリ近江殿(全上)宅ニテ隈元伊之助流儀(影ノ流)見分有之、我々共四人出席ニテ御軍方ヨリ何レモ出席、余計之事ナカラ得貴意候、且田中源五(源五左衛門)衆へ御取会之折御都合モ候ハ、宜御伝達被下度、打絶書状等モ不申遣失礼之至、乍慮外宜御頼申上候、

ツ、惣人数三組ニ分リ百五十人ハカリツ、鋏銃并迦農玉打稽古式日御座候テ掛役々差越調練御座候、折角  
上様被遊御引進度  
御趣意ニ奉伺候得共、二才共何レ汲受薄ク外武芸ニモ同様之向ニテ土カ土風盛ンニ成立 御国威致興起候様有御座候得共、何分輕薄之世上、中々ノシ不申事ノミ御座候、殊ニ初発ヨリノヒ段々ト枝葉迄モ相朽リ、当分何事モ静謐無事ニ被察申候、其外申上度事如海山御座候得共下手ナ愚筆差扣申候、余ハ期後音候、恐々謹言、

五月五日

式部全上

圖書様

人々

猶々、時分柄無御痛様折角御自愛專要ニ奉存候、

霖雨之刷御座候得共、弥御安全被成御勤仕奉大悦候、次ニ野拙無異罷在候間、乍慮外御安意可被下候、扱愛許相替儀無御座、砲術調練出精人数等以前之通百二十三人位出席ニ御座候、谷山中鹽屋射場ニテ一ヶ月三度

正月廿九日之御尊書難有奉拜見候、春暖相催益御機嫌克被遊御勤務珍重之御儀奉存候、随テ私事漸々快氣ニ

向キ、去廿七下士踊相勤申候間、乍憚御意易被思召  
上可被下候、上ハ千四百人余、下ハ三千人余ト承申候  
兩日共ニ別テ之宜キ御都合ニテ、諸人ハ勿論組頭之御  
衆御安心奉察候、将又子日之御詠称ニ

前句没失スこもる千代ハ二葉に頭れにけり

ト乍恐別テ面白奉感吟候、先時候御機嫌伺且御礼為可  
奉得尊意如此御座候、恐惶謹言、

三月三日  
毛利理右衛門  
正位〔花押影〕

鎌 圖書様  
御近習役中様

猶々、御屋鋪皆々様被為揃御機嫌克被遊御座候、  
当分御沙汰ニテ植痘瘡貴賤老幼大流行ニテ御座候、

〔表紙〕

# 齊興公史料

市來四郎編

嘉永二年 (三)

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数四十三枚）」の記載あり〕

## 目録

伊達宗紀公水戸老公江親書（別紙送ス）

安田助右衛門日記鈔

海岸防禦其他砲術専用ノ御手当

唐船漂着取扱令

白帆之異国船渡来且隣領異変之節取計之次第諸郷江布達

全上

末川近江へ軍役掛ラ命ス

軍制改革布告

軍役方設立布告

軍師引取

武器取扱

新規役名

宗門唐船取扱

異国船掛引取

御軍役方召直

国境警備布達

齊興公御参府御猶子中山王へ報告

参考 樺山資之日記鈔

旧貨幣交換令

近衛家御用部屋日記鈔

二年酉三月十八日將軍小金原ニヲイテ御狩ノ六歌仙

六六三 伊達宗紀公水戸老公江親書（別紙送ス）

以別紙奉言上候、毎度松修理太夫へ尊書被成下候処、

御請モ及遅々、段々御不審思召候趣委細ニ被仰出奉畏

候、其後見聞仕猶可奉申上旨申上置候処、段々承り續候処速ニ御受モ不奉申上処ハ甚以恐入失敬之至奉存候其子細ハ修理義モ海防之義常々心痛仕、且琉国一条ニオイテモ甚心痛、防禦筋此上敵ニ仕度内合ニ候得共、一家ノ内ニテ小内異同有之、一和不仕（山田・近藤等ノ内証ヲ云）、存意モ当時難申張、外ニ文通等モ甚心痛仕兎角文通ニテモ仕候得ハ嫌疑ノ処ヲ恐レ、夫故ニ乍存甚失敬之至、恐入候得共御請モ及延引候趣ニ御座候、全目

幕府内ニ御沙汰等ノ事トハ内密不奉存候薩州モ、右様内輪不揃柏子違居候テハ、琉国モ此後愈六ヶ布モノニ御座候、兼テ御内々蒙 尊問候事故、此段内密奉言上候、

一松前此節ノ義ハ自愚息奉入 尊聰御承知モ被遊候半、扱々不安様次第ニ相成歎息之至奉存候、爰ニ驚入候ハ同人家僕山田三郎ト申スモノハ至テ質直ナル者ニテ、主人不身持諫争モ致候モノニ御座候処、近来出府申付此節暇差遣候由ニ御座候、驚入候、如何ノ訳ニ候哉愚

考仕候テハ主人弥増随意不身持増長致、倭奸之モノ所為ニハ有之間布哉、左様ノ事ニ候得ハ愈松前ノ危急ニ可致可歎事ニ御座候、先ハ内密申上候、扱々不安心ノ事共無限出来、何分此後見通シ付兼申候、恐惶謹言、  
六月八日

宗紀

六六四 安田助右衛門日記鈔

嘉永二年己酉

安田助左衛門

〔張紙朱筆〕「二月七日安田等阿久根へ出張」(安田日記ニリシる)  
右阿久根表へ御軍役方御用ノ儀有之被差越候条、可承向へモ可申渡候、

二月

近江

右之通り承知二月七日出立、阿久根ニテ海老原氏へ面会、御手当向ノ儀共申承り十二日帰府、

安田助左衛門

御軍役方  
御家老座書役  
上野彦助

右ハ長崎表へ異国船致渡来候付キ、今日急キニテ被差越候条在勤御付人申談、彼地ノ様子時々可申越候、此旨可申渡候、

但

御兵具方足輕式人被召付候、

三月晦日

東馬川上  
久封

右之通り承知同日七ツ過御座退出、暮過出宅、翌廿二日長崎へ致着候、右ハ北亞米利加合衆国ノ者共漂民請取方トシテ致渡来候、船ノ長サ式拾式間、砲門一方ニ十ツ、開、人数百四拾老人乗ニテ、高焼ト高鋒トノ間ニ相繋リ候、此方ニハ諸家ノ陣場々々固ノ人数出張幕張ニテ、兵船モ船幕ヲ打、旗馬印押立軍粧立派ニテ候、漂民取扱ノ次第其外色々苦情申上候へ共、四月五日致出帆候、

六六五 海岸防禦其外砲術専用ノ御手当

五月 日布達

御軍役御手当掛

成田正右衛門正

〔張紙〕「誤なるべし、安田日記以下は二年也、笑左衛門は元年十二月十八日歿、故に元年五月なるべし」

右ハ今般以  
思召海岸防禦其外都テ

御流儀砲術(和蘭新式一唱高島流)専用之御手当被仰付候付、

右之通掛被仰付候条、御領内一統御入門ノ者共江致指南、往々屹ト御用立候様可致教導候、左候テ大砲鑄製被仰付候ニ付ハ別テ不容易事候付、時々鑄製方江出勤掛ノ面々遂吟味方端行届候様可致心添旨被仰付候条、可申渡候、

五月

笑左衛門

六六六 唐船漂着取扱令

五月 日布達

一 唐船漂着又ハ何ソ付唐船方江相掛候御用向ハ、奥掛書役（藩庁筆吏ノ頭）并御家老座書役之内御役被付置候面々、唐船改之場江相勤候様被仰付候、

一 諸郷等ヨリ是迄唐船改江向ケ申越候唐船方御用向、是迄之通唐船改御役名ヲ以申越、御家老座江差出候様被仰付候、

一 異国船一件之御用向ハ何篇御軍役奉行并御軍賦役江向ケ可申越候、

右之通被仰付候条可申渡候、

五月

笑左衛門

六六七 白帆ノ異国船渡来且隣領異変之節取計之

次第諸郷へ布達

五月 日布達

白帆之異国船（當時外国船ヲ白帆船又ハ単ニ黒船トモ通唱ス

）洋中ニ相見得候ハ、早速 御城下江可致注進候、其所江渡来候ハ郷士年寄・組頭私領ハ役人・組頭之間両

三人差越、何方之船ニテ渡来之訳又ハ乗組之人數食物薪水有無等致尋問、扠底之品望出候ハ、相応ニ相与へ置、形行早々御軍役奉行・御軍賦役江届可申越候、左候テ郷士家中惣人數之儀ハ出陣之及用意在宿イタン居差図可相待候、

一 異国船ヨリ海岸様子ヲウカ、ヒ、其場所人氣ヲ試候タメ杯ニ鉄砲ヲ打掛候類有之候共、聊以致動揺間敷候、一 異国船人為致上陸間敷段ハ

公義ヨリ被仰渡置候条其通可相心得候、乍然分テ無拋筋合有之押テ上陸差留候テハ事ニ可及様子ニ候ハ、程能可取計ハ勿論、事ヲ敗候時宜ハ至テ不容易儀故、魚忽之取計有之間敷、且又異国人之儀致敵対候証拠ニハ白旗ヲ建候習ハシ之由候付、白地之旗并木綿類白旗ニ紛敷品不致取扱候様堅可相心得候、勿論御城下御役々々下知ヲ請候上可取計事候得共、若哉其内乱妨之始末（手ニ難及儀致到来候ハ、聊未練之振舞有之間敷候、

一 御領内諸郷之儀ハ

御城下之藩屏ニテ、就中境目郷之儀ハ鎮衛第一ノ事候

条、万一近国へ異国船渡来又ハ異変到来之聞得モ候ハ、則刻其段御軍役奉行・御軍役江届可申越候、左候テ騒動之様子能々聞合追々可致注進、時宜次第早速御人数被差出候儀モ可有之候条、惣人数之儀ハ出陣之用意ニテ致在宿差図可相待候、  
右ハ此節

思召之訳被為在、異国船掛御役場御引取ニテ御軍役方被召建御軍備敵密被相定候付、海岸防禦御手当等之儀追テ委細可被仰渡候得共、夫迄之内右之通相心得、御城下江注進旁聊無手抜可取計候、若違背之族ハ屹ト可被御沙汰候条、一統被仰渡之趣堅可相守候、此旨諸郷江申渡向々江モ可致通達候、

五月

近 江

笑左衛門

六六八 全上

白帆之異国船洋中ニ相見得候ハ

御城下江注進等彼是差当肝要之儀ハ、先達テ委細ケ条書ヲ以申渡置候趣聊無相違堅固ニ可相守候、一異国船何方江可致渡来モ難計候得共、山川・指宿・佐多・根占ハ、

御城下通船之海岸防禦之御手当肝要之場所柄ニ候故、  
仮令山川・指宿之海岸江渡来候ハ、右両郷ヲ初加世田川邊・川邊郡山田・阿多・田布施・伊作・穎娃・久志秋目・坊泊・知覽・喜入・鹿籠・谷山之人数、佐多・根占之海岸江渡来候ハ、右両郷ヲ初始良・大始良・鹿屋・田代・高隈・末吉・百引・都城之人数

御城下人数江被召加為防禦可差向被候条、

御城下ヨリ差図次第被定置人数無遅滞郷士年寄・組頭ノ間、私領ハ役人・番頭ノ間ヨリ銘々人数相纏一同出立、異国船渡来之場所最寄船中ヨリ不相見場所江相屯頭立候者ヨリ出役之御軍賦役江相付、着到之人数名書可差出候、左候テ諸郷・私領・御備組隊將之儀ハ物主ト名付ケ

御城下ヨリ被差越御軍賦ニ候間、何篇物主ノ下知ニ隨

ヒ聊無相違可相勤儀肝要ニ候、万一心得違物主之下知相背ニオヒテハ屹ト御取扱可被仰付候、且又右外山手之諸郷ハ東西ノ分チヲ以佐多・山川江為援兵可被差向候条、万事右之振合可相心得候、

一異国船長崎江致来、万一從

公辺御加勢人数可被差出トノ御奉書御到来候ハ、早速御城下人数江出水・野田・高尾野・阿久根・高城郡高城・隈之城人数被相加長崎江可被差越候条、

御城下ヨリ差凶次第被定置候人数無遅滞、郷士年寄・組頭之間銘々人数相纏一同出立便利之場所江集居、出役之御軍賦役江相付到着之人数名書可差出候、左候テ何篇

御城下物主可加下知之間、前条同断相心得聊致違背間敷候、且又前文諸郷ノ外ニモ追々交代又ハ為援兵諸郷一統之内ヨリ見合ヲ以可被差越候条、兼テ其旨相心得可致用意候、

一惣勢召列候從卒之儀ハ、知行高百石ニ付主從三人ノ出役、百石以上之者モ其割ヲ以出役被仰付、式百五拾石

ヨリハ乘馬一疋可差出御軍賦ニ候条、謹テ奉得其旨人馬・鉄砲・半着等之用意分限ニ応シ無手抜可致用意候尤五拾石以下從卒一人前ニ不引足少高之者ハ当人一人之出役ニ候、右外跡職不相究候欵家督幼少之者等右少高以下之儀ハ、皆同寄セ高被仰付、退陣後応高頭出銀可被仰付候、

一御備組之次第一郷ノ人数一組ニ御組立相成候条、諸郷私領共兼テ存其旨一同令和熟互ニ頼母敷風俗ニ有之、御奉公方可抽忠勤候、且又年若之者共行跡ナマヌルク無之様心掛、弓・鉄砲・劍術・鎗・長刀・馬術等戰場ノ実用ニ引向ケ稽古方可出精、殊更此節御備与一統惣鉄砲被仰付候付テハ、鉄砲・劍術一涯可鍛練儀肝要ノ事ニ候、

右之通被仰付候条、諸郷・私領共御軍役方掛役々兼テ存其旨何レモ差ハマリ無油断可致差引、且又万端難心得儀ハ不差置御軍賦役江相付承得候様可致旨、近江殿・笑左衛門殿依御差図申渡候事、

右御着屋於客屋諸郷御軍役方掛役々招呼、御軍役奉行。



御軍賦役列席ニテ申渡、尤為写取置、私領モ同断、支  
度用具書付之儀モ為書取候事、

五月

御軍役奉行

六六九 末川近江へ軍役掛ヲ命ス

五月十九日布達

御軍役掛

末川近江殿平久

右之通掛被仰付候条、是迄異国船掛ノ場ニ相心得発起  
ノ事候付、何偏調所笑左衛門殿申談致取扱候様被仰付  
候、此旨向々へ可致通達候、

五月

壹岐島津久武

六七〇 軍制改革布告

五月 日布達

異国方御手当之儀ハ旧冬十月被仰出置候通段々不連続

ノ廉有之、殊ニ公義御触達之通西洋諸国専大砲相用戰  
争ノ向相変候付、厚被遊御配慮

御先代様御作法ヲ基本ニ被相建、猶又和漢ノ良法御斟

酌ノ上専大砲等被相加、此節御軍賦被相建候付、異国

方御引取ニテ御軍役方被召建候、右ニ付テハ御作法ノ

御軍令ヲ以テ夫々賞罰明白被遊

御沙汰候、右ニ付一涯忠勤相励心掛宜者ハ屹ト品能可

被仰付、

御趣意ニ戻リ御軍令違犯ノ輩於有之ハ可被処敵令、此

旨可被申渡旨被仰出候、

右之通被 仰出誠以難有次第ニ候、右ニ付テハ先般

砲術御流儀モ被召建追々被遊

御差凶海岸防禦等致全備候様ニト之厚

御趣意ノ御事候条、右等之趣モ人々難有謹テ奉承知

一涯相励、砲術其他可致精勤候、此旨向々へモ不洩

様可通達候、

五月

笑左衛門

六七一 軍役方設立布告

五月 日布達

先般厚

思食ノ訳被為在、御軍役方被 召建、其節被

仰出置候通

御先代様御作法ヲ基本ニ相立取調被仰付、猶又御下知被為

在御備立等追々被相定候付、此節異船掛御役場并三十騎備其外御備惣テ御引取ニテ、御軍役向并海岸防禦御手当等之儀都テ御軍役方取扱被 仰付候条、此旨向々へ可通達候、

五月

笑左衛門

六七二 軍師引取

五月 日布達

御軍師

右ハ思召之訳被為 在、右御役場此節御引取被 仰付候条、此旨向々へ可致通達候、

五月

笑左衛門

六七三 武器取扱

五月 日布達

御兵具方武器(御兵具藏ト通唱ス)其外是迄異国船掛ニテ致取扱候分ハ、御軍役掛御家老取扱被仰付候条、此旨向々へ可致通達候、

五月

笑左衛門

六七四 新規役名

五月 日布達

一 御軍役奉行

一 御役順御留守居次席

一 拾四人賄料

一 奥支配

笑左衛門

一 御軍賦役

一 御目付兼役

六七六 異国船掛引取

一 御役順御目付次第

五月 日布達

一 六人賄料

異国船掛

一 奥支配

右ハ

右之通御役名新規被相建候条、向々へ可致通達候、

思召ノ訳被為 在、右御役場此節御引取被仰付候条、

五月

此旨向々へ可致通達候、

笑左衛門

五月

笑左衛門

六七五 宗門唐船取扱

五月 日布達

六七七 御軍役方召直

一 宗門方掛 幾利支舟宗及ヒ一向宗ノ  
二宗退禁ノコトラ掌レリ

五月 日布達

一 唐船掛

御軍役方

右ハ是迄異国船掛ニテ致取扱来候へ共、御引取ニ付以  
来御家老座ニテ致取扱候様被仰付候条、此旨向々へ可  
致通達候、

右ハ先達テ驚ノ間次ノ間へ被召建候へ共、異国船掛

跡へ被召直候、左候テ御軍役奉行御軍賦役ハ是迄ノ

唐船役改ノ振合、書役ノ儀ハ異国船掛書役之振合通

五月

相心得候様被仰付候条、可承向々へ可申渡候、

五月

笑左衛門

六七八 国境警備布達

〔貼紙〕「嘉永元年申十月」  
十月 日布達

覚

- 一 出水之儀他領境(熊本領水俣ニ接続ス)ニ付被入御念儀、前々ハ地頭ヲモ被移置候得共、当分ハ地頭代被差置事候間、地頭へ得差凶万端入念可相勤事、
- 一切支丹宗門并一向宗之儀御制禁ニ付テハ、他領境目ニ候得ハ猶以入念候様兼々可申付事、
- 一 境目改善所之儀堅固ニ相勤候様時々可申渡候、就中欠落者改之儀能々入念候様可申付事、
- 一 他領人何之用事共不相見得、節々於令往還ハ横目ヨリ承届、於徒者ハ早速為致帰国重テ不入来様可申付候、尤及口能儀ハ地頭方へ可得差凶事、
- 一 他国へ為相替儀、又々江戸上方表之風説御心得可相成儀ハ地頭方へ可有注進事、

一 御用ニ付他領人ト出合候節、又ハ物主ヨリ他領引合等之儀能々入念可有差引事、

一 郷士下々ニヨラス御用之外他国人へ入魂イタシ候者於有之ハ、氣ヲ付怪數儀モ候ハ、其者不致他出様申付置、地頭方へ可申越候事、

一 郷士之風俗無作法無之様可有差引候、若者トモ学文武芸之心掛無油断様兼々可申聞事、

一 喧嘩口論又ハ結徒党所中及騒動儀共於有之ハ、郷士年寄并組頭申合早速相鎮候儀可為專要事、

一 出水表之儀郷士在村共近年令困究之由相聞得候、郷士之儀ハ兼テ申渡候趣堅固相守、平日令省略武道具相応調置候様兼々可申聞之、在村之儀、所々夫任其外諸事ニ付百姓不疲様可致差引旨、役人中へ時々可申聞之事、

右条々堅固相守之、聊緩疎有間敷者也、

申十月 日

末川近江  
島津將曹

島津石見

島津壹岐

六八〇 参考 樺山資之日記鈔

嘉永二年酉

二月

十日

六七九 齊興公御参府御猶子中山王へ報告

御札致披見候、

太守様当年 御参勤御定例之通被遊

御窺管候得共、其元へ異国人致滞留居不容易御時節柄

且御領内海岸防禦御手当等モ

御巡見之上御手厚被遊 御指揮候付、当秋迄

御参府御延引御願之通被仰渡候、為御祝儀

少將様へ目錄之進上之段到江府遂披露、恐惶謹言、

十二月

末川近江久平

島津將曹徳久

島津石見浮久

島津壹岐武久

浦添王子

十日

十日

大牧(田カ) (甲上村ニ在リ)へ同席中出張、鉦・大鼓持行歌拍

子イタシ、暮過ニ帰候事、

十五日、晴

傍輩ノ者今日出立江戸へ登リ候間、水上御茶屋ノ場迄

何レモ送リニ差越候事、

三月

七日、晴

一鶴木氏(孫兵衛) 被参候間、未明ニ打立高見馬場ニ待合

セ、谷山へ木刀伐リ(擊劍術ニ用ル者)ニ差越候処、中途

迄迎ニイツレモ来リ、中途ニテ遊ヒ候事、

四月

十日

六ツ前黒田嘉右衛門(清綱旧名) 殿所へ集リ、多人數國

分八幡宮へ参詣、吉野ニテ夜明ケ四ツ過ニ行着致参詣、

婦リニ加治木へ休ミ重富へ来候処各迎ニ来リ居、吉野ノ様帰候処若衆被参居候テ暫時遊ヒ候、半首ニテ手カ  
ロク候、五ツ時分ニ帰宅候事、

十六日、晴

同席中大牧へ出張ノ企ニテ榊山正圓(大山綱良旧名)殿

へ寄り同道イタシ、多人数ニテ土歌或ハ天吹、面々ノ

奥ニテ暮ニ帰宅候事、

二十一日、晴

兄上ノ嫡男準熊昇立初ニテ、折田氏・堀氏被参祝イタ

シ候事、

閏四月

十四日、晴

大牧へ郡山水庵ト申兵学ノ人ノ嘶聞ニ参ル、両三人ニ

テ山端ニ月サシ出面白シ、

八月

七日

先日士踊ノ儀被 仰渡稽古有之候処、組頭衆顯娃氏ニ  
テ被聞候ニ付、高見馬場方人数差越歌拍子有之候由、

日入前済候テ婦リ候事、黒田氏へ立寄り、歌ノ座元ニ  
テ候、四ツ過婦リ候、方限ニテ何方モ拍子有之賑々敷  
候事、

今日琉人へ御膳被下ニテ早出勤、御賄ニテ八ツ過婦ル、  
夕方ヨリ歌座元へ出候事、

八ツ後ヨリ高島氏同道、上方へ拍子聞ニ差越日入時分  
婦候、先比キヤク相頼ヒ候処、未寸効ノ無之候へトモ

今晚ハ歌座へ出候事、

十三日、晴

黒田嘉右衛門殿・鶴木孫兵衛殿同道左近允氏へ差越、

指南役故踊ノ足踏イタシ帰候事、

先日兄孫太郎ノ嫡子助熊出生、今日弓射イタシ堀氏・

鮫島氏被参、外ニ客人祝有之候事、

十五日

高見馬場方へ縄引ニ出候テ、黒田嘉右衛門<sup>(門脱)</sup>・鶴木孫兵  
衛殿稻田氏へ拍子吟味ニ差越婦候処、父上七月二十一

日御遷化ノ事申来ル、驚入悲歎ノ事ニ候、翌十六日段  
々人モ被参、 父上ニ別レ奉リシハオノレ稚キ比ニテ

ソノ面影モオホヘス、都ニテ身マカリ給ヒヌルソノ哀  
レニコモリテ、

十六日

逢ふ事の又あるものと思ひしに

露にきへにし君そ恋しき

はかれしやおほつかなくもそれとたに

しらぬ面影うかひけるかな

行ひて見ぬ都なれとも無き君か

ませし跡しは忍はれにけり

九月

六日

今日ヨリ忌御免ニテ出勤イタシ候事、

十四日

關ヶ原記ヲ見テヨメル、

けふといへはいと昔のしのはれて

時雨に袖をぬらしけるかな

父上ノ御石塔上山寺(城西新正院ニ在リ)へ建方イタシ、

碑名ハ稻津正助殿、碑文ハ關勇助(廣國)殿へ頼候、相

濟ミ候テ帰候事、九月十五日ニテ候事、

父上ノ御法事ニ付寺へ参詣、四ツ時分ニ帰候、七ツ過

ヨリ人々モ被参、稻津正助殿・關勇助殿・税所源左衛

門殿被参候テ、詩歌ノ追碑杯被書候テ御靈前ニ相備、

何レモ四ツ時分ニ被帰候事、

二十四日、晴

(御関狩吉野ニテ強行)

明日於吉野御関狩、今晚ヨリ吉野へ人数相集リ賑々敷、

我等モ二番組ニテ立前ニ候へ共忌中ニテ不立候、種子

島家門前ニテ星合ヒ夜中ニ吉野ノ様出張有之候事、

中將(齊宣公)様御代ニ御関狩士踊有之、其後初テ此節

被仰付候、

十月

七日、大晴

今日ヨリ天保山ニテ指南役出張、拍子足踏繰込有之、

上ハ稻荷社脇ニテ同断、下方指南役左近允右内殿・川

俣作右衛門殿・川上樂水殿、初ハ諸方歌ノ派相立六ヶ

敷、暫打絶候事故覚候老人少ク、昔ハ此通リト吟味決

シ兼愚ナル事ニテ候、拍子歌ニ派ノ立ハオカシ、上方

五代庄助・田中治右衛門殿ニテ、能ク初ヨリ定リ候、十六日、晴

七ツ後ヨリ上方ノ繰込見物ニ兩三人差越、夜入前帰候事、

### 六八一 旧貨幣交換令

嘉永二酉年十月十九日（吹塵錄）

旧幣引替所来戌十月迄又延ル、

同十二月二十五日

錢相場六貫五百文ノ定相場止ミ、日々ノ相場町奉行所へ書上へキ旨触ラル、且兩替ノ外錢売買不相成、釣錢ニ出スコト是迄ノ通差支ナキ様スヘシ、打錢ノコトモ以前ノ通ト令セラル、

同年

罷每兩六貫五百文定価、先是登見山之歲定之、至此而止

国初所用錢有永樂、有鏹、有慶長、而有樂即明泉也、〔永カ〕

鏹唐宋小錢、而雜以私鑄輕薄無文錢者也、慶長即其十一年所鑄也、其直每金一兩永樂一貫、鏹四貫、慶

長錢不詳其直、意雜鏹而行乎、寛永十三年始鑄小錢、文曰寛永通寶、其重老匁、同開元・永樂、其工精美、寬文中又鑄之、文猶仍寛永旧、背有一文字、其形式精美、同寛永始鑄者、是時毀京師銅仏以為鑄錢料、故俗謂大仏錢、是時一十六年間造一百九十七萬貫、工費不償而止、寶永五年始造当十錢、文曰寶永通寶、重二匁五分、以其量輕不当十錢不行於世、明年遂止之、自此後享保・元文之際、累鑄寛永錢、其量漸輕、其他所在就坑治等処鑄者有數品、皆文用寛永、背織〔織カ〕各地名一字、今所見如佐・長・足等是也、率輕薄粗造、甚有二錢不滿一匁者、其中最多、而詳者為佐鑄、是佐州府所鑄、自正徳三年至寛保元年歲及鑄一萬貫、其間自元文五年雜鉄錢、至明和八年再鑄銅錢、其重七分、天明元年停局、都計為錢五万八千貫有奇、自此佐州永無復錢之事、明和四・五年以來官始鑄鉄錢、此時錢未甚賤、每兩四貫二百五・六十、至鉄錢多出、頓賤至六貫余錢、五年創当四錢、重一匁三分、歲々造數萬貫、錢日賤、下民重困、官利又從減天明八年



遂止鑄錢、文政四年再鑄當四錢、天保六年始造當百錢、重五匁七分、是時兼造鉄小錢、當百錢、歲々所鑄頗多、然而不為之輕者、其名錢而其用与金無異、待子錢而行也、錢之直其始每兩四千、元祿・正徳・元文改幣之際一時低昂不定、必鑄錢以權其輕重、漸復旧古、不甚出每兩四貫額、明和以還、鉄錢行而其品下、當四行而其量輕、且海内之錢大增其數、二朱・一朱ノ幣行而錢之用止千數百、錢日輕、至每兩六貫六・七百文、其始細民非不苦、然久之備直・脚賃亦漸貴、賤之錢為常、人亦不患之、往日天保登日光之時、慮錢餽昂貴、立定額為每兩六貫五百文、久之錢質忠其兌利少、籠絡蔽塞、世之錢乏如不足用、嘉永二年止、定餽一時騰貴至六貫以內、後復漸降、安政二・三年之際每兩直六貫六百余、錢之降今古未有之也、

六八二 近衛家御用部屋日記鈔

嘉永二己酉歲

正月

十三日

一薩州留守居ヨリ以書狀、年頭使者相勸候儀、来十五日

ヨリ十七日迄御差支無之哉問合ナリ、来十五日巳刻參

殿候様及返答、

十七日丙戌、天晴春寒

一薩摩宰相殿使者・留守居年首御祝儀被申上、進上物等有之、如例年於大書院御对面、御口祝被下之、御直答了

於南掾側御方御所ヨリ宰相殿始へ之御返答長義申述、

但今日御方御所御対顔、依御幼少無御直答、於南掾

側從兩御所之御返答申述、

二十二日、時々細雨、午刻計快晴

一薩州留守居ヨリ以書狀、御入内ニ付国元ヨリ為使者小

相薦為差登候ニ付、明廿三日時候御見舞之使者相勸度

御差支無之哉問合ナリ、御差支無之午刻後參殿之旨及

返答、

二十三日、雪時々飛

一薩摩宰相殿登使者小松相馬・付添留守居、御入内ニ付

御差支無之哉問合ナリ、御差支無之午刻後參殿之旨及返答、

使者被差登候ニ付時候御見舞使者相勤參殿、於新使者之間、下茶煙草盆出之、取次方出會御狀承之了吸物・酒被下、後日御返答之旨申述、

二月

二十一日、晴

一薩州登使者小松相馬御返答被仰出候ニ付參殿、留守居同伴、新使者上間被通、於大書院御対面御口祝被下、留守居御対面計、相馬自分献上太刀披露、御目見畢於南掾兩御所様御返答重哀申述、復座之上御方々様御返答、取次方申述、料理吸物中酒前後茶菓等被下之、挨拶御納戸方・取次方相濟、退出後以奉書被下物有之、兩御所様江太刀・馬并国産献上ナリ、

二十二日、晴

一薩州小松相馬近々発足御暇且昨日拜領物之御礼參殿、依願御庭拜見被仰付、青伝令誘引、

三月

二十七日乙未、晴

一入夜塔之壇毘沙門町戸屋軒火

右ニ付為伺御機嫌省中女御等へ御參御成、從御方御所依御不例同断以御使被仰上、長雄議奏東坊城中納言殿承知、

一御近火ニ付堂上堂下伺御安否御機嫌不違毛奉、

一薩州・津輕御近火ニ付人夫召連來伺

御機嫌、於使者之間支度被下候、

四月

二十二日庚申、天晴

一石藥師通梨テ角濱六之裏出火、漸々之鎮火也、禁中并

女御御殿江御使ヲ以御機嫌御伺被仰上、釧光勤之、

一薩州屋敷ヨリ留守居役人夫召連參上、

一出火ニ付所々ヨリ御見舞來、

二十四日、今朝雨止晴、壬戌

一若御所様御痘瘡御機嫌御立被遊、今日

御酒湯被為曳也、恐悅々々、

一右ニ付佐井父子・西山泰純・多田俗補・本庄左馬等被

召、於御次赤飯吸物料理等被下、

一殿中一統服紗・麻上下着用、局・御裏様へ恐悅申上ル、

於御次御祝酒被下、

一表奥一統へ御祝儀御目錄被下、御裏様ヨリ一統江同断被下之、御二方様ヨリ妻娘方へ同断被下、

一拝診医師へ御祝儀左之通被下、

豎文 御内々於御前被下、

一銀七枚

一綸子一反 御七

一赤飯一蓋

一御人形一箱

一肴二重一折

一御羽折一

御裏様ヨリ

一銀五枚

一紺上布一反

御内々於御前被下

一琉球綸子一卷

一御人形一箱

御裏様ヨリ

一金三百疋

一銀三枚

一赤飯一蓋

一肴料式百疋

不被召候ニ付被下

御裏様ヨリ

一銀二枚

一金三百疋ツ、

御裏様ヨリ

一金二百疋ツ、

本庄・多田・西山三百疋ツ、・細布一反ツ、三人、

自御裏様三百疋・晒布一反ツ、被下、

右ニ付平日拝診輩ヨリ御人形献上、御会积百疋ツ、被

下、其余夫々被進被下略之、有御進物方、

一就御酒湯如左来 御所様へ

一千鯛一箱

一御交肴三種一折

一御樽代金三百疋

同 人

平日御七ニ付傍觀

三角典乘大允

右同人

浦野泰庵 西尾昌敬

右両文 豎文

右東門

一 鮮鯛一折 御所様江

一 干鯛一箱

右无上覺院様ヨリ

一 干鯛一箱 御所様江

一 御たる代金二百疋

一 御交さかな一折

右眞心院様ヨリ

一 薩州留守居田尻治兵衛參殿、御酒湯恐悦、

御肴一折、御手杯一箱令献了、何モ不被下、

二十九日、雨下

一 薩州大坂留守居高崎金之進參殿、

若御所様御庖瘡為恐悦交肴一折・御菓子一折献上、取

次方面会、於使者之間吸物酒被下、并御納戸出会令挨

拶、

閏四月

十五日、雨下

一 薩州・津輕等留守居參殿、過日

若御所様御庖瘡ニ付御機嫌伺トシテ進上物有之、并御

酒湯被為濟候為御祝儀目錄之通進上ナリ、御進物方ニ

クワシ大略、

六月

七日

一 祇園山鉾為御覽薩州錦屋敷江卯刻御出門御成、御供重

衰御包與御忍ナリ、御先三人、御輿脇四人、御茶弁当

茶道一人、御簀紋御对箱余准之、御供方羽織袴肩衣用

意、重衰先着ナリ、步行、亥半刻過還御、

一 雅君様 孝君様 愛君様同所へ御成、御輿ニ二丁御繁也、

御先三人、御輿脇二人ツ、余准之、

但雅君様ハ御裏様ヨリ被為成、雅君様御輿ニ若御所

様被為召被為成、

一 御裏様右同所へ御成、

二十一日、陰

一 薩州鹿兒島諏訪大明神々出羽守奉向人粹主本田加賀守・同下總守、此

度上京ニ付、依先例於大書院御対面御口祝被下、御方

御所御出座、太刀披露有之、畢於使者之間吸物御酒被

下、献上物進物方日記ニクワシ、

七月

二十一日丙辰、晴

一薩州鹿兒島諏訪明神々主本田加賀守・同下總守、右近々帰国ニ付為御暇乞參殿、於大書院御対面、御口祝被下、使者之間ニテ吸物・御酒被下、畢長教令出會、吉田殿添文、於使者之間吸物・酒被下、右ニ付献上物如左、

國分煙草廿把

唐焼御茶碗十

蘇州扇子一箱

右加賀守ヨリ

芭蕉布一端

唐筆二本

國分煙草三箱

右下總守ヨリ

右同人へ以奉書度々献物為御会尺多色紙・御着代三百疋、下總守へ差上物ニ付同二百疋被下、先例天保十四

年九月廿六日、

二十八日癸亥 天顏快晴

一薩州蓮光院入峰ニ付、以代僧毛氈一枚・金二百疋献上之、

十二月

十五日戊寅、晴

一薩州南泉院権僧正、同伴留守居田尻參上、此度住職相濟上京ス、為伺御機嫌參殿ナリ、一束一本 白銀二枚献上、於新使者之間吸物・御酒被下、畢於小書院御対面、御口祝被下、退出後以奉書紗綾二卷被下之、

先例天保八年十二月四日

但今日押掛參リ、上京ニ付伺御機嫌之旨申上候也、

先例取調候処、已前留守居ヨリ上京ニ付如先例御対

面相願度日限相伺旨相見ユ、依之右之趣申聞候処、

夫ハ甚恐入候、実ハ薩州屋敷ニモ南泉院ニモ書留無

之、只御機嫌參上ノミト相心得取調候段重々御断申

上候也、御対面之事相願候哉之旨相尋候処、実ハ年

内中ニ關東下向仕候ニ付余日モ無之、何卒前廉伺ニ

罷出、今日御対面被仰付御振合ニ御取計入懇相成間  
敷哉、自然御対面被仰付候ハ、深有難ト申居依相伺  
候処、臨期之事故御場所御差支之趣ヲ以御対面被仰  
付られず、併御対面有之候振合ニ相心得申聞深有難  
申居帰ル、

六八三 二年酉三月十八日將軍小金原ニライテ

御狩ノ六歌仙

コトシ弥生ノナカハ、下總国小金ガ原トイヘル野辺ニ  
ナラセ給ヒ、ケモノ狩ノ御遊ヒ待ルトテ、アマタノ人  
々ヨモスガラカナタコナタツトヒ居テ、小道々々ノカ  
タメシケル時、アル人カタエナル木陰ニシホレ休テヒ  
ケルカ、草ムラノシゲリタル中ニテアヤシケ成声シテ  
シノビヤカニ物カタリノ聞ヘケレハ、何人ノツブヤク  
ナラント、ソトカヒマミケルニ、イロノケモノノ打  
ヨリテ、イトシホレタルサマニテ申シケルハ、オノノ  
サノミナゲキ給ヒゾ、イケルモノ、命サダメナキハウ  
キ世ノ常ノナラヒナリ、マシテワレノハムクツケキ

獵人ノ手ニカ、リテ失フベキ身ヲ、カ、ルメデタキ御  
世ニオフゾ、カシコクモ大君ノ御前ニ命ヲスツル事、  
マヨナキ幸ナラスヤ、コヨヒイザヨヒノ月夜ニアリケ  
レハ、夜ト共ニ詠シテツキヌ名残ノマトヒセン、サレ  
ハ名ヲ千歳ニノコスコト、敷シマノ道ニシクハナント  
イヘバ、イザヤコシ折ノ一首ヲモ、モノシテ六歌撰ニ  
ナゾラヘント、口々ササミシヲキケハ、

八條田貫

あすハはやうたるゝ身とはかねてより

おもひしろへの腹〔つ脱カ〕つみかな

徳佐根卯鷲

跡あしも耳も長きに春の日の

みしかきものは命なりけり

喜 恒

さつをうつわなも矢さきものがれ来て

御狩にすつる玉の尾の玉

六科法師

住なれしあなかしこしと思ひしに

南無阿ミの目をもれぬ身そうき

萩住侍猪

はかなぎよ武家てう名あるわが牙に

かけていのるはのちの世のこと

妻恋小男鹿

秋ことに人に食と聞し身の

けふはわれのミうちなげきつゝ

手まりうた

一ツとやひいとよ明れバおしゝがりゝゝおかごめ立たる

にぎやかてゝゝ

二ツとや二タ晩ねないてお供したゝゝ三度のおめしも喰

ひませんゝゝ

三ツとや皆さんおせこハ御難ちうてゝゝあれたるしゝを

バつきましたゝゝ

四ツとやよし原所ハ焼払ゝゝ常々あつてハこまります

ゝゝ

五ツとやいつも替らぬおしゝかりゝゝしゝをはとらひて

よめなつむゝゝ

六ツとや無病で仕舞ておめてたやゝゝ雨風ふけ共またと

ちうゝゝ

七ツとや何をいふにもひと込でゝゝ道中せまくてこまり

升ゝゝ

八ツとや山てそたてた犬しやものゝゝしいしをミますと

喰とめるゝゝ

九ツとやこゝまでござんせあミのそばゝゝ旅の姿でそろ

ゝゝとゝゝ

十とやとふから御沙汰のおしゝかりゝゝ小田原所の本田

原ゝゝ

〔表紙〕

# 齊興公史料

市來四郎編

嘉永三年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料（紙数九三枚）」の記載あり〕

嘉永三年庚戌 清暦道光三十年  
西暦千八百五十年

神武天皇御即位紀元二千五百年

孝明天皇 統仁第百二十代 御即位 弘化四年九月二十日 御宝算

將軍家慶公 第十二世 襲職 天保八年九月十二日 年五十三

藩主齊興公 第二十七世 當時 知政己巳六月四日 年六十六

世子齊彬公 當時修理大夫 稱ス

藩祖忠久公薩隅日三州及琉球國受封（人皇八十二代）  
後鳥羽天皇壽永五年即于文治二年）六百六十五年

関白太政大臣鷹司政通公

左大臣九條尚忠公

右大臣近衛忠親公

内大臣鷹司輔煇公

老中

阿部伊勢守正弘

牧野備前守忠雅

戸田山城守忠温

松平和泉守乘全

松平伊賀守忠優

若年寄

本多豊後守助賢

大岡主善正忠固

本多越中守忠徳

遠藤但馬守胤統

本庄安藝守道貫

所司代

酒井若狭守忠義 九月  
罷免



内藤紀伊守信親  
京都町奉行

水野下總守重明

明樂大隅守茂正  
八月小普請  
奉行ニ転ス

河野對馬守通訓

伏見奉行

内藤豊後守正繩

国老

穎娃信濃久喬

新納内藏久命

島津將監久泰

岩下典膳道格

島津安房久備

島津 登久兼

川上久馬久芳

町田監物久親

市田美作義宜

北郷内記久珉

島津和泉久風

島津丹波久長

川田信濃佐摸

猪飼 央尚敏

二階堂主計行典

調所笑左衛門廣郷

諏訪勘解由武敬

菱刈安房隆觀

島津 登久兼

島津石見久浮

島津豊後久寶

島津壹岐久武

末川近江久平

島津將曹久徳旧称碓山

川上筑後久封

以上二十五名文化六年己ヨリ嘉永四年辛亥二月迄凡四十二年間国老職ニ在リ前代ヨリ在職連緒ノモノハ〇印ヲ付ス

正月

年首ノ式旧規ノ如シ、略ス、

十一日、諸役人昇級及ヒ地頭所繰替等先規ノ如シ、人名略ス、

[大]

日、島津將曹(旧碓山久徳)カ家格ヲ進メテ一所持トス(家祖ノ歴史達書ノ部ニ記ス)、

十五日、此日令シテ弘化二年乙巳八月迄財計出納統計ヲ御勘定奉行具上ス、先例ノ如シ、

二月

二十一日、早川務(兼照)ヲ御小納戸見習ニ進メラル、

二十二日、齊興公上ミ方限士踊ヲ天保山ニ覽玉フ、其人員千三百余人(来由及ヒ事情内証紀ニ詳記ス)、

二十七日、下方限ノ士踊ヲ同所ニ覽玉フ、其人員三千二百五十余人(當時有志士ノ事情内証紀ニ詳記ス)、

三月

四日、左ノ輩評定所喚出シ御用アリシニ依リ、当夜自刃ス(事実内証紀ニ詳記ス)、

御弓奉行

赤山鞆負久普柱久武  
美兄

御目付御裁許掛

中村嘉右衛門

無役

吉井七之丞七郎右  
門三弟

御広鋪横目

野村喜八郎

同日、評定所呼出ニテ遠流ニ処セラレタル人名左ノ如シ、

御槍奉行

名越左源太

奥御小姓

村野傳之丞吉井七郎右  
衛門二弟

無役

有馬市郎

琉球館蔵役

大久保次右衛門利通  
父

御裁許掛見習

有村仁右衛門海江田信  
義美父

三月十三日 右五人遠流ニ処セラル(事実内証紀ニ詳記ス)、

金沓万両御貸下

松平大隅守

当秋琉球人召連参府ニ付テハ、彼国早損其外寛人滞留等ニテ手当向難及国力ニ付救遣候由候処、其方勝手向

モ累年難渋ノ趣可為難儀ト、別段ノ思召ヲ以テ金沓万

兩御借下ケ被 仰付候、

(野戰砲急発中ノ過誤)、

右於御白書院綠類老中列座、伊勢守(阿部)申渡之、

七月

二十五日

朔日、琉球王子玉川来麿、初テ登城、齊興公ニ掲ス、

御家老(江戸邸在勤)

島津壹岐久武

旧規ノ如シ、

右自刃後罪状宣告、島津ノ称号ヲ召上ラレ平屋ト称セ

八月

シム(事実内証記ニ詳記ス)、

七日、大風樹ヲ拔キ屋ヲ倒ス(損壞ノ事実後卷ニ記ス)、

五月

此日評定所ニ於テ申渡左ノ如シ、

朔日、御目付東郷彌十郎ヲ御小納戸ニ進メラル、

無役 木村仲之丞澄時

此日天保山ニ砲台築造ヲ命シ玉フ(装置砲種及築造掛人名

大目附病死後ノ(死年月日所刑事実内証記ニ記ス)

後卷ニ記ス)、

二階堂主計

同四日、横目役四本喜次郎・小田勘助・黒葛原周右衛

大島 郡見舞十四日 山内作次郎

門・樺山彦五郎・肥後直次郎等ニ金ヲ与ヘテ、前日近

臥蛇島 脇岡五郎太

藤・高崎等カ所刑取扱ノ勞ヲ慰ス(當時ノ形勢巷説内証ニ

悪石島 松元一左衛門長篇

詳記ス)、

徳島 和田仁十郎

六月

二月二十九日

十七日、天保山砲台落成ヲ告ク、

御馬預見習 仙波小太郎市左衛門長男

十九日、天保山砲台ノ試験砲発ヲナス、

右評定所呼出ニ接シ前夜自刃ス、事実内証記ニ詳ナリ、

二十日、三番組士小笹與右衛門大砲ヲ以テ左手ヲ傷ク

同日、近衛忠熙公御篇中(都姫君)薨去ノ報達ス、常興

院殿ト諡ス、齊興公御養女、実ハ重豪公第三女（茂子、<sup>〔服カ〕</sup>生母市田氏、廣大院殿ト同服ノ妹）、

四月十一日

当番頭

島津清太夫純久

御用人

寺尾庄兵衛

屋久島奉行

吉井七郎右衛門

御茶道頭

山口不阿彌旧名不及

御裁許掛見習

近藤七郎右衛門

御右筆見習

有川十右衛門

御小納戸格

新納 嘉立夫旧名

高奉行甌島移地頭

新納彌太右衛門

表御同朋

松山隆阿彌

無役

奈良原助左衛門

右十人謹慎命セラル（事実内証紀ニ詳記ス）、此外數十名

軽重所刑ス、略ス、

八月

二十一日、齊興公玉川王子ヲ從ヘ江戸ニ御発駕、護衛人員ニハ国老川上筑後（久封）ヲ初トシテ左ノ人々ナ

リ、

物頭

郷田仲兵衛

御使番

大迫源七郎

御日付兼御使番江田平藏

全

肥後五左衛門

全

大山彦右衛門

全

西田彌右衛門

全

高崎喜兵衛

全

谷村十郎太

外ニ騎馬御小姓組十二人、名略ス、

十月二十八日乎

晦日、齊興公・齊彬公、王子玉川ヲ從ヘ登營、將軍ニ

謁セラル、謁見式先規ノ如シ（扈從御家老川上筑後、當中

ノ式後卷ニ記ス）、

十一月

十五日、齊興公・齊彬公、王子玉川〔玉〕ヲ從ヘ御登營、將

軍ニ謁セラル、謁見式先規ノ如シ（式事後卷ニ記ス）、

同月十九日、齊彬公琉球王子ヲ從ヘ御登營、旧例ノ如

十二月

ク音楽ヲ奏ス（此日故アリテ齊興公御登宮ナシ）、

三日、齊興公朱肩衝御茶入御拝領（事由後卷及内証紀ニ詳記ス）、

同月二十八日、齊興公御隠居、齊彬公御家〔舊脱カ〕ヲ発表シ玉

フ、島津又八郎（久長）江戸ニ赴ク、御隠居御家督ニ就

テ御一門家参府御式ニ列ルノ先規ナリ（御式事ハ四年二月ノ部ニ評記ス、當時國中貴賤歡喜雀躍ノ形況筆舌ニ尽スコト

能ハス）、

同日、御用取御小納戸頭取伊集院平昼夜兼行掃麿ノ途

ニ就セリ（事案内証紀ニ詳記ス）、

六八五 江戸市街大火

二月五日巳上刻麴町五丁目ヨリ出火、折節西風強ク五丁

目ヨリ一丁目半蔵御門川岸通ヨリ平川町・元山王三軒家

辺・永田馬場辺・愛宕下芝御成御門前迄、御大名御旗本

衆數十軒焼失、町家ハ芝井町海岸迄ヤケ酉刻ニ火鎮ス、

大名焼失左ノ如シ、希有大火ナリ云々、

類焼之分

明石上屋敷 松平兵部大輔

豊岡上屋敷 京極飛騨守

上屋敷 柴田日向守

彦根上屋敷 三宅土佐守

廣島中屋敷 井伊掃部守

筑前 松平安藝守

三田 松平美濃守

長州中屋敷 九鬼長門守

徳永伊豫守

松平大膳大夫

大久保甚右衛門

五島兵部

細川豊前守

大村修理

二本松上屋敷 丹羽左京大夫

赤坂山王表御門 此近辺御旗本衆

館山 本田豐後守

峰山 京極右近將監

宮津 松平伯耆守

丹南上屋敷 高木亨之助

延岡 内藤能登守

丸龜 京極長門守

白杵 稻葉留太郎

日ノ出 木下主計頭

人吉 相良志摩頭

水口上屋敷 加藤越中守

薦野上屋敷 德永幡三郎

土方備中守

小松一万上屋敷 一柳兵部少輔

松山上屋敷 松平隱岐守

備前新田上屋敷 池田中務少輔

出羽長瀨上屋敷 米津越中守

藤懸出羽守

平野遠江守

下妻上屋敷 井上總之助

和州小泉上屋敷片桐助作

和州柳生上屋敷柳生但馬守

播州小野上屋敷一柳土佐守

長門清末上屋敷毛利讚岐守

中屋敷 松平陸奥守

丸岡 有馬日向守

竹中半兵衛

愛宕山堂社不殘

天德寺芝増上寺地中十ヶ寺計焼失ス、

右外御大名・御旗本衆数多焼失ス、

六八六 朝廷七社七大寺攘夷御祈禱

異国船近海へ度々渡来ニ付、往古ノ例ヲ以テ七社七ヶ寺

ノ御祈禱被 仰出之、

抛千古法今年曆面有恐申者、然近年異船見海上、今

春三月又見東海、防禦之備嚴重之由、目茲

震襟不穩、愈万民安楽宝祚長久御祈、自来八日一七

簡日一社一同抽丹誠<sup>〔勤カ〕</sup>勒行之事、

嘉永三年戊四月

伊勢 寺門

石清水 興福寺

賀茂 東大寺

稻荷 仁和寺

平野 東寺

松尾 大泰

春日

山門

六八七 江戸尚齡会

三月廿五日、御旗本朝比奈六右衛門殿於宅尚齡会有之候

(現ニ在勤人隠居ハナシ)、

百九歳 飯田潤輔

九十七歳 岡部儀兵衛

八十九歳 蓋木五郎

七十五歳 明石利右衛門

全 歳 中島卯右衛門

七十四歳 峰彦次郎

二ノ丸御留守居 七十三歳 朝比奈長七郎

七十三歳 中村萬吉

七十歳 朝比奈六右衛門

當時ノ習慣、諸大名ノ妻女ヨリ御祝ト唱ヘ物品或ハ金錢ヲ送り其費用ヲ助ケタリト、夫カ為メ高齡ノ者ハ一ノ助勢トナレリト云フ、

六八八 當時ノ物価江戸市中

此節白米、百文ニ六合五勺、中七合、下七合五勺

酒一升、四百文、中三百七十六文、下三百文

油一升、四百八十文

白大豆、上一升百十六文、中百文、下八十八文

麦、上一升百十六文、中百八文、下百文

右様追々安ク相成候、肴・青物ハ払底高直ナリ、

六八九 齊興公御退隱ニ際シ琉使<sup>〔玉〕</sup>王川王子へ訓令

琉球へ残居候暎国人差戻方之儀ニ付、別紙之通從 公義  
被仰渡、被遊

御承知候付、帰国之上中山王へ相達、撰政・三司官へモ  
申聞、被仰渡候通役々申談、此上猶心弛ミ無之、差戻方  
之儀精々勘弁ヲ加へ一日モ早ク引弘候様、抽丹精可被取  
計候、此段可相達旨

御沙汰被為 在候、左候テ

宰相様御事、追々

御老年ニモ被為成、其上御持病之御痔疾被為差起候節ハ  
被遊

御難儀候付

御隠居被遊度

思召ニ候間、

御隠居被遊候テモ異国人一条之儀ハ是迄之通被遊

御指揮被下候様奉願候処、其通之

思召ニ候間、此段モ帰国之上内々中山王へ相達、撰政・

三司官へモ可被申聞置候事、

右之通書取ヲ以嘉永三戌十二月十一日、於御勝手之間

將曹ヨリ直ニ玉川王子へ相達、此書附相渡ス云々、

六九〇 国老島津將曹齊興公御隠居 齊彬公御

知政御予定ノ趣ヲ中山王ニ報告ス

一筆致啓達候、

宰相様齊興公

少將齊彬 様益御機嫌能被遊御座奉恐悦候、

国王琉球国王尚泰様愈御勇健被成御座、珍重之御儀 奉存候、

然ハ

宰相様全御事、追々

御老年モ被為成、其上御持病之

御痔疾被為差起候節ハ被遊

御難儀、殊ニ

少將全様御事、御年輩ニモ二十被為成候付

御隠居被遊度

思召ニ候、就テハ是迄琉球国一体之儀ハ勿論、異国人

渡来ニ付差戻方一件、分テ

宰相様深御配慮被為



在、為被遊

御指揮御事候ニ付、

御隠居被遊候テモ矢張是迄之通被遊

御指揮被下候様

少將様御願被遊、拙者共ヨリモ奉願候処、御許容被下

難有仕合奉存候、此段為御心得内々申越置候様〔折之〕從

御兩殿様ヨリ承知仕候、且又滞留之英國人〔頭注〕〔齊興・齊彬二公〕伯徳差戻方

之儀ニ付テハ、此度猶又從

公刃被仰渡候趣モ有之、細々玉川王子へ達置候ニ付、

自ラ可被申出候間

國王様へモ被仰上、何分モ都合能御取計可被成候、恐

々、

十二月十二日

久徳島津將曹

浦添王子様

國吉親方様

座喜味親方様

池城親方様

六九一 江戸府内各藩邸ニ於テ大小砲操練ヲ許ス

諸家屋敷ニテ人数調練之儀、外曲輪〔淺草御門・芝・高輪等ヲ云フ〕ヨリ三十町余モ隔候屋敷ニ候ハ、調練不

苦旨先達テ相達候処、以來場所々ニ寄外曲輪ヨリ二十

町程モ隔リ候欤、又ハ本所深川辺ニ候ハ、何レニテ

モ〔諸藩邸〕調練不苦候間、其段最前相達候向へ寄々可

被相達候、

九月

九月

九月

六九二 十二月廿九日阿部伊勢守様御渡大目付

堀伊豆守達

諸家屋敷ニテ人数調練之儀、外曲輪〔上〕ヨリ二十町程モ

隔リ候欤、又ハ本所深川辺ニテ不苦候処、右之町数相

隔リ候場所ニ屋敷無之面々、又ハ屋敷有之候テモ差支

之儀モ有之調練難成向ハ、鳴物旗印之類不相用兵具等

備置候ノミニテ、鉄炮之義ハ口薬計相用打方為致、全

ク進退駈引等不事立様穩ニ相試候迄之調練ハ、外曲輪

外ノ屋敷ニ候ハ、不苦候間、以來右之趣ニ相心得調練

為致度面々ハ、相伺候様可被致、且又外曲輪ヨリ二十

町余并本所深川辺之屋敷ニテ調練之節、空砲打放之義

無用可致旨相達置候向モ有之候処、向後四月朔日ヨリ

七月晦日迄ハ調練之節空砲打放候義可為勝手次第候、

八月ヨリ三月迄之内ハ口葉計相用打方為致候義ハ不苦

候、尤事ケ間敷儀無之相心得、実意之稽古肝要之事ニ

候、

右之趣最前相達置候向々へ寄々可被達置候事、

十二月

六九三 調練之連歌(当時ノ情况ヲ穿ツ)

大平の御代に軍のこと始 但馬

犬追物が前評をする

慰の調練稽古仕当りて 九鬼

弁当のさいは度々の損 同組

年寄て御たしをあての廳の役 組頭

軍の供は式朱で断り 日雇

人真似をして面白く成りにけり 大因幡

(空白マ)

同組

みせ付に調練度の大馳走 加納

有がたからて出るおかしさ 同組

あてのなき海岸へんをまこくと 近海廻り

肝玉までも砂にうつまる 本多

文武とも兼備へて帰り 筒井肥前守

咲みつるまでとやめられもせず 戸川

沖近く黒船みへてそよつかし 浦賀奉行

利口なよふて兎角臆病 福山阿部伊勢守

弓よりも鉄炮流行あり難さ 田付四郎兵衛

所々に台場が出来て嬉しさ 井上左太夫

山あてゝ胸はどきどき金まふけ 山家

うつちやて置く方かよしと 素水山鹿

調練の言わけたぬ御世に出 読人不知

侍山て獵人になれ

六九四 齊彬公水戸中納言へ御往復書第一三月朔日

燧袋并大竹ノ件

桜花如雪ノ時無御障令扨賀候、過日ハ大竹(前卷ニアリ)到来、深謝ノ至、此燧〔石カ〕不袋供一笑候也、

三月朔嘉永三年庚戌 水隠

修理殿参

六九五 全上第二

牛痘并防海琉球等ノ件(四月廿四日)

御別紙拝見仕候、牛痘御用相成候由難有奉存候、

一 海岸御達モ外ヨリ御覽ニ相成候由、肥前(佐賀齊正公)

モ此節ハ何モ論等不申出、余程用心ノ様子ニ御座候、

一 琉人参府ノ事、代替(琉球王襲位謝恩使)ニ参府仕候御沙

汰ノ事、誠ニ的中恐入奉存候、此儀ハ内実心配仕候事

ニテ色々勘考仕候得共、致カタモ無之意味ニ御座候、

公辺ヨリ被仰出候訳ニハ無御座候、滞夷中々帰国(英国

人)ノ様子無御座候、

一 大竹(因産子孟宗竹)御用ノ由、幸ヒ参居候間奉差上候、

一 螢蠅抄・海外新話(清英戰爭記)儀、此間披見仕候、

一 廿八日御登城ノ節、両姫君(水戸公ノ姫君)御同道被仰

出候由、恐悦奉存候、

一 内々申上候儀(何等ノ事由乎知ルニ由ナシ)云々、拝承仕

候、御詠歌モ難有奉存候、

一 南部(盛カ)(森岡へ結婚)御縁組ノ儀并山野邊(水戸藩)ノ御一

条恐入奉存候、兎角無事平和ニテ役人任セノ人々無之

候テハ、何方モ請(水戸家老山野部兵庫)不宜世上、扱々

恐入奉存候、役人任ニ御座候得ハ、事ニ預候面々ハ都

合モ宜敷可有之候得共、其向ニ無之面々、又ハ下々難

義ノ余リニ不思議ノ企(行脱カ)ニ成候事、可恐事ト奉存候(当

時各藩僉役人マカセニテ藩主事ヲ執ルハ稀ナリ、本藩モ同シ、

則前ニハ調所、当今ハ島津豊後・島津將曹等國務ヲ執レリ)

一 此間小梅(小梅村別邸)ノ儀、運阿彌(城坊主、出入ノ者)

迄申談置候、其内御聞ニ入候事ト奉存候、以上、

廿四日

御請

六九六 全上第三

一 別紙申上候、琉参(参字不解、何等乎隠語ナルカ如シ)

一条云々、御不審御尤ニ奉存候、何卒丸葉同様ノ訳ト  
思召奉願度、此御請甚々当惑仕候、名利姑息ノ世ノ中  
御賢察奉願候、

一 小梅ノ(全上) 一条、先月十五日運阿彌(全上)何トナ

ク相尋候処、御察シノ通り運阿彌失念仕候ヨシ、内実  
外ニ可申上程ノ義モ無之候得共、小石川(水戸本邸)ニ

テ滞リ候テ、山運(全上)失念ニ相成候様子ノ口振ニ御  
座候、山運(全上)モ困リ候様子ニ申聞候、公辺ノ方ハ  
少シモ御差支ハ無之候得共、御屋形ノカタ今少シノ処

ニ御座候趣、内分申聞候、

一 席故心得ニ相伺申候、山運(全上)ハ寒方ニ(寒ハ奸ノ

通首乎、或ハ山運云々ト記サレタルヲ以テ知ルベシ)御座候  
也、如何ニ心得ヨロシク御座候也奉伺度候、

一 丸葉ノ儀(隠語知ニ由ナシ)云々恐入奉存候、宗(宗ハ宗  
城公平)ヨリ紅葉ノ(紅葉ノ語知ニ由ナシ)儀モ、先比モ

申談候事モ御座候得共、随分紅葉ハ承知ノ様子モ候得  
共、長女モ(長女云々知ニ由ナシ)半信半疑位ノヨシニ申

居候、阿闍ト(阿部候)長女ノ儀ハ、此頃ハ長女ノ方ハ

宗ヨリ申聞、余程ヨロシク相成候ヨシニ御座候、又極

内外ヨリ承リ候ニ、大奥(幕府ノ大庭)惣体ハトカク丸

葉ヨロシク、何モヨロシクハ御座候得共、恐レ候様子

ニテ、丸葉程ニハ無之ヨシニ承リ申候、中々宗位老人

ニテ申候テモ、急々ハコビ候様ニハ相成間シクト奉存

候、

一 松前又々漂流御座候ヨシニ承リ申候(外国船乎)、

一 此節種々珍説申フラシ候間、以来急度雜説申フラシク  
タシシク、一昨日伊勢(阿部伊勢守)ヨリ申達シニ相成

候、大目付廻状相廻候、

一 目付(御目付中ノ意見書ヲ閣老阿部候へ提出)ヨリ阿へ出候

トノ書付モ虚説ノヨシ承候得共、又内実承候得ハ、阿  
へハイマタ不申候得共、目付内調ハイタシ候由ニテ、

其書面モレ候間、全ク虚説ニ相成候ヨシモ承リ申候、  
一 海岸見分モ(御目付其外)十三日出立仕候、此節ハ御入

用モ御カマヒナク、十分ニ御手当(取調ヲ云乎)申出候  
様ニトノ事ノヨシ内々承申候、勘定(御勘定奉行)浦賀

辺参候節ニ異船ヲ見セ度モノニ御座候、左候ハ、又少

シハ都合モ可相成ト奉存候、

一先頃ヨリ呈書可仕筈ニ御座候得共、内実ハ国元少々混雜ノ訳(国許混雜云々、近藤・山田等カ屠腹一件ヲ云、事実内訌ノ部ニ記ス)有之候テ嫌疑ノ訳モ御座候間、呈書モ先々差扣罷在候、最早平和ニ可相成様子ユヘニ、余リ延引ニモ相成候間呈書仕候、無理ニ寒氣ヲ(寒氣ハ姦ノ隠語)止メ可申ト企候モノ有之、其事破レ候事ニテ甚タ心痛仕候得共、先寒氣ノ儘ニテ嚴寒ニモ不相成、平和ニ可相成様子ニ御座候、誠ニ可恐事ト奉存候、伊達(脱カ)モ(伊達宗城公)毎々出會仕候、先ハ内密御請可申如斯御座候、頓首、

五月廿一日

御書中国元少々混雜ノ訳有之云々ハ則チ内訌ヲ云フ、事実内訌記ニ参照スベシ、

六九七 全上第三(四)

燧袋洋書等贈受ノ件(廿一日カ)  
(五月廿三日)

入梅中鬱々シキ天気御座候処、益御機嫌能被遊御座恐

悦奉存、然ハ其後久々御不沙汰申上恐入奉存候、先比(脱カ)

ハ御好ノ燧石袋(古製ニ擬シタルモノ)頂戴被仰付、誠ニ以難有奉存候、此程ヨリ御機嫌伺旁呈書可仕処、色々取込罷在何共恐入奉存候、此節如何ノ品ニ御座候得共、例ノ豚肉(琉球産)御内々呈上仕候、被下ニモ相成候得ハ難有奉存候、此訳書ハ(何ノ訳書乎詳ナラス)此節和解為仕候間、不取敢入御覽候、因ハ近日中ニ差上候様ニ可仕候、先ハ御機嫌伺且御請延引ノ御詫旁可申上如此御座候、恐惶頓首、

五月廿一日 修理大夫

上 御側中

六九八 全上第五

右ニ対シ水戸公御書簡

如諭鬱々ノ天気無御障令拵躍候、陳ハ新訳ノ砲書為御見感謝ノ至ニ候、然ル処右書ハ因迄一部手ニ入候間読合度返壁候、此段御答迄草々申遣候也、(致カ)(壁)

五月念三夜嘉永戊

二白、時候御厭專一ニ候、豚肉御惠贈令多謝候、礎袋ノ御謝詞入御念候事故、(候カ)眼病中燈下乱筆、御海怒御推覽可給候、不備、

水戸隠士

修理大夫殿

六九九 全上第六

溝口志願琉球処分方并夷情等ノ件八月十七日

別紙奉申上候、溝口願ノ儀ハ宗へ(全上)同人ヨリ被願(願カ)候、(間)心当リ之処ヨリ可相願趣ニテ、一昨日持参仕候間奉願候、溝口事志モ在之、海岸等ノ儀不及種々心配仕候者ニ御座候、

一 印影鏡(写真鏡、川本幸民訳) 訳書延引恐入奉存候、

一 当年風説書(和蘭人提出)ノ様子ニテハ、近年中英船渡

来且北亞船モ可参事ト扱々痛心仕候、夫々付テモ中山

ノ(琉球)光景甚タ掛念罷在候、近年中大事到来必定カ

ト奉存候、只今急々所置可仕時宜ハ無之候得共、中山

(全上)ノ所置御賢慮モ被為在候ハ、委細ニ拜承仕度

先ツ當時無事平和(在留佛英人ヲ云)ノ由ニハ御座候得共、内々伝承ニテハ追々根深ニ可相成形勢、扱々心痛仕候事ニ御座候、天下ノ御為ニモ御座候間、御賢慮内々伺置度、左候ハ、又々所置可仕都合モ可有之奉存候先ハ御内々奉申上候、頓首、

八月二十七日

修理大夫

別呈

(青彬公史料にて校訂)

七〇〇 全上第七

車船雛形ノ件十月十六日

過日ハ尊書難有奉拜見候、追々冷氣相成候処、益御機嫌能被遊御座恐悦御儀奉存候、然ハ先日ハ珍書(何書ナリヤ詳ナラス)拜見難有則返上仕候、且又車船雛形奉(一種ノ小舟、汽船ノ車ニ擬シテ運用スル仕掛ナリキ)備貴覽

候、先ハ御請迄早々奉差上候、(申カ)恐惶謹言、

十月十六日

修理大夫

上御請

右ニ対シ水戸公御書簡

過日ハ舟形御示シ芳意不淺、〔壁〕即及返壁候、新奇可喜事ニ候也、

十一月廿日 水戸隠士

修理大夫殿

以上七封（本年度分）水戸家保存（外ハ年度毎ニ分挿ス）

七〇一 異国処分變更布令

異国船渡来之節取計方之儀、文政八年（丁酉）無一念打  
払可申旨被仰出、其後去ル寅年（天保十三壬寅）漂流船  
之儀ニ付テハ、厚ク被仰出候趣モ有之候処、近來漂流  
ニモ無之度々渡来、昨今年ハ對州・奥州・松前辺〔別テカ〕へ到  
リ多ク乗通り、於海上モ廻船へ乗付、或ハ所々之浦方  
へ上陸致シ食料薪水ヲ乞ヒ、当年ハ浦賀表へイキリス  
船渡来、伊豆国附大島へモ上陸致シ、猶又下田表へモ  
相越、滯船之上猥ニ上陸致シ、追々横行之振廻相長シ  
候ヲ、此儘被差置候テハ 御国威ニモ拘リ不容易事ニ  
付、此節ニモ嚴重之取計方可被仰付哉ニ候得共、右様

被仰出候上ハ、何方ニテ何様之儀出来可致哉難計候ニ  
付、其以前防禦手当実用之処厚可被申付候、是迄モ警  
衛向之儀ハ追々被仰付モ有之候事ニ候間、向々〔テ脱カ〕ニモ兼  
々手当可有之候得共、非常備之儀ニ付若不行届之向モ  
有之候テハ如何ニ付、猶又改テ被仰出候条、其覚悟ヲ  
以テ可有用意候、時宜ニ寄又々被仰出候品モ可有之、  
併此度被仰出候趣心得違致シ、事ヲ急キ卒爾之取計無  
之様相心得、念入可申付旨被仰出候、

七〇二 水野越前守外国船攘斥ヲ止ム

参考

幕令ニ異国船渡来ノ時取計方ノ儀、文政八年乙酉ノ令  
并天保元年庚申ノ令ヲ停メル趣、嘉永三年丙辰正月食  
料薪水ヲ与フヘシ云々ト令シタリ、閣老水野越前守カ  
令スル処ナリ、是ヨリ攘斥ヲ止メ稍開化ノ途ヲ開キタ  
リ（布告天保十三年ノ条參看）、

七〇三 齊彬公伊達公ニ贈ル書

昨日之尊書忝奉存候、愈御清福奉賀候、然ハアメリカ船渡来之儀ハ、六月廿五日参リ、七月朔日出帆仕候事ニ御座候、且又今日ハ御寄合(何等ノ寄合歟)被下候段忝奉存候、宜敷御談奉願候、小子之所存之処ハ別紙ニ荒増奉申上候、御覽後ハ御用濟御返シ奉願度候、昨日不残清書之上可差上ト存候処、昨夜ハ存外オソク相成候故、其儀出来兼候テ其儘差上候間、外ニ小子留入無〔メカ〕御座候、將又遠山江内匠之儀承リ申候、中々急々ハムツカシクト奉存候、其ウチニ拝顔可申上候、例之坊主(何人歟)云々事モ承リ申候、是ハ先御安心之方ニ被存候口振リニ御座候、其内拝眉可申上候、先ハ用事早々奉申上候、頓首、

菊月廿二日

麟洲拜全上

藍山大君

同

愈御清福奉賀候、然ハ一昨日飛脚着、昨日書付付候〔見カ〕処、

琉球江又々異船渡来、アメリカ船ニテ船修覆ト唱ヘ罷越候テ、船ツクロヒハ彼方ニテ見分候処、格別ニ無之トテツクロヒ頼モ不致、滞留人(英人伯德令)江逢候上ニテ薪水等望候上、出帆前滞留人ハ甚不宜人物故、上海江参候ハ、列婦候様可申聞、夫迄之処ハ魚末無之様申聞出帆イタシ候テ、滞留人ノ書状モ請取候ヨシ、右之通ニ候得共、内実之処ハ彼方心底甚可疑事ト奉存候、英国船ニテハ不宜候間、アメリカ船江頼破船之姿ニテ渡来為致、其後之様子見ツクロヒ候テ、英人申合セ候テ、出帆前アシク申候テ出帆ニ及候事カト、小子ハ相察シ申候、左候テ先頃ノ返事ハ当年カ来春頃ニ可参、其節之都合之為メ破船申立参候テハ有之間シクヤ、破レ候場所疏人ヘハ見セ不申様子、旁不審之一条ト奉存候、右通乗頭事滞留人ヲアシク申シ、早ク列婦候儀可申談ト申候、旁之訳ニテ候ヤ、御届モ一兩日中ニ差出ニ相成申候、尤去年渡来之儀ハ矢張押隠候テ之御届ニ御座候(事実隠蔽ヲ云、碓山將曹・島津豊後等カ所為後葉ノ御書面ニ明ナリ)、四・五日中ニハ事実書面写差上可申



候得共、先不取敢御内々申上置候、宜敷御勘考御取計  
可被下候、先ハ用事早々申上候、頓首、

九月十九日

猶々、琉人ニモ弥八月廿一日出立仕候段申来候、以  
上、

修理〔大〕太夫拜

藍山公閣下

七〇四 島津又六郎家記鈔

十二月廿八日布達

御黒書院重キ御品拝領之御礼〔衣カ〕（朱乃肩衝御茶入）

松平大隅守

右御目見

月日

一御掛物 三幅対

古法眼一箱

一御肴 一折

右ハ重キ御品拝領之為御礼以使者候差上之、於櫓之

間謁山城守、

十二月 日達

太守齊興公 様江ハ除、御姫様江御参府付、先月十三日以

上使戸田山城守様御懇之被為蒙上意、同十五日御登城  
御参府之御礼被仰上候処、御懇之被為蒙上意、御直御  
請被仰上、諸事御先格之通被為濟候、

十二月

島津又六郎明

七〇五 齊興公御城下土踊ノ再興

土小踊・御関狩之儀、故三位〔重蒙公〕様無御抛思召之  
訳被為在、是迄興行御差延之所、今形ニテハ御作法不  
連続可相成、殊ニ諸士泰平之代振ニ習染、武備心得薄  
ク成立候テハ屹度不相濟事候処、此節土小踊・御関狩  
興行被仰付候、就テハ土小踊・御関狩共以前通稀々〔ニカ〕致  
張行、一旦其節限之事ニテハ御作法致連続兼、其上旅  
行等難罷出者モ可有之候ニ付、旁別段思召之訳被為  
在、一往土小踊ハ勿論、御関狩之儀モ御下国之節々、

御城下之儀ハ六組之内先ツ一組ツ、連々繰廻致張行、御軍備訓練方行届、御作法致永統候様被仰付候、尤士小踊之儀於川尻沙揚場等興行被仰付候儀モ可有之候、左候テ何篇是迄御流儀砲術（高嶋流トモ唱）訓練之以準合、手輕御取扱被仰付候旨被仰出候条、難有可奉承知候、

五月二十三日

將曹久徳

士小踊并御関狩之儀思召之訳被為在、此節興行被仰付段被仰出、別紙ヲ以申渡通候、右ニ付テハ専士風興紀御軍備訓練方行届、御作法致永統候様ト之御趣意ニテ、誠以難有御事ニ候条、諸事御作法相守、聊心得違之儀共有之間敷候、此旨支配中・組中へ可被申渡候、

五月二十三日

將曹全上

右五月二十三日島津主水殿御取次ヲ以被仰渡候事、

抑士踊ヲ再興シタルハ大ニ理由ノ存スルコトニシテ、嘉

永二年ノ冬山田・高崎・近藤等ヲ初メトシ、幾多ノ有志死流其他ノ輕重罪ニ所刑セラレ、人心危懼ヲ抱キ物議恟々タレハ鎮撫ノ策ヲ施スニ窮セル際、海老原宗之丞ナル者士踊ヲ再興熱狂セシメ、以テ人心眩惑セシメントテ、武備拡張海防必要ノ名ヲ仮ラントノ議ヲ呈出シ、島津（マコ）等之ヲ贊ケテ允許ヲ得タルモノニシテ、果哉一般古習ノ再興冀望ノ折ナレハ、老幼昼夜ニ耽リ樂ミ時事ヲ忘レタリ、然レトモ真ニ憂國ノ士ハ其奸謀ヲ探知シ、殊ニ西郷隆盛ハ親友大久保利通カ父次右衛門・山田・高崎等ノ惡石島ニ流（死一等ヲ減セラレ）サレ、辛酸ヲ嘗メタルヲ慨キ、益々感憤シテ大ニ為スアラント誓ヒ、兩人ノ踊拍子ニ傾サリシハ皆人ノ知ル所ニシテ、又御覽ノ当日ハ男女拳テ見物セルニ、西郷ハ其時分郡方ノ筆吏タリシモ、數十人ノ同僚中独リ出勤執務シタリト云へハ、當時ノ人情形勢推察シ得ヘキナリ、

七〇六 参考 安田助左衛門日記抄

嘉永三年庚戌

正月

九日

上野彦助・成田正右衛門・田原直助一列ニテ、絵師平瀬清之進召列出立、西目長島ヨリ東目志布志ニ至迄不残廻勤、台場御造築ノ場所見合、画図取仕立吟味ノ成行申上候、三月八日帰府、

安田助左衛門

外ニ

前条人数

右ハ御領内海岸諸所へ台場并塩硝藏等御造立被仰付候付、被差越候条申渡、可承向へモ可申渡候、

四月

豊後全上

右之通四月十四日承知、外ニ地方検者同様被仰付候、

安田助左衛門

外ニ

前条人数

右ハ此節川尻沙揚場（一名天保山）并洲崎宇都浜（一名

大門口）へ台場造築ニ付、掛リ被仰付候条申渡、可承向へモ可申渡事、

右之通り成四月廿四日承知、

一御領内諸所台場御造築ニ付キ、六月中旬ヨリ被差越管ニ候処、拙者瘡相煩得不差越、九月廿一日出立、串木野羽島迄差越諸所見分、山川・指宿辺台場モ致見分、十月八日ヨリ知林島（指宿郷）台場へ取付、〔晦日〕<sup>〔脱カ〕</sup>致成就暫帰府、十一月五日垂水台場へ取付、廿七日成就、夫ヨリ内ノ浦へ差入同断、十二月廿六日成就、同廿九日帰府、

安田助左衛門

地方検者

椎原龍藏

右串木野并久志・秋目へ御用ノ儀有之、被差越候条申渡、可承向へモ可申渡候、

三月

〔齊彬公史料にて校訂〕

七〇七 参考 鎌田正純所蔵

当月二日飛脚ヨリノ尊翰相届辱致拜誦候、益御勇健被成御毎勤奉珍重候、随テ御宿許初、堀家中内無異罷暮申候間、乍慮外御放念可被下候、扱海印其以後静諡追々御手モ附可申候、音高シク無之様トノ御趣意カト奉恐察候、右ニ付御書添之趣委細致承知候、世評ハ取々ノヨシ御座候得共、取ルニ不足儀ト態ト不申上候、乍然得（得能彦左衛門）印評判ハ宜敷、退役已後モ及深更往来モ為有之ナト慥成様ニ承義ニ候へ共、是以取ルニ不足儀（内証ニ關ス）ト相考居申候、扱士踊被仰付一流踊拍子ニテ浮氣ニ相成、諸所へ喧嘩口論等喧敷、何卒静謐ニ相済カシト祈ル事御座候、磯於御茶屋、バツテラ船六艘御造立有之、其内一艘御召船ニテ殊ニ結構出来申候、図左如シ（図送ス）、

島津清太夫純久

鎌田刑部様

七〇八 参考 黒田家福岡家記抄

正月

二十五日

平戸御領分ニ白帆ノ異国船一隻相見テ、同日帆影見隠候段於長崎為知来ル、

二月

五日

昼四時過江戸麴町四丁目ヨリ出火、北風烈敷及大火、櫻田御屋敷（現今鹿鳴館）御類焼本芝マテ、焼通ル

長元院類焼 大涼院様御位牌無御別条、御尋之御奉

書二月二十八日到着、

十日

於長崎對州聞役ヨリ以廻状、正月二十二日・二十三日

對州沖合ニ異国船二艘乗通候段、委細御奉行所（長崎）

へ被申達候趣為知申来ル、

十四日

於長崎平戸聞役ヨリ以廻状、同九日御領分沖合ニ異国

船四艘乗通候旨、御奉行所へ及御届候段為知申来、

三月

朔日

於長崎對州聞役ヨリ以廻状、正月二十四日ヨリ二月朔

日迄對州東西北海へ異国船十二艘追々乗通候付、右之趣

御奉行所へ被申達候段為知来委細長崎ノ部ニ見ル、

八日ヨリ同十五日迄

長崎表公義御備菓（火薬試験）、日割ヲ以御両家ヨリ役

々立会ヒ試相濟、

二十三日

於江戸松平大隅守（齊興公）御名代被為召、当年琉球人

被召連御参府ニ付テハ、彼地早損其外等ニテ手当向難

手ニ及ニ付御救被遣候処、大隅守様御勝手向モ累年御

難渋之趣可為御難儀ト別段之思召ヲ以、金一万兩御拜

借被仰付旨為知来ル、

当春阿蘭陀人参府御先規ノ通り、

四月

三日

於長崎對州聞役ヨリ以廻状、二月二十七日ヨリ三月朔

日迄、對州西北海へ異国船都合八艘追々乗通候段、御奉

行所へ御届仕候旨為知申来、

六月

六日

大隅国内之浦村遠沖へ異国船二艘相見得候段、御役所

へ御届仕候旨、於長崎薩州様聞役ヲ以為知申来、

十一日

未上刻於長崎阿蘭陀船一隻入津新「カヒタン」乗渡

七月

薩州長崎聞役ヨリ以廻状、去年来琉球国内へ異国船

追々致渡来候段、長崎御役所へ御届仕候旨為知申来、

九月

朔日

薩州様長崎聞役ヨリ以廻状、六月二十五日琉球国那覇

表沖へ異国船碇卸、橋船ニテ異国人之内致上陸、粮食

等乞請、船修復相仕廻、七月朔日致出帆候段、御奉行

所へ御届仕候段委細申来（前記御届書参照）、

二十五日

以御廻状、御府内鉄砲稽古之義、年々四月ヨリ七月迄之期月ニ候処、近来海岸警衛向厚被 仰出候趣モ有之、以来四季共稽古不苦旨委細之趣御達、且諸家屋敷ニテ人数調練ノ儀等委御触達、

同日、近来西洋学盛ニ相成、世人新奇ヲ好候処ヨリ、僻学好事之輩、深ク其学不研究者マテ蘭書ヲ取扱臆断杜撰之翻訳イタシ、奇説怪論ヲ唱へ儘有之由、畢竟近来蘭書和解恣ニ相成如何之事ニ付、以来心得之義委細御触<sup>人数調練ノ義ニ付テハ十二月二十九日ニモ尚又御達有之</sup>、

十一月

十九日

琉球人登城御礼申上、同二十二日登城、音楽被仰付、

同日御暇（前記参照）、

二十一日

薩州様長崎聞役ヨリ以廻状、同八日大隅国内之浦村遠沖へ異国船一艘乗通候段、御奉行所へ御届仕候旨為知申来、

十二月

二十二日

於長崎薩州様聞役ヨリ以廻状、同五日大隅国佐多伊座敷村之内島泊沖村へ異国船一隻相見、風雨強漂居候処、翌朝ニ至遠沖へ走出候段、御奉行所へ御届仕候旨為知申来、

七〇九 参考 碓山將曹種子島六郎へ手翰

三月廿九日被差立候不時飛脚、去ル十九日到着ニテ、数通ノ御内用書相届細ニ致拝見候、於其御地 少將様（齊彬公）御前様其外 御子様方、益御機嫌能被遊御座恐悅御同慶奉存候、於爰許モ 宰相様（齊興公）益御機嫌能被遊御座候、去ル十五日ヨリ玉里御茶屋へ御滞留被為在、猶御安康被遊御座恐悅御儀奉存候、

寶鐘院（齊興公生母鈴木氏、八百の方ト云フ、唐湊村錦崎ニ住ス）様御事モ、マスノ御安泰被遊御座、御子様方ニモ御同断被成御座重疊御同慶奉存候、

少將様御事旧冬ヨリ少々御違例被遊御座候処、追々御

快方被為在候段ハ奉承知、格別乍惶御懸意申上候訳ニ

ハ無御座候得共、余リ御延々ニテ御月代等モ不被遊段

モ承知、御快方トハ奉恐察候得共、 太守様ニモ掛テ

ノ御事故、イロ／＼御内沙汰モ承知仕彼是心配仕候、

第一因州（鳥取家ヲ云フ）ノ御血筋ハ誠ニイヤナモノト

御内話共承知仕、殊ニ岡山様（齊興公）御一条モ折悪シ

ク御内々御到来ニテ、別テ

上様ニモ御高配<sup>〔被カ〕</sup>リ遊候事ニテ奉恐入居申候、然ル処去

ル月廿二日御月代被遊、翌廿三日伺御機嫌トシテ御用

番様へ御廻勤被遊候由、御帰殿後御草臥等モ不被在候

段モ奉承知、重畳恐悦御儀難有仕合奉存候、トフゾ此

末兼養生御專要被遊度御事ト只々モ奉願上候、

岡山侯御跡目ニ 報七郎（此後種子島伊勢家跡ヲ相統ス）

様ト申事御取記シ有之候得共、御叔父様ノ御統合旁ニ

テ六ヶ敷由、夫故御取込候段モ承知仕候、

先達テ松壽院（齊興公妹、種子島伊勢ニ嫁ス）様態々大奥

へ御上リニテ、報七郎様ヲ種子島伊勢家跡御養子ニ御

次キ被成度御頼ノ趣有之候得共、其節ハ岡山様へ御養

子御内合<sup>〔合カ〕</sup>

少將様被為在、折角イロ／＼御手相付居候時分故、委

細御承知被遊 御聞被置トテ

太守様（齊興公）ヨリノ御返答ニ御座候、猶又私へモ其

段御沙汰承知仕、且松壽院殿ヨリ

少將様（齊彬公）へモ御願被成度段モ承候<sup>知カ</sup>仕候付、別文

通 太守様へ御願被仰上候付、御取成ノ所御願可被成

段ヲ御直文ニテ被仰上、可然ト松壽院殿へ申上置候、

先便ヨリ御願文御差上候由、最早疾ニ 少將様御承知

為被遊答ト奉存候、 松壽院殿ニハ是非御養子ニ御次

キ被成度ト、シキリニ御噂有之由ニ御座候、

岡山様御一条今日表向御発相成申候、

近衛精君様御事御抱瘡御難痘ノ所、去ル五日被成御逝

去候段、一昨夜京都ヨリノ急キ到着ニテ相達申候、則

達 御内聴今日表向御発シ相成申候、

右両条誠ニ奉恐入仕合ニ御座候、然ナカラ

太守様御初 其外様ニ於テ御機嫌ハ御差障不被為在、

是ノミ難有仕合奉存候、誠ニ奉絶言語仕合何トモ奉恐

入居候、

当方格別相替候儀モ無御座、世上一統平靜ニテ仕合ニ御座候、今日御内用計ニテ不時飛脚差立遣候ニ付、公私取交アラマン申上候、猶奉期后便細事可申上候、以上、

四月廿六日

淀山將曹

種子島六郎殿

追啓

追日向暑ノ節御座候得共、弥御安泰被成御精勤奉恐賀候、御宿所御惣方様無御別条、權助様(時昉長男)御事当分御湯治ノ由ニ御座候、扱先達テハ御尊母様御年賀御祝御催ノ由ニテ、御取看御祝酒、並御尊母様御手製ノ御手拭迄モ御恵与被成下厚忝拜領仕候、居ナカラ御イワキ頂戴仕候、旁御手厚御取扱被仰付難有次第奉存候、乍筆末御礼深々申上候、随テ私事無異毎勤仕候間、乍憚御放忘可被下候、以上、

近衛精君様並岡山様御逝去ニ付、今日表向御弘メ有之菅御座候処、少々御差支ノ儀被為在、後日御弘メ有之

趣取扱可仕旨、唯今九ツ過(昼午ノ刻)承知仕、夫故今日御弘メ無之、後日御弘メノ御賦ニ御座候、別文相認置候付此段申上候、以上、

七一〇 参考 島津久明家記抄

八月廿一日曇、五ツ時分ヨリ晴天

少將様(齊彬公)御四十一御厄年付、依御願〔マヤ〕鎗流馬御張行付嘉永三年己酉

若旦那様(島津久徵)御皆中、御皆伝、御射様尤宜

靱負様(久徵二弟赤山)右同 九ツメ

務 様(久徵三弟田尻)式本御中 四ツメ

又六郎様 靱負様 田尻務様、昨廿日大鐘時ヨリ大乗院へ御差出、今朝六ツ過ヨリ始リ四ツ前首尾能被遊御濟、稻荷社 住吉社へ御参詣、川上家へ御見廻、七ツ時分御帰殿ノ事、

御行列廻年頭ノ通

九月十六日

齊彬公御代初犬追物 御覧ニ付、暁七時ヨリ御差出、



御行列年頭ノ通、尤御出ノ節ハ夜中ニテ陸尺四人、御  
帰ノ節ハ御馬ノ賦候処、御登 城ニ付俄ニ御乗物ニテ  
候事、

御名代御勤ニ付於 御棧敷 御目見、引次射手ノ御方  
々看板拝見相濟、御打入ノ外戸ヨリ御入、供奉ノ家士  
御騷マツ副本田越之丞親番、御弓ノ役鍋倉仁右衛門清郷、  
御太刀ノ役内田十五長邑、御行騰ノ役左右萩田半次政  
行・伊東源七郎祐包、御鞭ノ役村田十右衛門昌高、御  
踏ノ役本田民之助親興、御矢殿馬殿岩崎瀧右衛門爲辰  
孰モ素袍・烏帽子・脇差帶、御馬立場御後ヨリ、御打  
入ノ外戸ノ方へ、垣ヨリ一間計相離並居候、

繩涯ノ犬一疋御当り、次手御検見首尾能為濟候、外  
ノ犬相濟御昼飯被召上、無間モ論之犬矢代有之、射方  
相濟ノ物迄首尾能相濟候上、下總様於マツ但論之犬ニ  
ハ御加り無之候、御棧敷御盃御頂戴御上段、引次川上十  
郎右衛門殿(犬追物師範)初御流頂戴被仰付候由但惣射手  
ト多人數  
頂戴御断、  
ノ由候

御肴一折御物(御物ハ藩庁ノ通唱)御取替ニテ御進上、

直成追テ代銀有之候事、

上様御帰殿ノ上七ツ前御登 城、鳴子口(城中奥ト表ト  
ノ堺ノ一座敷ニアリ)ニテ御側役衆へ御面会、御礼被仰  
上御退出、川上家へ御差出、大鐘時分御帰殿ノ事、

但

御役々並日置(島津久徵ノ領地日置郷ヲ云フ)御役々

ニモ御祝儀申上候事、

此書付薩州直書此書ハ伊達宗城  
公ノ御手書ナリ

表向御届

内密之書状

御相談申上ル書取

七一 嘉永三庚戌六月二十八日琉球国在留佛

人退去事件届書

六月廿八日之日付ニテ、八月六日御届相成候書面之  
写

私領琉球国へ滞留罷在候異国人共之儀ニ付テハ、追々

被仰達候

御趣意之旨相心得致指揮、佛朗西人ハ無異儀引払、嘆  
國人ハ未滞留イタシ居候得共、國中一統人氣モ平常ニ  
帰シ懸念之廉無之、此末帰国取計向等之儀精々及差因  
候趣ハ、昨年モ御届申達置候通御座候、然ル処当秋召  
列致參府候琉球使者玉川王子、今般致上着事情旁申出  
候趣ハ、最初ヨリ種々難題申掛、違乱等之心配ハ專佛  
朗西人共ニ候処、佛人引払後ハ嘆人ハ至極平和ニ罷在、  
間々非人体・盲目等之者見当候得ハ、致療養（伯徳令カ  
琉人ニ治療ヲ勸ル屢ナルハ後卷ニ記スカ如シ）可只扨ト申聞  
膏藥・菓子類相与候儀モ有之、医学相学候様追々相勸  
候へ共、唐国之医術往古ヨリ相学致用弁候趣ヲ以テ、  
程能致会釈候処、近頃ニ至候テハ、稀ニ妻子列立近辺  
致步行等聊難題申掛候儀無之、嘆人滞留逆何モ平常ニ  
相替候儀無御座、中山王始琉球役々共ニモ致安堵、国  
中末々ニ至人氣モ弥相治リ少モ掛念之廉無之、尤差戻  
方ニ付テハ厚 御趣意難有奉謹承候付、無油断致計策、  
追々唐国へモ願越被遊 御安慮候様取計可仕旨、撰政

・三司官共ヨリ委曲申越候上、右玉川王子江猶又事情  
細々申含越、稍安堵仕候儀ニ御座候、依之此末嘆人差  
戻方且取締向嚴重申付越候様可致候、此段御届申達候、  
以上、

六月廿八日

松平大隅守

七二二 嘉永三年七月八日琉球国在留佛人引払

云々届書

琉球江滞留罷在候佛人去々秋無異儀引払、嘆人ハ滞留  
イタシ居候得共、一統人氣モ平常ニ帰シ掛念之廉モ無  
之趣共、去夏国頭王子上国、事情細々申出候ニ付、御  
留守居勤大迫源七出府被仰付、阿部伊勢守様江御内御  
届被仰上置候処、江戸立使者玉川王子上着、琉球滞留  
之嘆人並妻子共別テ平穩ニテ、中山王始役々共ニモ致  
安堵、国中末々ニ至人氣弥相治リ、更ニ掛念之廉無之  
趣、撰政・三司官ヨリ委曲申越、玉川王子ヨリモ事情  
旁細々申出、則形行達貴聴稍被遊 御安堵候事ニ候、  
依之尚又平穩之形行阿部伊勢守様江御届被仰上度、別

紙御案文之通先月廿八日御日付被 仰付被差越候間、御留守居江モ被致吟味

少將(齊彬公)様被達 御聽、思召寄之処ハ何様共御取直被為在候様ト之御事候間、其段モ被申上、日積之上(記スカ如ク届出等一切如此日積等ヲナシタリ)被差出候儀共、御都合能可被取計候、此段御内用ヲ以申越候、以上、

戊七月八日

島津將曹

島津石見殿

七一三 嘉永三年七月八日島津豊後・末川近江

ヨリ島津石見江内分申遣小子江差出候

書面左之通

去年八月以来琉球逗留嘆人時々之形行、且又去年十一月七日倅国船一艘那覇江来着、彼国軍機大臣ヨリ互ニ有無之品致交易度趣等之書状持越、又ハ右船乗頭ヨリモ同様交易筋之儀申聞候付、去年年佛国大総兵来着之節、和信交易等相断候趣ヲ以相断、勿論逗留嘆人儀モ

早々迎船差渡列帰候様、軍機大臣江委細文ヲ以申越候趣共、琉球在番島津登・倉山作太夫ヨリ別冊之通追々

届申越候、然ル処嘆人一件今日便以別紙被及御届通ニ候得ハ、自然前条之次第外々江響合、彼是差障相成候テハ不相濟訳合ニ候間、急度不洩様可被心得候、別冊二齎リ相添此段以御内用申越候条、少將様(齊彬公)様可被達

御聽候、以上、

戊七月八日

末川近江

島津豊後

島津石見殿

七二四 齊彬公伊達宗城公へ御書

右之一条ニ付御相談申候書取

一 今度謝恩使上国之序、滞留嘆人之御届去ル六日差出相成候、右ハ前文通之事ニテ小子存意申上候(モ脱カ)テ詮モ無之、豊後・近江申遣候書面、御届トハ大相違(老等カ届書ト事実相違セルヲ幕吏質疑シタルコト数回ナリ、公ハ大ニ憂ヒ玉ヒシモ知政ニアラサル故預リ玉ハサルコト多シ、其事実ハ山口不及へ賜ヒシ御書中ニ就テ類推ス)

シヘニテ候得共、先其儘差出相成申候、然ルニ豊後等ヨリ之書面ニテハ、滞留嘆人天主教專申ス、メ我儘増長之様子、其去年十一月七日英船一艘渡来ニテ、英国軍機大臣之書面持越申候、右之趣意ハ滞留嘆人厚預手当忝、此上猶又折角可致友愛トノ事計ニテ、列婦之儀一円不申来、且以後琉英弁利之為メ諸色交易取結度、於承知ハ彼国商客差遣居住イタシ、商法取組兩國之利益可相計旨申来、尤乘頭ヨリハ書狀之趣不存由ニハ御座候得共、総理官面会之節、致商法候ハ、格別利益可相成段申候由、夫故早速評議之上、断之趣且滞留嘆人早々引取具候様之文言取仕立相渡候処、十六日早朝致出帆候由、且又乘頭ヨリ申聞候ニハ、又々返事可有之、六ヶ月モ相立候ハ、可致渡来趣為申由、

一 去年渡唐船滞留嘆人列婦之儀、唐国江及掛合候処、右返答、当年帰唐船持登候趣ニテハ、唐国帝承知ニテ廣東総督江命令有之候処、以都合英人江可及示談旨ニテ中々急速可相整様子無之、且又嘆船出帆後ハ滞留英人弥増我儘申立、英臣之中山那覇居住之者ト心得、英客

トハ申間敷、本国ヨリ如申来折角友愛可致、其外品々申立、存意通不相成候上ハ、以兵存意可相違外無之由、或ハ日本江服從之儀分明ニ可申聞段、種々申立候書面モ相見得申候、

一 余之ケ条ハ先ツ兎モ角モ、第一英船渡来商法申掛候一條、唐国掛合之条、並ニ日本服從之事申掛候ケ条、右三ヶ条御届不仕秘密ニ仕候儀、如何ニモ不相濟事ト存候、其上伯德令<sup>ベテレン</sup>迄モ列婦相成候ヘハ、国家之大幸ニ候得ハ、一度之御届手技ニ相成候トモ先可也ニ御座候得共、中々根強国風之由故、申出候上ハ容易ニ承引不致ハ必定ニ候、又当年蘭船風説之趣差<sup>承カ</sup>及候ヘハ、印度辺之英人專 皇国其外近国通商之心組（近国云々、琉球及ヒ薩摩ヲ云フ）有之ヤニ伝聞仕候、左候得ハ其手始めニ先ツ中山江參候ヤモ難計、且又数年嘆人滞留之上之儀、国中之形勢十分承知ニテ、以後渡来之節押付テ商客差遣為致居住候カ、又ハ用兵恐怖イタセサ候手段在間敷トハ不被申、左様之次第ニ相成候テハ、元来柔弱之人氣之上防禦手当更ニ無之候条、致承伏外無之、其時ニ

至リ兼テ御内命奉蒙候通、商法手細（弘化三丙午六月御下國ノ前頃密命ヲ云フ）ニ可取組申談候共中々承引不致、彼方十分ニ所置可致旨必定ト奉存候、<sup>（ハカ）</sup>

一万ノ右様之次第ニ相成、御届之節様子ニヨリ、去年渡来之事不申上候テハ不都合ニ相成事有間敷トモ不被申又 公辺ニテ異國之儀別テ御配慮中、厚キ御世話有之候御時節、渡琉之船主等ヨリ此儀響合可達 公聴モ難計、且又万一依時宜、中山渡来之暎船崎陽へ渡来可致モ難計、其節中山（琉球）江渡来之始末可申出モ難計、左候テ奉行ヨリ及言上、急度 御沙汰有之時ハ国家大變此時ト奉存候、

一事実細々御届申達候上ニ候得ハ、致方モ無之事ニ候得共、取カサリ候上中山（琉球）之依所置テハ、御国体ニ相響可申、左候得ハ

皇國之御恥辱誠ニ不容易一大事ト奉存候、且又御委任（丙午六月御委任ヲ云フ）トハ申ナカラ、依次第事実申上候ハ、又々

御差図之趣モ可有之処、致秘密置不申候テハ如何成<sup>（是脱カ）</sup>

御賢慮被為在候テモ、被仰出様モ有間敷、只々無事平穩ト被遊

御安慮候処ニ、万一不意ニ商法等之事御届申上候ハ、猶更 御配慮可被遊ト此儀モ恐入存候間、阿闍江及内奏候ハ、御所置之御一条ニモ可相成ヤ、当時中山之形勢ヲ病体ニ引競候得ハ、最早心肺之憂ニ相成候姿故、十分之手後レニテ全治之処無覚束、乍去空敷打過申候ハ、及死亡外無之、如前文病勢深重ニハ御座候得共、少シモ早ク治療相応之方法相用候ハ、可救手段モ可有之、一日後レニ相成候へハ、夫丈ケ勞レ相増可申ハ<sup>（手脱カ）</sup>必定ニへ、早速及内奏候ハ、良善之方法可有之ヤト、  
實ニ心配罷在候、右申上候内ニモ最早跡船渡来ニテ、難治之症致到来居候モ難計、此事承候ヨリ日夜心痛罷在候、

一右御届致相違候儀、無抛訳合可在之モ難計候得共、一通相考候テハ異船渡来商法申掛候儀御届差出候テハ、当秋琉人參府之故障ニ可相成、其外品々掛念之訳可有之存候得共、小事之儀 國家之大事ト引競候へハ九牛

カ一毛ニモ不及事、將曹等（碓氷）信実国家之為ヲ存候得ハ可申争儀当然ニ候処、機嫌宜敷ニ任セ候条、全ク自己之為ヲ計リ候心底、不相濟事ト存候、

一右ニ付種々及勘考候処、密々ニテモ阿闍江及内奏候テハ、同苗（齊興公）心得違ヲ顯シ、又ハ取カサリ候罪ヲ唱候様ニテ不孝之名難遁、先年人数相違之節ハ笑左衛門悪智ヨリ事起リ、其上事柄モ從此節ハ輕ク、又ハ以後改正之為ニモ可相成哉ト、美濃守（黒田長濤公）等江及内談、事実及内奏候へ共、此節ハ夫ヨリ重事之上度々事実相違之上ニ候条、如何様致歎願置候テモ何ト可被仰出モ難計、其処モ痛心之事故、從順之道理ヲ守リ閉口可罷在哉、一体ハ不容易家ノ大事ハ勿論

御国体ニモ響合候訳ユへ、同苗之取カサリ申候儀モ所存承リ、小子所存モ十分ニ可申聞答ニ御座候得共、御存知之通之都合ユへ中々以難叶、甚タ当惑仕候事ニ御座候、

一致再考候得ハ此儘ニ打捨置、万一外々ヨリ

公辺江響合 御沙汰相成候カ、又ハ異船渡来ニテ中山

英夷之手裏ニ落入候テハ

皇国之 御威光ニモ響キ可申、左候へハ奉始

京師誠ニ申訳之致様無之、千万年之後迄モ恥辱雪キ難

ク、同苗ハ（同苗云々、齊興公ヲ隱ニ云フ）勿論、国家一

變之基ト奉存候、左候テハ先祖江対シ候テモ不相濟、

小子ニモ先代ニ無ク昇進<sup>（之カ）</sup>モ被仰付、為名代下向之節（

弘化三丙午七月御下國）モ、先例モ無之 御座之間江被召

出、殊ニ厚蒙 上意施外聞、其外 御縁辺ニ付テハ是

迄格別難有条々モ有之候間、忠志ヲ專ラト心掛、事実

及内奏候方ニ可有之哉、

一右様之儀、両端之所置如何取計候ハ、

皇国之御一助ニモ相成、忠孝之道全ク、同苗並ニ国家

後患無之為ニ可相成哉、種々及工夫候テモ難及愚存御

座候、此儀不存内ハ致方無之候得共、承候テハ片時モ

難忘痛心仕候、一体先例異国御屈等之掛合ハ国元家老

連名ニテ申来候処、此節ハ御届書等將曹一名ニテ申參

候テ、事実之書面ハ豊後・近江両名ニテ申越候様子、

如何成都合ニ候ヤ難相分、家来へモ此儀承候処、皆々

不審之様子ニ罷在考付兼申候、豊後・近江ニモ意味合有之、心配之条無<sup>〔余カ〕</sup>抛内分之取計ニテ申越候哉トモ存候得共、遠路之事情差極難申上、一往内分ニテ問合セ申度御座候得共、遠国之儀手後レニモ相成申候、美濃守へモ早便ニテ相談申遣候へ共、是又遠国ニテ往返モ手間取り彼是心配仕候間、無余儀此段及御内談候条、何卒厚御憐察之上

尊慮之程無御遠慮御教示奉願度、不得止事此段奉申上候、將又奥平左衛門尉・南部遠江守へモ先日以來追々相談仕候処、兩人共致驚天、依事テハ、御国体ニモ響合候事ニテ、打捨候テハ如何ニモ恐入候間、内奏之方可然申聞候事ニ御座候、

一右之通故 貴所様ニモ内奏之方ト思召御座候ハ、内奏可仕候得共、夫ニ付テ

御沙汰等出候テ、同苗<sup>〔齊興公〕</sup>身分ニ障り候様ニテハ、甚タナケカシキ事ニ御座候間、何卒<sup>〔疏脱カ〕</sup>参府等無滞相濟候様仕度大願ニ奉存候条、宜敷御賢考可被下、ケ様之訳ニ相成候モ、全笑左衛門等同苗江事実取繕申置候悪習

ニテ、將曹初メ當時之者共ニモ、程能申置候ヨリ事起候儀ニ相違無之、如前文

皇国之御威光ニカ、リ候事スラ如斯ニ候間、國中一同疑念ヲ生シ<sup>〔調所・碓山等カ所為國中不服ナルヲ云フ〕</sup>混雜候モ無抛事ト実ニ赤面之至歎息仕候、

一疏国事実書面之儀ハ、要用之分写候テ近々可入貴覽候、先ハ御内々御相談申上度以書取奉申上候、猶其内拝眉可申上候、以上、

八月廿三日

此御書面ヲ以テ伊達公ハ阿部候へ内情ヲ明カサレシニ、阿部候了承セラレタリト云フ、

七二五 参考 島津將曹家記抄

故中城王子上国、出格之以御仁惠一世上国御宥免<sup>〔世子二世一回上国ノ例規ナルヲ特別宥免セラレタルヲ云フ〕</sup>被仰付候、御礼使者去夏義村王子被差上候処、勤事等御都合能相濟唐御料理進上、唐踊等被遊御覽御満悦被思召上、御内沙汰被為在、浦添王子・國吉親方迄被仰付候、

七二六 琉球国在留佛人退去届書

○本文書は、第七二一号文書と同文により略す。

七二七 嘉永三年七月八日琉球国滞留佛人引払

届書

○本文書は、第七二二号文書と同文により略す。

七二八 嘉永三年七月八日島津豊後・末川近江

ヨリ島津石見へ内分申遣小子へ差出シ

候書面左之通

○本文書は、第七二三号文書と同文により略す。

七二九 齊彬公伊達宗城公へ与ル書

○本文書は、第七一四号文書と同文により略す。

七三〇 旧貨幣引換

嘉永三戌年十月二十三日（吹塵録）

旧幣引替所来亥十月迄延ル、

七三一 考証 碓山將曹種子島六郎へ与ル手翰

○本文書は第七〇九号文書と同文により略す。

七三二 在琉外国人退去布告

琉球国へ罷在候異人共之儀ニ付テハ、最前

御直被 仰含

御趣意之趣厚被相心得、差戻方彼是配慮ヲ相加品々勘

弁之上被取計、既ニ佛朗西人之儀ハ無異儀本国へ引払

候段、先以一篇ハ

御安慮之儀一段之事ニ 思召候、乍去嘆国人未帰帆之

便宜モ不相分候へハ、全ク

御安心之御儀ニモ無之候、就テハ此度被致帰国候上ハ、

右等之所猶又厚勘弁ヲ相加へ、早速引払一刻モ早ク

御安心相成候様可被抽丹精候、若又相残居候嘆国人（弘

三年五月渡来）最早引払候段被承候へハ、早々可被申聞候、左

候テ琉球国之儀ハ勿論、自国之守衛逆モ跡々心弛ミ之



儀無之様、猶取締方嚴重可被申付、兼テ被

四月十六日

仰出候

御趣意相貫候様可被致候、此段申達候ニトノ御沙汰ニ

候事、

右之通一昨廿八日於御黒書院溜御老中様御列座、阿

部伊勢守様ヨリ御直被遊

御承知候、此旨御役人限奉承候様可申渡候、

島津將曹様

國吉親方  
小録親方  
與邦原親方  
浦添王子

正月晦日

以上記スルカ如ク去ル甲辰三月渡来ノ佛人ハ退去シタルモ、英国人(伯徳令夫婦)在住、頻リニ布教ニ従事シ人心ヲ懐ケ、傍ラ通信貿易ノ勤告等益々根ヲ深フシタルカ故、幕府モ前途ヲ憂ヒ斯ク鄭重ニ達セラレタルモノナリ、

七三三 〔浦添王子外三名連署書状断簡〕

〔前文欠カ〕  
趣其上踊獅子舞等ニ付、多人数上国之儀モ御都合宜訳

ニテ御沙汰被為在、翁長親方被召寄、義村へ被仰舍越候趣等国王具ニ承知被仕、誠以重疊難有仕合、御礼云

々略文セリ、